

---

# オモイノカタミビト

風紙文

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オモイノカタミビト

### 【Nコード】

N2179P

### 【作者名】

風紙文

### 【あらすじ】

人が死ぬと、人は色々な場所へと行く

例えば天国、例えば地獄

色々な場所がある

でもそれが実在するかは、分からない

何故なら死んだ人の話など聞けない、その後なんて分からない

だからこれは、誰かが考えたもの

人が死んだ後に、行く場所の可能性の一つに過ぎない。

## プロローグ（前書き）

オモイノシリーズ、掲載作品で始動しました。  
もしかしたら、長い話になってしまいます。  
よろしかったら、最後までお付き合いください。

## プロローグ

人間とは

一人で生きては

行けないもの

何かしらの形で誰かの

世話になっっているもの

それはよく分かっている

……つもり、だった。

そして人間は

死ぬ時は必ず

一人で死ぬもの

他者を巻き込まず、一人で逝ってしまうもの

それは分かっている

だから私は……一人で……

……ここは、この辺りで一番高い建物の屋上。

高度があるため、やはり風が強い。

髪の毛の長い人ならばさばさと舞ってしまっただろうが、私はボブカットにしてきたばかりで、そんなことはなかった。

鉄の柵に手をかけ、下を覗き込む……やはり高い、エレベーターで

30階まで上がったただけはある。

下を走る車も人も、全部が小さく見えるような高い場所、そこに私が居る理由は……。

「……いくか」

まず、柵を乗り越えた。

次に、靴を脱いだ。

お気に入りの、今日のために着てきた黒のワンピースのポケットに入れてあった物を取り出す。

財布、携帯、ボールペン、書きたいことを纏めたら三行だけで済んでしまった手紙。

そして……。

「……」

……うん。これは持っていこうかな。

右手できゅっと握りしめた。

そして、柵のほうを向いて……。

バツ、と……

後ろに、飛んだ。

## 第1話

……回りが暗い。目を開けてないからだろうと思ったが、眼は開いている。

しかしそれ以前に……。

私は、死んだ筈だ。

飛び降りて、手には確か……あった。

十字架のネックレス。私の唯一の心残りの欠片で、あの人からのプレゼント。

一緒に持つて行くつもりだった。死んだ人の棺桶にその人に縁のある物を入れて一緒に燃やす時のように。だから持つて飛び降りた。そして、持つているということは……私は死んだのか？

でも死んだからといって、絶対持つてるとは限らない。なら……私は生きてるのか？

分からない……今、私はどうなっているんだ？

私は……何なんだ？

そんな時だった。

コツチ ダヨ

声が聞こえた。水の中から聞いたような、聞き取りにくい、子供の  
ような声だ。

コツチ コツチダヨ

誰の声かは分からないが、私を呼んでいる。それだけは分かった。

コツチダヨ……ハヤクオイデ

私はおそろおそろの声の呼ぶほうへ足を伸ばしてみる。音も無く、足  
に地面を踏む感触が伝わった。床はあるようだ。感覚があるのは、  
生きてるからか？ 実は死んでも感覚があるのかもしれないな。  
そんな事を考えていたら、回りの異変に気付いた。

……誰がいる。右に2人、左に3人、右に1人増えた。前にも1  
人いるな。

コツチ……ダヨ……ハヤク……オイデ

皆、謎の声を聞いてその元へ向かっているんだろう。とりあえず一  
人じゃないのに安心し、私も声のする方向へと暫く歩いてみた。

しばらく行くと、周りのだれか達が急に止まった。私も合わせて止  
まる。

その時。謎の声が聞こえた。



ヨウコソ　　キミタチハ　　エラバレタヨ

声がさつきよりはつきりと聞こえる。やはりあまり年を感じられない声だ。

しかし……選ばれた？　そして君たち？

キミタチハコレカラ　　タイカイニシユツジヨウシテモラウヨ

大会？　出場って？

モチロン　　ユウシヨウシタラ　　ケイヒンガデルヨ

……景品？

マズハ　　イツカイセンヨハジメルヨ

一回戦？

ココデ　　サンカニンスウヨ　　ハンブンニサセテモラウヨ

この声は何を言っているんだ？　とりあえず、重要そうな単語を思い出す。

君たち。選ばれた。大会。出場……そして景品。

つまり私は、何かの大会に出場しているのか。死んだはずなのに……。

しかも、もう一回戦が始まるらしい、人数を半分にするって言うていたが、どういう意味だ？

その時だった。急に浮いた感覚に襲われ、そして、目の前が真っ暗になった。

私は思った。ああ……やつと死んだんだ。と、今のはきつと何か幻聴のようなものだったんだ。

これが死後の世界か、やっぱり、暗いな。

これで本当に……さよなら……かな。  
皆、そして……。

サヨナラ

そして目が開いた。前にはさつきみたいなきみtain空間がある。そして前には、誰かが立っていた。

「お前が相手か？」

声と姿を見る限り、二十代の男だ。手には何故か鉄パイプを持っている。

「俺は運が良いようだな、こんな娘が相手とは」  
何を言っているんだ？

その時だった、

「！！！」

男が鉄パイプを振り上げてこちらに突っ込んで来た。それを私の頭目掛けて降り下ろしている。

ガキンッ！

「つつっ！」

とっさに振り上げた両腕を交差して鉄パイプを受ける。  
かなり痛い……音がする。

「ふん。反応がいいな、だが、いつまで持つかな？」

ガキンッ！

男は再び鉄パイプを振り上げ、振り下ろした。

再び両腕に当たり、痛い音が……いや、痛そうなお音がする。  
何だ？ コレは？

「この……！！！」

2回当てても変化しない私に怒った男が鉄パイプを高く振り上げた時を見て、私は後ろに下がった。

そして腕を確認する。両腕共にあんな音がしたにも関わらず、よく動いている。血も出ていない、内出血すら無いようだ。普通ならば、

骨が折れていてもおかしくない音と回数だった筈なのに。それよりもだ。なぜあいつは攻撃してきたのか……。予想は……つく。これが一回戦と言っやつなのだろう。人数を半分にとは、一対一で戦って、負けた方が脱落。といった感じなのだろう。

なら話が早い、私も戦えばいいのか。

でも、もしも勝ったらどうなる？ いや……勝って、どうする？

景品の為に、何だか分からない物の為に戦うのか？

それ以前に、大会に参加するのか？ 今まさに死のうとしていた私が？

……だが、引っ掛かる事が一つある。景品についてだ。

決められた物の指定が無かった。それは何だっっていいって事に繋がるだろう。

……いや、この際何だっっていい。

もしかしたら、あの人に会えるかもしれないなら、せめてもう一度だけでも、会えるならば。

私は、大会に出る。

私は、戦う！

……とは言ったものの。どうやって戦えばいいか……。

相手は鉄パイプで、リーチが此方よりもある。いくら痛くないからと言っても、特攻はしたくないしな。

何か武器は無いのか？

その時だった。

コンニチワ

頭に、あの声が聞こえた。耳にではなく、頭に直接届けられている感じだ。

ツギハ アナタノバンデス

あなたの番？ 声は言葉を続ける。

アナタモ エラバレタモノトシテ エラブケンリヲエマシタ

選ばれた。選ぶ権利を得た？

アナタニトイマス タタカイマスカ？ ソレトモ コノママ

シニマスカ？

戦いますか？ それとも死にますか？

……簡単な二択だ。

答えは既に出ている。

私は戦いを選ぶ！

声には出していないが、頭で思ったその言葉をその声は聞き取ったらしく。

ワカツタ アナタハタタカイヲエランダ ナラ ソノタメノ

ブキヲアゲルネ

戦う方向で話が続いた。

アナタガモツテキタソレガ タタカウブキニナルヨ

持ってきたそれって……。

ソレヲモツテ ツヨクオモツテ タタカイタイ トネ

私は右手で握りしめていたそれを見た。それをそのまま再び握りしめて……思った。

私は 戦いたい！

すると右手から光が溢れた。元より暗い場所での急な光に、私は目を閉じた。

少しすると、光が消えた。私は目をあけると、そこにあつた物を見た。

右手には1メートル30優にはあろう十字架。左手、いや左腕には鎖が巻き付いていた。

私がつけてきた物が、持ってきたそれが、十字架のネックレスが、戦う武器になったのだ。

「これが……私の武器」

チナミニ　ブキニハソレゾレ　ノウリヨクガアルカラネ　ヒントハ……

あの声はまだ聞こえる。能力か……、声は、こう言った。

アナタノ　シニカタ　ダヨ

「……」

私の、死に方？

私は……。

その時だった。

「……っ！」

ガキンッ！

気配を感じた私は、即座に振り向いて十字架を前に出した。すると、男が降り下ろした鉄パイプに当たった。

「ちっ、運がいいな」

男は間合いを開けて鉄パイプを構えた。今まで静かだったのは気配を消して私の後ろに回っていたのか、だが急に起こった発光と、私の手に握られていたものを見て慌てて仕掛けたと。

「だが、いつまで持つかな？」

男が何か言った気がしたが、そんなのムシだ。今は能力についてだ。死に方、か……私は、あのビルから。三十階立ての屋上から飛び降りたんだ。

それがヒント？

何だ……飛び降り……降りる……落ちる……落とす？

……そうか。分かった気がする。私の武器の能力が。後は、試してみるだけだ。

私は十字架を前に構えて、男に向かった。

「おっ？ 戦う気になったのか？ だが残念だな、勝つのは俺だ！」  
ガキンツッ！

鉄パイプと十字架がぶつかる。

「私は……負けない！」

すっ、と左腕を前に出し、思った。

ジャラリ……

すると変化が起こった。

「なっ！」

男が気付いた時にはもう遅かった。左腕に巻かれていた鎖が伸び、

男の右手と鉄パイプに絡み付いた。

鎖は自由に動かせるのか、それなら次の実験だ。もし私の考えが当

たっていたらだが……。

私は絡み付いている鎖に、思った。

落ちろ

私の予想は、正しかった。

カラーン

男の持つ鉄パイプが下に落ちた。

「なっ……」

いや、違う。男が右肩から、鎖を巻いた方から床に倒れたのだ。その際に手から離れた鉄パイプが床に落ちて音を出した。

なるほど、私の武器の能力は落下……つまりは、重力か。

能力はこれでいい、そう思った私に新たな疑問が浮かんだ。

どうすれば勝ちなのか、だ。

私がさうのように、痛みを感じないこの男を、既に死んでいる私達をどのようにしたら勝ちなのか。

幸いにも考える時間はある。更に重力を加えた鎖により男は動けなくしたし、鉄パイプも男が動かない

限り届かない所に蹴り飛ばしておいた。能力を警戒したが、何も起こらない。心配するだけムダか。さて、どうする？ どうすれば勝ちだ？ 相手は恐らく私と同じ死者だ。

死者……私と同じ……死んだ者……私も……死んだ……自ら……自分で……自分を……殺した。

「……………!？」

私は首を左右に振った。こうやって、深く考えるのは昔からの癖だ。それで良い案が浮かんだことはあまり無い。

流石に自重しよう。特にこれからは、戦いの最中とかが十分にあり得る。痛みは無いようだが、流石にああなったら……………。

……………ああなったら？

そうか、それは今、実験できる。

もしも当たりならそれで良い。もしもハズレでも、それでも良い。試すなら今だ。運良く材料が在るのだから、試さないでどうする？

そして私は実験を始めた。

内容を言えば、右手に持った十字架を高く振り上げ、重力を掛けて、下に。

唯……………下に。

下に在るものの。ある部位目掛けて、振り下ろすだけ。

ドスッ

……私の予想は、当たったようだ。



## 第2話（前書き）

少女の冒険は、今始まった。

## 第2話

今私が見ている景色、言ってしまうえば。

大会の始まる前に見た景色、あの声が大会の開始を宣言した場所の景色。

……あの男と、戦う前の景色。

……端的に言えば、私は勝った。

もう少し言えば、倒せるか分からなかった男を倒す事ができ、私は勝った。

長く話すと……重力を込めた十字架を男の首目掛けて降り下ろしたら。倒せるか分からなかった男を倒す事ができ、男はその場で灰のように消えてしまった。

結果、私は勝った。

正直、後味は最悪だ。恐らく死んだ者だが、人を殺したのだ……いや、既に死んでいるだけだ。

でも、何でだ？

私は、男の首に十字架を降り下ろす事。あの男を殺す事に、躊躇いが無かった。

「……………」

私は首を左右に振った。今は考えるな、今は……

そう、今は大会の話をおの声か話しているのだ。聞き逃すわけにはいかない声は話している。

イッカイセンヲカッタミナサン　オメデトウ　コノママ　ニ

カイセンヲハジメマス

……相変わらず聞き録りにくい、別に文句は言わないが。

ニカイセンハ      イマイルニンスウノ      ヨンブンノイチマデ  
ケズリマス

4分の1か。

ルールハカントン      イマココニイルアナタタチガタタカツテ  
ソノカチスウノオオイジヨウイシャガ

ジュンケツシヨウニアガレマス      ナオ      キゲンハゼンインガゼ  
ンイントタタカッタトキマデデス

ヒトリニタイシテナンドカツテモ      サイシヨノイツシヨウイガイ  
ハ      カウントサレマセン

全員と戦うのか……辺りを見る限り、軽く50は居る。後ろは見えないからそれ以上だろうな。

ナオ      シヨウリジヨウケンハ      アイテノタイリヨクヲゼロニス  
レバカチデス

……ん？ 体力？

体力ってなんだ？      もしかして、あんな事しなくてもよかったのか？  
その後の声が、それを肯定して。そして否定していた。

その後、私はあの声があった言葉を繰り返していた。

私達には痛覚が無く、痛みを感じないようだ。しかし、体にはダメージが貯まって残るらしい。そしてダメージが最大限まで貯まると、私達は動けなくなり、それが敗北らしい。まあ、そのダメージは暫くしたら回復するらしく、戦いの最中でもそれはそうらしい。

……ちなみに、私があの時やったように人としての致命傷を与える  
と体力の減りは早いらしく、特に私は首を断ったので、一撃必殺になっ  
たらしい。

そしていま私は、よく分からない空間を歩いている。歩いているか  
ら床はある。前に進めているから、前はある。上は分からない、左  
右も似たような景色で、どこまで先があるのかは分からない。

ここで私と同じようなものと戦うらしいが、一向に出会わないな。その時、扉を見た。

いや、扉と呼んでいいものか。空間に浮かんだノブの付いた板。と呼ぶべきか？

なぜなら向こう側が在るからだ。板の向こう側に手を回してみると、板の此方に手が触れた。

……板だな、板としよう。ノブの付いた長方形の板が空間に浮いている。そう考える事にした。

……いや、無理だな。

取り敢えず。これがあの声が言っていた舞台の扉か。こういった扉が幾つもあった、その中で戦う事も出来ると言っていたな。

……入ってもいい、もちろん入らなくてもいい。そういう事なのだ。……どうするか。

まあ、物は試しか。

私はノブに手を掛けて、扉を前に開いた。すると光が漏れだした。まるで光の無い空間に、切り取られたような光、その中に私は入った。

扉を閉めると、空間には再び光が無くなった。

扉の奥は、一言で言えば……都会。街等が上がる。そんな空間。いや、そんな場所に、私はいた。

あの扉を抜けた先がこんな都会だとは普通は思わない。元より普通じゃないけど。

私は自殺者だし……でも動いているし……十字架のネックレスで戦っているし……

「……」

私は首を左右に振った。深く考えるな、今はこれが現実。私がいる場所なのだから、それを受け入れ、慣れてしまおう。

そんな訳で、あれから幾時間たったかは分からないが、幾時間ぶりの街を歩いていた。

道路には車が走り、歩道には人が歩いている。色々な店が建ち並んでいる普通の街並みだ。

しかし、何故こんな都会があるのだろうか？

深くは考えない、簡潔に考えて簡単な結論を出してみる。

ここは、いわゆるステージみたいな物なのだ。平坦で障害物も何も無いあの空間か、障害物だらけ、例えば木や建物がある空間。どちらのステージで戦うかはあなたの自由です。と、言ったあの声の計らいだろう。と、勝手に答えを出した。

さて、答えも出たので、やるべき事をしようと思う。

相手を探して、戦って、そして勝つ。ここに来たからには一戦はしないとイケない気がするので、私は歩きながら相手を探す事にした。

その時だった

「ねえ、そのキミ！」

後ろから声をかけられた。振り返ってみると、そこに声の主はいた。恐らく同年代だろう、帽子を被った青年だった。こちらに手を振りながら近づいてきた。

「何でしょう」

「キミ、アレ……だよな？」

「……！」

まさか、あちらから来るとはな……

「……あなたも？」

「そつ、宜しくな」

青年は手を前に出した。

「……」

「ん？ どうした？」

「……どうしたって、私達は敵同士ですよ？ 仲良くする義理はな

「い筈です」

「……仲良くする義理は、ないんだな？」

青年は手を下げて、静かな声で言った。

来るか？ そう思ったが、次の言葉は予想外だった。

「なら……仲良くしない義理もないよな！」

青年は再び手を前に出した。

「なっ！？」

「なあ、頼むよ、一人ってやっぱ寂しいじゃん？」

「……」

まあ、いいか、深くは考えない。

私は手を取り、青年と握手した。

「よろしくな……で、いきなりで何だが」

「？」

「腹減らね？」

「……」

またもや予想外な言葉だ。こういうタイプは昔から苦手だった。

……でも、改めて考えると、確かにお腹がすいている。死者なのに

？ ゾンビが人を食らうみたいなのかな？ でも確かに減っているのは事実だ。

「……」

「でさ、向こうに出店が並んでたからさ、行って何か食わね？」

出店か……それも久々な気がする。でも、

「別に良いですが、私は無一文ですよ？」

私はあの時、靴と共に財布やら何やらは置いてきたのだ。持つてき

たのはネックレス唯一つ、後なぜか脱いだ靴も履いていた。

だから……

「え？ 知らないのか？」

……何を？

これからは、新たに覚えた事は復習すると決めた。そうでもしなけ

ればおかしくなりそうだから。

という訳で、あの帽子の男が教えてくれた事を復習してみる。

「何故だか、俺達は財布を持ってんだ」

そうして探してみると、服のポケットの中に本当にあったのだ。しかも、前に使っていた。あの時置いてきた物と同じ財布だった。

「でな、その財布には特別な通貨が入っていて、扉を抜ける度に加算されるのだと」

そう言われ中を見ると、特別な通貨……見た目はどう見たって髭の生えたあの人の紙幣、それが三枚。

つまりは三千元……か？ 円では無い気がするから、三千、としておく。それが入っていた。

「扉事に配給される額は違ふみたいだけど、持ち越しが可能らしいぜ」

……つまりは、空腹になるなつて事か？ 他の物……例えば娯楽には使つてもいいのだろうか？

「ちなみに、その扉内の物は扉外には持ち出せない」

……訂正しよう、空腹を無くす為の通貨だ。

そうして私は今、帽子の男と共に食事を取っていた。出店とは言うても、販売カーだったので食べ物の種類は豊富だった。

見つけた一つのベンチに並んで座り、私はサンドイッチを、男はおにぎりを食べていた。

「しつかし、何で俺達が腹減る必要があるんかね？」

「そんな事を聞かれても知りません」

「だよな〜はあ、あの声に聞いたときゃ良かったよ」

「……あの声と、話したのですか？」

「ん？ いやいや、あつちが一方的に語っただけ、あんたも聞いてたろ？」

「……いえ」

「え、それってどういう事だ？」

「私は、勝敗の付け方を聞きましたか？」

「ええ！ 俺知らねえぞ！？」

「なら、教えましょう」

教えてもらったお礼にと、私は勝敗の付け方を男に教えた。その終了と共に、お互い食事を終えた。

「成る程なく体力をゼロにか……しかし、聞いた事が違うのはどういう事だ？」

「さあ……もしかしたらですが、私達は二組あるのかもしれない。それなら聞いた事が異なってもおかしくは無いです」

「ん〜そうかもな、でもこれから戦うって奴に、食事の方法を教えるって何でだろうな？」

「それも同じぐらい必要、という事なのでは？」

「なら、両方説明してもらいたかったぜ」

「確かに」

何か理由があるのだろうか？

おっと、また考える所だった。答えは出せないが、考えるのは後にしよう。

その時、ふと男が話しかけてきた

「そっいや、何か共通の話題ってあるかね？」

共通の話題か、この際だ。色々聞いてみよう。何かあるかもしれない。

「年齢は？」

「17だ」

「同い年。」

「高校生ですね？」

「ああ、でした。が本当だろうけど、高二だった」  
「同学年だ。」

「好きな科目とかは？」

「……なあ、流石にそれはやめねえ？ これは会話じゃねえじゃん？」

「確かに。」



「あ！ そうだ。一つあるじゃねえか、共通の話題が」  
「？」

共通の話題……何だ？

「あのさ、あんたの死に方は何だ？」

「……」

確かにそれなら共通の話題だが、そんな簡単に……まあ、いいか。

「私は飛び降り……30階建てのビルから」

「飛び降り！ 凄い事するねあんたは！」

「……そういふあなたは？」

「ん？ 俺はな……」

男は話し始めた。

### 第3話

ここは駅のホーム。電車が好きだった俺は、一番のお気に入りを見る為にここにいた。

アレはとても珍しく、日に四本走れば多いような、そんな電車。それ故にファンが多かった。

勿論、俺もその一人だった。

いつ来るか、まだ来ないか、待ち遠しく待っていた。

俺の電車好きはじいさん譲りで、小さい頃からよく一緒に見に行っていた。その頃からアレは走っていたな……。

そしてその時は、アレは、来た。

トンネルの向こうから見えた光、電車の姿が段々と見えてくる。

あの形…あの色使い…全てがいいな…。

快特とか特急とかあるけど、あれは普通でしか走らない。理由は知らないが、そんな所も合わせて俺は、あの電車が好きだった。

……さて、時間だな。

そろそろ行くか。

やはり待った甲斐があった。

やっぱあの電車がいいよな。

じゃあ……まずは謝って……

……ゴメン。

バッ

キキー  
- - - ツッ

ドンッ  
.....

ドシヤ

「.....」

電車による自殺か…普通は思いつかないな、そんな事は。

「でも、そっちの方が凄いやな？ 俺には飛び降りなんて考えられねえよ」

「そうですか？ そちらの方が痛みも凄いのでは？」

「いやいや、絶対そっちの方が痛いって、こっちは一瞬だよ、一瞬痛みはあるけど短いもんだよ」

「それでもです。知らないのですか？ 飛び降りるは地面に付く前の落下中にシヨックで死ぬのですよ？ 少なくとも私はそうでした」

「な…！ そうか…俺もそうすればよかったかな」

「ですが、決めていたならそれはそれで良いではないですか」

「まあな……でもあの後は大変なんだぞ？ 電車止まるし、ダイヤ乱れるし、死体片付けるし、車掌トラウマ持つだろうし」

「私の方も死体は片付けますよ、血は大部分を流したら後は雨任せですが」

「ふん」

しかし、今になって考えると私達は凄く話しをしているな。いくら共通の話題だからといって回りが聞いたらどう思うか。

そう思いながら回りを見回すと、こちらを見る人誰もはいなかった。ひよっとしたら同類が、とも思ったが、それも無いようだ。

「さてと」

男は帽子を被り直してベンチから立ち上がり、

「腹も膨れたし、そろそろ始めるかね」

あ……忘れてた。

そうだ、私は死者。景品の為に戦う、そんな者だった。

なのにさっきまでは、先程までの行動は、まるで人そのものだった。誰かと話し。何かを食べ。何かを語る。まさに人の行動だ。

でも違う……私はもう人じゃない。人だったものだ。

……でもさっきまでは……まるで……

「おーい、大丈夫か？」

「……！」

私は首を左右に振った。

危なかった。もう少しで考えの世界に入る所だった。

「おお！？ おい、本当に大丈夫なのか？」

「……はい、大丈夫です。早速始めましょうか？」

私は立ち上がり訊ねた。

「いや、人目は避けた方がいいだろう。どこか人のいない所を探そうぜ」

「はい、そうですね」

私達はその場を後にした。

路地裏に入り少し歩いた所に広場があった。元はビルでも立っていたであろう名残の鉄骨がはじに寄せてある。地面には雑草と小石と土が見えるだけの広場だ。

広場の奥側に立った男は帽子を深く被りつてこちらに振り向き、

「ん〜ここでいいか、人も人目も少ないしな」

「そうですね……では」

「ああ、どっちが勝っても恨みっこ無しだぜ？」

「元よりそのつもりで」

「……行くぜ！」

言葉と同時に、男はズボンのポケットから何かを取り出した。

予測はついた。あれがアイツの武器だ、とそれを確認する為手元を見た。

持っていたのは、小石だった。

何のへんてつも無い、そこらに落ちているのと何ら変わりの無い小石。男はそれを手に数個握っていた。

だが、どんな能力か分からない以上油断はしない。

その瞬間、フイを突かれた。

男の持っていた小石がこちらに向かっていているのに気付いた時には少し遅かった。

チッ ヒュン ヒュン ヒュン

何とか一発目が頬を掠めるだけにとどめたが、これでもダメージはダメージだろう。

油断はしない、先程言ったばかりなのにこんなにも早く……。

カキンッ カキンッ カキンッ カキンッ

「おお！ やるな！」

今度は油断はしなかった。

再び飛んで来た小石を、全て十字架で弾き落とした。

「ふ〜ん、やるねアンタ、十字架プラス飛び降りだろ？ どんな能力か想像できねえな」

「それはどうも」

私は分かった、アイツの能力が。

小石プラス交通事故…いや、交通自殺か？

そして小石をあのスピードで投げる。いや、飛ばす。

まるで、電車のように……

つまりは小石に電車のようなスピードを加えて飛ばすといったものだろう。

数で攻めるタイプか、私とは逆だな。

威力は小さいが（元より痛みは無い）当たり過ぎは知らぬ内にダメージが貯まる連続遠距離タイプ。

威力は大きいが間合いを詰めないと当たらない分、その補助機能を持っている単発近距離タイプ。

まさに真逆の戦いだ。

だからといって、ただ勝つだけだったが、とりあえずは手段だ。

どうにか勝つ方法を……

そう考えた時には、次が来た。

再び小石が飛んで来る。

計7つ、手前に3つ、その後に4つだ。

考えるのはこれを避けた後だな。

私は十字架を構え、まずは手前の3つを弾き落とした。更に後から来る4つに左腕に巻かれた鎖を放つ。

バチンッ　バチンッ

2つを弾き落とす。

残り2つ、それは十字架で弾き落とす為に再び構える。  
しかし、そう簡単にはいかなかった。

「甘いぜ！」

男は再び小石を投げ、そして手を上げて、命じた。

「速度変化！ 快特！」

新たに投げられた5つの小石は、速かった。

先の7つよりも速く、「今向かっていた2つの隣に並んだのだ。  
「くっ…」

カキンッ カキンッ ビシッ ビシッ ビシッ ビシッ

弾き落とせたのは手前の2つだけ、後は命中した。

痛みは無い…だがこれはダメージとして体に残るのだ。

マズイな…早く…早く考えるんだ。

## 第4話

考える……何か、勝つ手段を。

私の攻撃方法で出来る限りの技は、十字架と鎖で共に重力を加えることが可能。鎖は……………。

ああ、一つだけ思い付いた。それが可能が否か、答えはこれから分かる。

そんな時に、次は来た。

「速度変化！ 鈍行・特急・快特・特急・鈍行！」

投げられた5つは中央の1つから左右に行くほど遅いくの字型で飛んで来た。

しかし、対処方は出来たばかりだ。これが出るだけで技のバリエーションが増えるだろう。

私は左腕を前に出して鎖を伸ばした。ただ伸ばしたのではない、螺旋状を作り、盾のように前に構えた。

カシンツ カシンツ カシンツ カシンツ

螺旋にぶつかった小石は加えられた重力により地面に落とした。

そのまま私は螺旋の中心、鎖の先端部を男に伸ばした。

「おお！ やるな、だが負けねえぞ！」

男は小石を投げて命じた。

「速度変化！ 快特・特急・鈍行・快特・特急・鈍行・快特！」

小石は再びくの字型で飛んでくる。

だが私は気にしない、鎖に思いを込め、ただ操った。

鎖は小石と小石の間を抜け男へと向かった。



カシンツ　カシンツ　カシンツ　カシンツ　カシンツ

小石は螺旋にぶつかり地面に落ちた。

カシンツ　　ガツ

最後の1つは開けられた鎖の螺旋の中心を抜けて頭に当たったが、私は全く気にせず鎖を操る事に集中した。

「な……！」

男が驚き、再び小石を投げる為にとポケットに手を入れ小石を取り出した。

私はそれを逃さなかった。螺旋を崩し、その分の鎖も加えて、男を縛り付けた。

手にした小石はその際に地面に落とした。

「おお！　動けねえ……でもこれだけじゃ勝てねえぞ！」

分かっている。でもここまで来たら手段は2つもある。

1つは鎖を首に巻き付けるか、鎖の先端部で殴打する。

もう1つは……今、試す。

上手く行けば、あの時みたいになる。

……普通なら躊躇うものだが、私に、躊躇いは無い。

それでもう二回目になるし、アイツも言った。どちらが勝っても恨みっこ無しだと。

容赦はしないと。

よし、やろう。

私は男巻いた鎖を、左腕に繋がっている鎖を引き戻した。

重力を無くし、つまりは無重力になった鎖に巻かれた男は、

「おお！」

浮いた。そのままこちらへ鎖のままに引き戻される。

その間に十字架を構えた。まるで野球選手のように、片手で十字架を肩に掛け、一辺に重力を掛ける。後にはただ、向かって来たものを打ち返すだけだ。鎖に巻かれた男は、ただ鎖に引かれてこちらに……

そして

ドグシャ

「くはっ……」

十字架の一边が男の腹に突き刺さり、そのまま。打ち飛ばした。その際に重力を掛けたので、あまり飛ばずに男は下に落ちた。

ズシャー

男は地面を少し滑って止まった。

普通なら重症ものだが、男はあっさりと立ち上がり、

「いや、やるねアンタ。まあ痛みは無いんだよね。くはっ……とか言ってみただけど、実際はなんとも無いよ」

流暢に話した後。

「……でも、もう……戦えん……」

ドサッ

男はその場に倒れた。

私の勝ち……か。



## 第5話

あれから、色々考えた。

男に触れてみたら、動かなかった。意識が無いようにも見える。

考えた結果、まあ…別に待つ義理は無いのだが、取り敢えず男の回復を待っていた。

ある1つの疑問を説く為に。

「……ん」

起きたか。

「大丈夫ですか？」

「お？ まだそこにいたんだな？」

「ええ、立てますか？」

「おう」

男は立ち上がった。帽子に付いた土を手で払いながら、

「いやゝ負けた、負けた。アンタ強いね、一撃必殺とか俺は出来ないからさ、羨ましい限りだよ」

「いえ、あなたのも工夫次第ではかなり強くなりますよ」

「工夫次第で……さりとて言うねえ、まあそうんだけどさ」

男は帽子を被った。そのまま落としていた小石の回収を始めたので、

「ところで、1つお聞きしたいのですが？」

「何だ？」

聞いてみよう、疑問は残したくないから。

「あなたが倒れていた時、意識が無かったようですが………?」

「ああ、あん時か」

男は回収した小石をポケットに戻して、言った。

「確かに、意識は体の外にあったのかもな」

「どういうことですか？」

「あの声を聞いてた」

「!?!」

「そして教えてくれたんだ。あなたは負けましたってな、それと1つの伝言を、多分アンタ当てだ」

「私にですか？」

あの声が……私に？

「黒い扉の先にいる奴に会って、助言を貰えってさ」

「黒い、扉？」

「それは自分で探せとさ」

「……」

何だろう……扉を探して、助言を受ける？ 私は何かしたのか？

唯勝っただけなのに。

その時、

「なあ」

男が話しかけてきた。

「はい？」

「俺も行って良いか？ なんならさ、扉探すのも手伝うから……な？」

「……」

……まあ、いいか。

「はい、いいですよ」

「サンキューな、早速行こうぜ」

男は歩き出した。私は後に続きながら、考え事をしていた。

私が男に十字架を突き刺した時だ。確かに刺さった、刺さった筈だ。感触があったのだ。感触はあったのに……なのに、なのにだ。

血が付いてなかった。

そう言ったらあの時もそうだ、首を断ったのに、血が付くどころか、血は流れていなかった。

十字架にも血は付いていないし、私達には血は流れていないのか？

私は、私達は……何者、何だ……？

今となつては昔の話だが……私は研究者だった。名前ぐらいなら聞いた事があるだろう、平凡な病院の研究者だった。そこで行っていた研究内容の違い以外は、どこの研究所にもいそうな研究者だった。

だった……のだ。

扉を抜けて、何も無い空間に戻ってきた。空間に変わりは全くない、私が扉に入った前と同じで何も変わってはいない。

なのに私はといえば、色々変わったな。

まずは、一勝した。そして、

「ここはやっぱりわからない場所だよな」

その元対戦相手と行動を共にしている。

更には次の目的地さえも決まっているのだが……

「黒い扉だろ？」

「こんな所で黒い物を探すとは……」

「だよな……」

ここは回りが、言つてしまえば全体が暗い。故に全体が黒い。

こんな所で黒い扉を探すなんて、無茶にも程がある。

「はあ……大変じゃね？」

「確かに……ですが」

私は前に進み、探したしてみせる。もう逃げる事はしたくない。

あの時のようなことはもう絶対にしたくない。

「私は探しますよ」

なぜならこれが、今唯一の道なのだから。

「そう言つと思つたよ、俺も手伝うぜ」

私達は歩き出した。

簡単には見つからない、そう思っていた。  
何かしらの壁が立ちふさがる。それも思っていた。

それは、どちらも当たった。

「アナタ達、敵ね？」

私達の前に、恐らく同じ者が現れて前に立ち塞がった。

多分私より年上の女性、手には武器であろうナイフを持っている。

「なら、なんですか？」

男が挑発的に尋ねた。

「フフツ…言わずもがな」

ヒュッ      ピッ

女性の投げたナイフが私の横を通り抜けた、頬が少し切れたようだ。  
いや、切れてはいないな、唯、ダメージになるだけだ。それでも少しマズイか…。

女性は投げた筈のナイフを、指の間全てに持っていた。

「勝負よ！ 私の二勝目になりなさい！」

彼女も既に誰かと一戦交えた後のようだ。しかも勝つたらしい。

さて、どうするか…

取り敢えず前に進むにはあの女性を倒さないといけない。

扉を探す為には、あの女性を倒さないといけない。

なら仕方ない、戦うか。

十字架に手を掛けた。

その時だった。

「ちよい待った。俺に戦わせくれよ」

男が私と女性の間に入った。

「頼むよ、俺も一勝目がかかっているからさ」

「……わかりました」

十字架から手を離れた。

「サンキューな……よし！俺が相手だ！」

「フフ、あなたはまだ一勝してないようね？」

「だからなんだ？」

「フフ……力の差を教えてあげるわ」

「別にいいよ、オバサン」

「オ、オバ！？」

女性の顔に青筋が入ったように見える。いや、入ってるな。

「くらいなさい！」

女性は男にナイフを投げつけてきた。

「種類が似てると、対策が簡単だな」

男は小石をポケットから取り出し、投げつけた。

カキンッ   カキンッ   カキンッ   カキンッ   カキンッ

小石とナイフは全男と女性の間で相殺した。  
そして戦いが始まった。



## 第6話（前書き）

お気づきでしょうか？

実は彼女達、普通ならある筈のアレが無いんです。

もしも分かりましたら、回答をお送りください。

答えは、次の話で分かります。

## 第6話

他人同士の戦いを見ていて、ふと思った。  
彼らは何故戦っているのだろうか？

例えば、正義の為に戦う勇者。自らの野望の為に戦う悪役。何かしらの為に戦う主人公。理由は多種多様だ。  
人によりけり、様々。それが私達の場合は、景品の為にたったただだ。

…でも、ここに来た理由もまた、人によりけりだ。  
…それぐらいなら、聞いてもいいかな？  
うん…良いよな、私は1つの決心をした。対戦相手に、こう尋ねることにする。

あなたは  
どうやってここに  
来たのですか？ と

しかし……暇だな。  
私は今少し離れた所に腰を降ろして、遠くで戦う2人を見ていた。  
1人は帽子を被った男。もう1人は私より年上に見える女性。  
互いに遠距離連弾タイプで2人共に間合いを取って武器を投げつけている。

片方は小石、片方はナイフ、見た目だけなら圧倒的にナイフが有利だが、そうはならないようだ。

「……なかなかやるわね」

「アンタがやらないだけだよ、オバサン」

小石を投げる男の方が圧倒的に優勢だった。

先程私が勝ったとは思えない程に強い、手加減…をするようには見

えないし、しないだろう。

ならば、あの女性が弱いのか？

だとしたら、彼女に負けた相手は、相性が悪かったとしよう。

そんな時だ、

「チエツクメイトだ」

男が言った言葉は、本当になった。

男は四方八方に小石を、止めていた。

いや、停まっていたと表現した方がいいだろう。

「快特通過待ち合わせ……って勝手に名付けたけど」

男は小石を1つ投げた、回りに停まっている小石目掛けて。

「結構、便利だぜ」

その小石が横を通りすぎた時、停まっていた小石が動き出した。

「甘いわよ！」

ヒュッ ヒュッ ヒュッ ヒュッ

カキンッ カキンッ カキンッ カキンッ

飛んできた小石をナイフが相殺する。

でも、それだけでは足りない、

ガガガガガガガ

「かつ……」

停まっていた小石が通りすぎた小石を合図に幾つも女性に向かい、  
対処できていない。

結果、

ガガガガガガガガガガ

ゴスッ

最後の一発を頭に受け、女性は倒れた。

「やりい！ 俺の勝ちだ！」

男はブイサインをこちらに向けてきた。

私は軽く手を振ってあしらった。

…しかし、ああ見るとアイツは私より年下の少年に見える。

そして、アイツにも倒すことの抵抗は無いのだろうか？

私も最初から躊躇いは無かったが、アイツにも…か。

「やったぜ！ これで俺も、一勝したんだな」

「そうですね」

「……なあ、それ辛くねえ？」

「それ…とは？」

「その、妙な敬語だよ、俺達同年代だろ？ なら敬語はナシにしよ  
うぜ」

「…わかった。これからは敬語無しで」

「切り替え早いな…おっと、もう起きたか」

向こうをみると、女性が起き上がっていた。

「負け… 負けた… 嘘… 嘘よ！ 私は二勝目を手に入れるの…」

…て、そうか… なら… アンタを倒すまでよ！」

女性はナイフを投げつけた。

「次はアンタの番だぜ」

「…わかってる」

私は鎖を螺旋状に束ねた。前と違って、間を開けずに盾のように。鎖は更に伸ばしておく。

キンッ キンッ キンッ キンッ キンッ

「くっ…舐めるな!!」

女性は再びナイフを投げた。

「…遅い」

鎖を伸ばしておいた。つまりは盾を作りながら、盾を維持しながら、遠回りで女性の裏に辿り着いていた。負けたのが響いて、回りが見えてないな。その分やりやすかったが。

私は鎖を引き寄せながら、女性を縛り上げた。

「くっ……」

さて、聞くか、さつき決めてばかりの事を。

あなたは

どうやってここに

来たのですか？

「…はあ？ 何聞いてるのよアンタは、そんなの死んだからに決まってるじゃないの」

…そうだ、盲点だった。答える訳ないじゃないか。

それは相手に、自らの武器のヒントを与える事になる。

へたに聞くのはやめとておこつ。

でも、相手が語ってくれそうな時、その時だけは聞いてみよう。

……じゃあ。

ドスッ

私は二勝目を手にし、女性が目覚める前にその場を後にした。早足

で、  
仕方ないさ、彼女は今まさに二敗を手にしたのだから。目が覚めた  
ら、目の前の私達に襲いかかってくるだろう。  
だから、私達は走った。

## 第7話（前書き）

彼女たちに無かったもの、それは…

## 第7話

さて、改めて目的を探そう、黒い扉……黒い扉か……  
前にも言ったが、この黒の多い空間で黒いものを探すなんて無茶に  
も程が……

……あつた。

黒い扉だ。この暗い空間、真っ黒に近い空間に、光っている訳でもないのにその黒い扉は周りの黒にまぎれずに目に見えて浮かんでいた。

「……あつたな」

「はい」

「……どうする？」

「それはもちろん……」

ドアノブに手を掛け、回した。

回った。

前に押し開けて中に入った。

男もその後が続いた。

中に入って見た第一印象、例えるならそこは……書斎だった。

左右に身長よりも高い本棚が3つずつ、全ての棚に間隔無しに本が  
収まっている。

「はあ……すげえな」

男の感嘆の声は取り敢えずスルーして辺りを見回した。

本棚が並ぶ左右、その中央には机がある。机の上には、羽ペン・紙・  
本が数冊……

その置き方を見るに、読みかけの本を棚に戻さずに置いてあるとい  
う感じだ。

誰か居るのか？ 机奥の椅子には誰もいない、その更に奥はカーテ



ンのように波打つ先の見えない闇だ。

「何か用かな？」

「……！」

その暗闇の奥から、本を持った人が現れた。

肩より下の長髪で眼鏡をかけている。服装は白衣だ。

闇に反するような白衣を身に付けた二十代後半の……男、だろう。

だが違和感がある……まさか。

「あなたが……」

「私に用か？ 客は久しぶりだな、まあ座りなさい」

パタンツ                      ガタツ                      ガタツ

眼鏡の人が本を閉じた瞬間。闇から椅子が2つ現れた。

「おお！ すげえな！」

「……」

「掛けたまえ、そうしたら話を聞こうじゃないか」

「……はい」

私は椅子に座った。男も隣に座る。

眼鏡の人は机挟んだ椅子に腰掛けた。

本を机の上に置き、話し出す。

「さて……まずは自己紹介といこうか。私の事は、ハカセとでも呼んでくれ。生前は少しは有名な会社で唯一の女性研究員をしていた」  
女の人だったのか……そこに驚いていたら、

「君達の、名前は何だい？」

名前を尋ねられた。

「私は……」

「……あれ？」

「私の……名前は……？」

思い出せない。どうしてだ……。

「あれ……俺の名前って……なんだっけ？」

男も忘れているようだ。

そういえば、男に初めて会った時、自己紹介をしてなかった。

名前を聞かず、名前を言っていない、でもそれでもどうにかなってる。それも気になるが、まずは自分の名前が思い出せないのが妙だ。

「はぁ…仕方ないな」

八カセが溜め息を吐いた。

「まあ無理もないさ、何故なら我等は名前を無くしているからな」

「!!!」

「なっ…何だよそれ!」

「うむ、いい反応だ」

八カセは腕を組みにやりと笑った。喜んでいようだ。

「我等は死者と人間の間みたいな存在だ。人間の頃の記憶はあるが、ただ一つ、名前は置いてきてしまっているんだよ、それが今の所一番の研究対象なんだ」

「研究対象?」

「私はね、ここで研究をしているんだ」

「何故こんな場所?」

「理由は2つ、1つは私が研究員だったからだ。研究の対象がこんなにあって、放っておく事が許せなくてね」

「…2つ目は?」

「ここに来たからだ」

「……」

「嫌になつたあの場所を抜けて、新たに付いた所がこんなにも研究対象に溢れている。いいことづくめさ」

「それってさ…死んだって事だろ?」

「そのとおりさ、君もだろ、少年?」

「むっ…その言い方は何か嫌だな」

「なら自らの呼び名を考えたまえ、それで呼んであげよう」

「呼び名か……」

「……」

確かにこの先、自分を名示すものがあつた方が良さだろう。

丁度いいから、考えることにする。  
「頑張つて考えるよ……………若き選手達」

Hotel Aile

エルはフランス語で「翼」。何故こんな名かは知らない。何をしていた場所かもだ。  
ここについて私が唯一知っているのは、

私が、

飛び降りたビルの名だ。

呼び名を考えている時、何か縁のある物から取るう。そう考えていて一番に思い出したのが、そのビルの名前だった。  
ここから取るとすれば……………。

「……………」

「決まったか？」

「……………ツバサ」

「ん？」

「私はこれから……………ツバサ」

「決まったようだね、ではこれからはツバサと呼ばせてもらおうよ」

私           ツバサは、頷いた。

「改めてヨロシクな、ツバサ、そしてレイン」

「おう、ヨロシクなハカセ」

帽子の男は、レインに決めたようだ。

電車   トレインかららしいが、安易だな。

「無理に名乗る必要はない、ここに来た時に私がそう呼ぶだけだからな」

「いやいや、せつかく手に入れた名前だし、使わせてもらっぜ」

「ふふ…さて、君達は何用でここに来たんだい？」

「あ……」

忘れてた。

「何も無しには、ここには来れない筈だよ？」

「あの声から……あなたに助言をもらえと」

「私にか？」

「俺が聞いたんだぜ」

「ふむ…とは言われても、私は何も聞かされていないのだが？」

「あの声と…話せるんですか？」

「いや、昔からの縁というものだ。私も昔はそうだったのだよ、君達と同じ自殺者だった」

「え……」

「じゃあ、ハカセも大会に出てるのか？」

「だから、昔はと言っただろ？ 私は参加者だったんだ」

「もしかして…勝てなかったのか？」

「いや、決勝まで残ったさ、そこで棄権したんだよ」

「何故です？」

「先も言ったが、こんなに研究対象に溢れているのにそれを研究する者が誰一人として居ないんだ。ならば私がやる、と思っただよ、棄権したらこの場所を提供してくれた」

「……では、ここについてはとても詳しいと？」

「当たり前だ。かれこれ年単位で研究していると、私は思うよ」

「……では、聞かせて頂けますか？」

「いいだろう、聞かせてあげよう、私の研究途中を」

## 第7話（後書き）

そうです、名前でした。

人の数が少ないから名前で区別する必要が無かったんですよ  
ですが今回で彼女たちの名前が決まりました。  
それでは、これからもお楽しみください。

## 第8話（前書き）

今明かされる、ハカセの研究成果にして、この戦いの意味。

## 第8話

この大会は、死んだ人達、自殺をした者たちによって行われている。武器は死に際に持っていた、もしくは死体になつた後に最初に手が触れた物だ。

勝敗は相手の体力をゼロにしたら勝ち、普通の人間の致命傷は我等にも適用する。

痛みは感じないが、ダメージは体に貯まる。だが少しずつ回復していく。

食事は体力回復に関係ない。だが腹は減り、会話をして、他者と関わる。

「その辺は、普通の人間と同じだな、俺達」

「それだけ……わな」

「……では、何故この大会は開かれているんですか？」

「それは勿論、景品の為だよ」

出た。あの声言っていた景品。この大会において一番の謎だ。

「その、景品……とは？」

その謎を、ハカセはあっさりと答えた。

「生き返る事だ」

「!？」

「なっ……」

生き返る……事？

「嘘だと思つか？」

「……それは、転生という事ですか？」

「いや、元の自分に戻るんだよ」

「……」

「聞いた事ないのは仕方ないさ、これは二次予選を抜けた者だけが聞く事実だ」

「……それは、おかしいだろ？」

「それは、とはどういう意味だい、レイン？」

「だってよ…俺達は死者、しかも自ら死を選んだ自殺者なんだせ？ どうせなら殺されたり、病気や事故で死んだ人を対象にしたほうがいいだろ」

「その辺はよく知らん、あの声に聞いてくれ、だがな、私にも言える事はある」

「なんだよ？」

「例えば病気や事故で死んだ人を対象にしてみよう。大会に勝ち、景品を貰って生き返った…で？」

「で？ ……って何だよ？」

レインが首を傾げる横で、私は分かった。

「…また、死んでしまう」

「え？」

「ご名答、ツバサはいい感覚を持っているね」

「どういう意味だよ…」

「少し付け加えるなら、生き返るのは死ぬ直前だ」

「つまりは、まだ病気で苦しんでいる時や、事故に巻き込まれる寸前に戻る」

そうやすやすと回避できることではないものの直前に戻されてしま  
い…

「そのまま、また死ぬっていいのか？」

「そうなるね」

「じゃあ！ 俺達もそうじゃないのか！？ 死ぬ直前に戻されても、また自殺するだけだろ！？」

「それはない、私は幾人もの選手に会ってきたが、大会が変わる度に同じ奴には会った事はないよ」

「じゃあ…何で俺達何だよ…」

「その辺には、もう確証があるのだよ」

「確証…」

「君達には、共通点があるのだ」



「……………」

共通点……………か、自殺者……………だけじゃない、何かしらの共通点……………。  
私は……………、

「……………心残りがある」

「なっ……………」

「ほう……………ツバサには何か心残りがあるのだね？」

「……………」

黙って頷いた。

「レインはどうだ？」

「……………俺も……………ある」

「決まりだな、そうさ」

この大会の意味は、心残りのある自殺者を集めて戦わせ、優勝者には景品……………生き返らせて、心残りを晴らして、再び死なない

ようにする。これはその為の大会なんだよ。

## 第9話

いつでも来な、鍵は開けておくからさ。まあ居ない時も、気づかない時もあるけど。

そう言い残したハカセは椅子の向こう、闇の中へと消えていった。なので私達は部屋を出た。

「しかし、色々分かったけど……色々謎が残ったな」

「そうですね……」

自殺者だけの大会。生き返る景品。心残りを晴らさせる為。分かった量と同じの分からない事が、天秤のもう片側に乗ったような感覚。

つまりはプラスマイナスゼロだ。

「まあ……その謎も、いずれは解けるでしょう」

「そうだよな……うん。そういう事にしておこう」

そして私達は、扉の前で別れることにした。

「また何処かだな」

そう言い残して、帽子の男、レインは歩き去って行った。

さてと……これからどうしよう。

とか思いながら歩き続けていると、扉にぶつかった。

コツン、という軽い音で気付き、目の前の扉を見た。

前に入ったものとも、あの黒い扉とも違う、始めて見る扉だ。

……入ってみるか、

ノブに手をかけ、扉を開き、中に入った。

そこは海岸だった。

扉を出た目の前に広がる海と砂浜、そして向かい合う者が2人、今

まさに戦っていた。

多分同じ自殺者だ。普通の人が出来ない事を簡単にやっているからなおさらだ。

私は少しだけ近づき、隠れて見ていた。

どうせ戦うのだから、少しでも相手の手を見ておくのは悪くない。今戦っているのは、

右には私より年上だろう大柄な男、手には鋏。

左にも……男、だが年上ではなさそうだ。同い年かもしれない。頭にはハンチングをかぶっている。

長袖の服に包まれた両腕には何かを巻いているが、手には何も持っていない。

その時だった、

「そろそろ終わりにするかな」

大柄な男が言うと、

「そうだね」

長袖の男は返した。

そして大柄の男は、

「はあ！！」

ジャキン！！

鋏を一回開けて、閉じた。

それだけで鋏が、剣になった。刃の先端に新たな赤い刃が付いている。あれは……血か？

何か久々に見た気がする。私達には血が流れていない筈だから、あれは武器の能力だろう。

つまりあの男はあの鋏でどこかを切って死んだのだろう。

「くらえ！」

大柄な男が近づき、鋏の剣を振り上げ、降り下ろした。

「甘いよ」

キンッ

男は右腕に巻かれた何かで刃を守った。

「くっ、またか……」

「これがイヤ？ なら……外してあげるよ」

そう言つて男は左手で、右腕に巻かれている何かを外した。

そして、

「ほら」

その何かを大柄な男目掛け投げつけた。

「舐めるな！」

ガキイン

大柄な男はそれを鉄ではらった。

その時の音と、さっきの音とで、その何かは金属製だと分かった。

その瞬間。

「じゃあ、終わりだよ」

シパッ

スパンツ！

「かはっ……」

大柄な男はその場に倒れた。

今、何をしたのか……？ 見えたのは、何かの外れた右腕をただ前に付き出したハンチングの男。

そこから水みたいな何かが現れて、大柄な男の首に命中して、大柄な男がその場に倒れた。

ただ何かがあつて、大柄の男が負けて、ハンチングの男が勝った。

それだけは分かった。

「……そのアナタ」

気付かれた。

バれているなら仕方ない、私は隠れていた所から出てきて、男に近づいた。

改めて男を見る。長袖の上着に長ズボン、腕にはその何か、頭にはハンチング、帽子が流行ってるのだろうか？

男は外した右腕の何かをまた巻き直している。

「これは、ブイですよ」

長袖の男は教えてくれた。

ブイって事は……浮き？ でも、キーンって金属どうしがぶつかる音がしたが、

「ちなみに金属製です」

そうか、なら納得……ん？

「それって、浮きますか？」

「いや、沈むね」

「……意味、無いですよね？」

浮くためのブイが金属製で沈んだら役立たずにもほどがある。

「まあそうだね。もしよかったら少しお話しませんか？ 戦ってもいいですが、ダメージが無くなってからにしてください」

「……はい、いいですよ」

## 第10話

そして私と長袖の男は堤防に腰掛けた。

そこでふと、男が話しかけてきた。

「あなたは、自分の名前を覚えていますか？」

この男も気付いたのか。

「いいえ、あなたは？」

「それが……思い出そうとしても、どうしても名前だけは出てこないの」

「……それはですね」

「何か、知ってるの？」

「はい、一応」

私はハカセに聞いた事、名前は忘れてしまい、自ら新たに名前を考えて名乗っていることを教えた。  
そして名乗っておいた。

「私のことはツバサって呼んで下さい」

「ツバサ……良い名前だね、私は、どうしようかなー」

ん？ 今、なんて……？

「そつだ！」

男？ は正面を、海を見た。

そしてハンティングに手を掛けて、

「私の名前は……ミナト」

ハンティングを取った。

同時に潮風が吹き、私は驚いた。

ハンティングから出た。私よりも長い黒髪が風に流されていたのに。

「それ……」

「気付かなかった？ 私、女だよ？」

気付かなかった。私よりも全然女っぽい。黒髪もハンティングのせいで気付かなかったし、

「……全く」

「いいよ、分かっててこれ被ってるんだから」

「年齢は？」

「15だよ」

年下か。

「私は17」

「年上か？ やっぱ目上には敬語とか使わなきゃいけないかな？」

「別に、気にしてないよ」

「良かった！ 敬語って大変だよな」

「そうだよな」

私も敬語をやめた。

「しかし、これには驚いたよね？」

「この大会のこと？」

「そう！ 死んだ人に話は聞けないって言うけど、まさかだよな！ 顔をずいっと近づけてきて驚きを表したミナトに私が驚いた。

「そう、だね……」

「しかも、私達には痛みが無い、でもお腹は減る。そして戦う、何か分からないけど……何かこう……とにかく凄いよね！？」

「う、うん」

何だ？ 最初に会った時と全然性格が違うじゃないか。

こんなに明るい子が、何故自殺なんて……

聞いてみるか？ 答えてくれないかもしれないけど。聞いてみて損は無いはずだ。

「……ねえ」

「はい？」

あなたは、何でここに来たの？

「……何でって、死んだからだよ？」

「それよ、あなたみたいなのが、何で自殺なんて」

「え、よく私が自殺したって分かったね？」

そこからだったか。

「……あのね、実は……」

私はこの大会の参加者は自殺した人だけだということ話を話した。

「へえ……じゃああの男の人も、最初に戦ったあの人も、そしてツバサも、私も皆、自殺した人なんだ」

堤防に寝転がり、ミナトは空を見上げた。

「そうなんだよ」

「でもさ、何でツバサはそんなに詳しいの？」

「それは、詳しい人がいて、その人に聞いた話なの」

「へえ、私も会いたいな」

「それで、ミナトの……」

「うん。私の死に方だよな？ そんなに聞いたし、私も教えてあげるね」

そう言って空を見上げたまま、ミナトは語り始めた。

園に1人は居る。

ませた保育園児

クラスに1人は居る。

絵の上手い一年生

病弱な二年生

頭が良い三年生

ピアノが弾ける四年生

眼鏡で読書家な五年生

リーダー格な六年生

学校に1人は居る。



静かで暗い中一  
運動神経抜群な中二  
近くて遠い傍観者な中三

それが私だった。

ある時から、自分が分からなくなった。

だから、色々と試してみた。

時に明るく、時には暗く、皆と接してきた。結果はどれも上手かった。だから、

もっと分からなくなった。

自分は何なんだろう？

そんな時に、こう思った。

自分は、別に居なくても変わらない。どんな自分でも、変わりはない。

どの自分でも、似たような人が他に一人はいた。

だから、居ても居なくても同じだった。

と、思ったから

居なくなってみる事にした。

「それでね、その時の私は使えない物を作ってたんだ。書けない鉛筆とか、消せない消しゴムとか……この」

ミナトは両腕を前に上げ、

「浮かないブイ、とかね」

「それで……水死を？」

「うん」

「……大変じゃなかった？」

「……」

ミナトは両腕を下げて、起き上った。

「大変だったよ、死ぬ事に抵抗は無かったけどさ……息苦しくなつて……そして……死んだの。ツバサは？」

「私は、飛び降りて」

「飛び降り！？ そっちの方が大変じゃない！？」

「そうでもないんだよ？ 実は……」

……あれ？

こんな話、どこかで……

ああ、レインとだ。

やっぱり同年代とは話が合って、話が続くな。

つまりはそれだけ、同年代の自殺者がいるって事なんだけど……

悲しいような、助かったような……

「さてと……」

ミナトは堤防から降り、砂浜に足を付けた。振り向きながら、

「そろそろ……勝負しよっか？」

「……うん。そうだね」

「場所はどうする？ この辺りは人目無いし、どこでも行けるよ？」

「なら……ここで良いんじゃないかな」

「うん。じゃあ、始めようか」

私は堤防を降りた。ミナトは数歩海岸へ歩いて私の方を向き、

「行くよ……ツバサ」

構えた。

私も十字架を右手に持った前に構える。

「いつでも……ミナト」

海岸に風が吹いた。  
互いの髪を流し、風は去っていった。

## 第10話(後書き)

今回(前回?)から登場したミナト。彼女が演じた人達、クラスに一人はいますよね?

もしくは自分がそうだったとか、ありますかよね?

## 第11話

そして戦いは始まった。

ミナトは間合いを詰め、

「はっ！」

右ストレートを放った。

「甘いよ」

私は十字架を前に構え、防御の姿勢をとる。

ガキンッ

ミナトは拳が十字架に当たる寸前に肘を曲げ、腕に巻かれたブイに当てる。

続いて左ストレートが来る私は十字架を右に払い、ミナトごと右に受け流した。そのまま直ぐに鎖を飛ばす。

「そっちこそ甘いよ」

ミナトは素早く半回転、私の方を向き、右手を伸ばした。

カキン

乾いた音がした。鎖の先端を見るとそこには、水色の鎖があった。

鎖の元は、ミナトの右腕のブイからだった。

「私ね、色々な物作ってたからさ、こつゆつの得意なんだよね」

水の鎖がブイの中へと戻って行く、

「さあ、続けるよ」

ミナトは特殊なタイプだ。基本攻撃は拳による近距離、腕に巻かれたブイにより守りは硬い。その上、能力が水の生成によるあらゆる道具の創造。基本は水だからどんな形でも作れるだろう。

遠近両用の万能タイプだな。

「はっ！」

ミナトは水の鎖を再び飛ばした。私もそれに対抗して、鎖を飛ばす。

カチン

水が形を変えて、鎖の先端部が繋がった。鎖を封じるためだろうか。それを見て私は、鎖を引つ張った。

「えっ！」

予想外だったんだろう、驚きの顔をしながらミナトがこちらに引つ張られて来た。

「か、解除！」

バシヤア

水の鎖が水に戻り、砂浜を濡らした。

ミナトは砂浜に足を付き、そのまま攻撃に移った。両腕を前に出すとブイから水が零れ出し、個々の水滴になった。

その水滴はまるでナイフを形作ったような変化を起こし、その状態で、

「飛べ！」

こちらに向かって来た。

だが怯まない、似たような技は見たから対処は可能だ。

鎖を螺旋状に集めて、前に固めた。

バシヤア　バシヤア　バシヤア　バシヤア

鎖に当たり水のナイフ崩れて、想像できる音が聞こえる。

鎖が水で濡れた。よく見るとその水は細い鎖でミナトの両腕のブイに繋がっていた。

「変化せよ！」

鎖の濡れている部分の水が再びナイフを形を作り、鎖のこちら側から飛びだした。

普通なら避けられない超至近距離の攻撃、それを私は、

横目で見ていた。

あの時と同じだ。

螺旋を前で維持したまま、鎖を伸ばし続けて遠回りに相手に近づくだけ、あの時は怒りで回りが見えてなかったから上手くいったが、今回はそうはいかなかった。

「そつちか！」

近づいてくる私を見つけたミナトは、右腕のブイを外して、

「てりゃ！」

投げつけてきた。

これは、あの技か。さっきもそうだったが、この後の一発はよく分からなかった。

対処法がわからない以上、取りあえずは、

カギイン

投げられたブイを十字架で払い落とし、十字架を横に構えた。首とか心臓とか、取りあえず人体の急所を防ぐことにした。

その瞬間だった。

シパッ      シパッ      シパッ

カキン      カキン      スパンッ！

二つは守れた。

一つは……左腕に当たったな、痛みは無いが、この攻撃により、2つ新たな事を知った。

一つは、今の攻撃の正体。今のミナトは金属製のブイをそれを両腕に巻いている。

それはは重りになり、リミッターになり、枷となっていた。

そんな物を腕に巻いて動いてたら自然に力がつく。そして枷を外したらその力は、普通より遥かに凄いものになる。

つまりは、その腕を素早く振るって水を飛ばしている。ウォーターカッターと同じ原理だ。

それを首に浴びれば、普通は真っ二つだ。

そしてもう一つ。ミナトは、手から水を直接出している訳じゃなかった。

水を飛ばす際に開かれていた手に、水の発生源を見つけた。

それは、ペンダントだった。

あれがおそらく、ミナトの本当の武器なんだろう。



## 第12話

攻撃が出るであろう右腕を見ていたら見つける事ができたのだ。  
ミナトの右手の中に握られていたペンダントを。

鎖で繋がっている所は私の十字架と同じだが、その鎖に付いているのは、確かロケットと言われる物だ。

ああいう物は確か、写真を入れる物だよな……？

……もしかして

シパッ シパッ シパッ シパッ シパッ

カキン カキン カキン スパンツ！ スパンツ！

再びの水切り、二発が両足に当たった。

痛みは無いし、足が動かなくなるといふ事も無いが、これは恐らく相当なダメージだ。

いつ倒れるか分からないからな、これ以上のダメージは避けたい。  
取りあえずは、

ジャラ

「なっ！」

鎖をミナトの右腕に巻き付けた。

ブイを外さなければ水切りは出来ない。

そう思っていたら、その間に左腕のブイを外していた。

投げはせずに砂浜に落とすただけだが、それだけでも水切りは、

シパッ シパッ シパッ

放てた。

カキン カキン カキン

全部十字架で守ると、

「まだまだ！」

ミナトは鎖の巻かれた右腕に水を溜めて鎖を伝わせた。水が鎖を渡り私の左腕に向かう。

予想は出来た、伝わせた水をナイフが何かに変化させようとしている。

だからそのミナトの予想を、裏切ってみた。

ガシャーン！！

「ええ！？」

驚くのは無理もない、まさか伝わる水ごと鎖を破壊するとは思えない。

重力をかけた十字架を、鎖の一点に叩き落とした。

結果鎖は離れ、もとい壊されて砂浜に落ちた。伝っていた水はそのまま砂浜に染み込んでいく。

「なっ！」

ミナトが私の予想外の行動に驚いている。今がチャンスだ。

ジャラ

途中で千切れた鎖を再び伸ばして、ミナトの左腕に巻き付ける。  
「しまった!!」

後は簡単だ。

両腕の鎖をほどこうとしているミナトに十字架を向け跳躍し、

十字架を振り上げ、

重力をかけ、

振り降ろした。

ドスッ

「!!」

ミナトの左肩に突き刺さった。

後はそのまま、下へ落とすだけで……

「あゝあ、負けちゃった」

## 第13話

「いや、ツバサは強いね、私の負けだよ」

「ありがとう、ミナトも強かったよ」

結果として、私は勝った。

気絶していたミナトが起きるまで待ち、私達は堤防に座っていた。

ミナトはまたハンチングを被り直し、髪は全てハンチングの中に閉まわれている。

うん。こうして見ると、やっぱり男みたいだ。

年下だから、男の子みたいだ、か？

それはともかく。

「ミナトの武器って、そのブイじゃなかったんだね」

「うん。こつちだよ」

ミナトはブイの巻かれた両腕をこちらに向けて手を開いた。

そこにはやはりペンダントがあった。私の十字架の物よりも細い鎖に、雫形の水色のロケット。それが両手に片方ずつにあった。

「ペンダント……私と同じだね」

私も十字架のペンダントをミナトに見せた。

「おお、それか、とても強かったよ、それ」

「これはね……ある人から貰った大事な物だったの」

「あ、私も私も」

そう言ったミナトは

カチ　カチ

ロケットを開いた。そこには写真が納まる窪みがあった。写真は…

…無い。

「これね、私のお母さんとお父さんからの形見なの」

「!?!」

今、さらつと凄い事を言つた気がする。

「あ！ 私が死んだからだよ？ だから2人からの形見……あれ？  
それは何か変だね、えつと……この場合は何て言えばいいのかな  
？」

「……分からない」

そんな事言つたら、レインの小石も、

あの女の人のナイフも、

この私のこれもそうだ。

これ等は何と言うんだ？

「ん？ どうしようか？」

どうしようか？ と言われても……

あ、そうだ。

「ねえミナト、ハカセに会ってみない？」

「ハカセって、ツバサに色々教えてくれた人？」

「うん」

この世界の研究者だ。必ずこの物の名前も知っている筈だ。

「その人に会えば、この呼び名も分かるかな？」

「多分ね」

「うん。私、ハカセに会ってみたい」

「決まりだね、行こ」

私が堤防から降り、砂浜に足を付けると、

前にあの男がいた。

さつきミナトが戦い、首を断られた大柄な男だ。

私と戦いに来たのか、私を見つけて戦いたいのか、鉄を持って立っ  
ていた。

「……ミナト、離れてて」

「うん。頑張つてね」

ミナトは堤防の向こう側に降りた。

ジャキン

男は剣を剣に変えた。

私は十字架を構えた。

潮風が流れ砂を運んでいる。

風が止んだ。

瞬間。行動に移った。

剣を持つて男が突っ込んで来たのを左に避け、鎖を剣と体に巻き付けた。

だが、男の目は前を見ていた。私ではなく、ただ前を、鎖で動きを止められても尚、前へ進もうとしている。

……この男、私を見てないかもしれない。

恐らくは、さつき殺られたミナトを倒す為に来たのだろう。

必ず会えるとは限らなかったのに、それに二回目は勝っても意味がないのにな……

これはとても

殺りやすいな

ドスッ

という訳で、私達は八カセの部屋に来ていた。

ちなみにあの勝敗は、後頭部に十字架を刺し込んだ私の勝ちだ。  
動かなくなった瞬間に、

「行く、ミナト」

逃げるように扉を抜けて走って来た。

「入るよ」

「うん」

黒い扉を開け、中に入った。

### 第13話（後書き）

今日はクリスマスですね、ですが予定も無いので更新します。  
後、今日は新たな連載作を始めることとなりました。  
よろしかったら、そちらもご拝読を。



## 第14話

「おや？ ツバサじゃないか、どうしたんだい？」

ハカセは椅子に座って本を読んでいた。

「こんにちはハカセ、少し聞きたい事があつて」

「ふむ、その前に一つ、君は誰だい？」

ハカセは私の隣にいるミナトを見た。

「こんにちはハカセさん。ミナトっていいいます。ツバサの友達です」

「ほお、ミナトちゃんね、よろしく、私の事はハカセと呼んでくれ」

「了解です、ハカセさん」

「ハカセ、で結構だ」

「はい、ハカセ」

「うむ、それで？ 聞きたい事とは何かな？」

「はい、これに付いてなんですが……」

私とミナトはペンダントを出した。

「これに正式な呼び名はあるのですか？」

「……」

訊いた瞬間、ハカセは黙り込んだ。部屋には沈黙が響く。

「……もしかして」

ミナトの言葉に、ハカセはようやく口を開いた。

「……それはね、いわゆる正式名称というものは無い、あえて呼ぶなら……ふむ……」

「……もしかして、今考えていませんか？」

「……うん」

ハカセは正直に答えた。

「仕方ないだろう、自殺した時に持っていた物で、それを武器に戦う、それについてはよく分からのだよ」

「死ぬ間際に持っていた物というぐらい、ってことですね？」

「うむ……そういえばこんな話がある。その者は死んだ時に、飼い犬

に覆い被さつたらしいが…持って来たのはその首輪だけだったらしい」

「生き物は駄目、ってことですか」

「いい機会だ。私達で名付けてしまおうか？」

「え？ そんな簡単に…」

「良いのさ、研究者の私が良いと言ったんだ。誰にも意義は問われないさ」

「そういうもの…ですかね？」

「そういうものだ。さあ、考えようじゃないか」

それから数分後

「では、これで決まりだ」

「はい」

「意義は無いです」

私達の持つ武器の名は、心残りの塊、誰かからの餞別。

そして、思い形見と名付けた。

「…で、この思い形見は物に込もった誰かの思いが力になると」

「その考えは少し違うな」

ハカセが語りだす。

「名前は無かったが、思い形見関連で武器について調べた結果はあるのさ」

ハカセの言った事はこうだ。

私達が死んだ時に持った物、死んだ時に手が触れた物が思い形見になる。つまり力が込もっているのは物ではなく、手の方なのだ。また、その手の力が、私達が選手になれた理由、心残りなのだ。

「ちなみに、私の思い形見はコレだ」

そう言つてハカセが取り出したのは、本とペンだった。

「ちなみに私は過労死でね、能力は言うなと言われているから、聞かないでくれ」

「それで、心残りは…」

「ふむ…恐らく研究への探究心だな、私は研究と結婚したいと思っている程の研究オタクだからね」

「ハカセってスゴいな〜いったい幾つなの？」

「もう忘れたね、何年も研究に没頭した私に年齢は関係無いのさ」

「…ただ言いたくないだけじゃないの？」

「…コホン」

あ、ごまかした。

「…ところで、ミナトくんはどういった心残りを持っているのかな？」

そしてスルーした。

「私？ 私はね」

ミナトはペンダントを両手に持ち、両方共開けた。

「これはね、多分お母さんとお父さんの思いが入っているんだと思うよ？」

ミナトは語り出した。

## 第14話（後書き）

もうすぐ年末ですが、皆さんはいかにお過ごしになる予定でしょうか？

自分は、変わらずに投稿を続けていく予定です。別に予定が無いわけではないのですよ？

よろしければ、皆さんのご予定を教えてください。

## 第15話

元より私があんな性格になったのは、お母さんとお父さんのせい。もとい、おかげだ。

色んな性格を試してみた理由は、見てほしかった。見てもらいたかったからだ。

でもね、

見てもらえなかったんだ。

だから私は

「見てもらいたかった、とは、どういう事だい？」

「私ね、七人兄弟の三女で、三番目なの」

「ほお、今にしては珍しい大家族だね」

「でね、基本的に親つてさ、一番上の受験とか、一番下の面倒とか優先するじゃん？ 私ん家の場合は一番上が今年大学受験で、一番下が保育園入りたてで、中間の私達は特に……ね？」

「ふむ、分からなくはないね、構成はどんなだい？」

「長女・次女・私・四女・長男・五女・二男だよ」

「あゝそれは分かるな、長女の大学受験、勝手の違う次女もまた別に、すると下の三女や長男は慣れてしまう、故にあまり見られなくなる」

「そういうものなの？」

「そういうものだ。人とは慣れたら油断する者だから……その油断が怪我や様々な失敗を生むんだよ」

「そう言ったハカセの表情が少し暗くなった。なにか経験があるんだろう。」

「それが、私の死と関係があるの？」

「言わば慣れ過ぎだ。だが原因は親だけではない、ミナト、君にもある」

「私？」

「正直に言おう、君は……弱かったんだ」

「私が……弱かった？」

「いや、これは私達……つまり自殺者は皆、そうだ」

「……」

「そして君の場合は、見られなくてそんな事をしたのだろうか、効果は無し。結果が自殺、これは弱い者の考えだ」

それを聞いたミナトは、

「……だって、見てもらいたかったんだもん……だから考えて……」

色々やったのに……全然見てくれなかったんだもん。こんな私なら、居ても、居なくても同じでしょ？」

悲しそうな眼をして、反論した。

「……だからといって、死を選ぶのはどうなんだい？」

「あ……」

「それによく考えてみたまえ、君にそのロケットをくれたのは誰だ  
い？ 思いを込めてくれたのは誰だい？ 今の君が、戦う為の力を  
くれたのは誰だい？」

「……」

「……まあ、君が優勝すれば親は君をよく見てくれるだろうが、今は全く見ていなかった。とは言えないだろう？ むしろ君が居なくなつて探す為、他に手を回せずに困っているかもしれないよ？ 君は迷惑をかける為に死を選んだ訳ではないんだろう？」

「……うっ」

「まあやかましく言ったはいいが、私が言いたいののは、そんな悲しい話を軽く語らないでほしいって事だ、さきのミナトは軽く語りすぎだ」

「……う……ごめんなさい」

話が終わった途端に、ミナトは泣き崩れた

いや、

泣いていないなかった。

「……あれ？」

ミナトも不思議に思ったらしい、そこにハカセが、

「仕方ないさ、私達は、涙が流せないのさ。これも、研究対象だよ

……」

## 第16話

改めて思う

自ら自らを殺し

悲しき事から生まれ

誰かに思われ

血は流れず

涙も流せない

そんな私達はいつたい、何者なんだ……？

今になって考えると、あの時のハカセは本当に怒っていたのだろう。彼女にも彼女なりの死の理由がある、何にしても、死を簡単に語るな。

ハカセはそう言いたかった。過去に何人も同族を見てきての言葉、それを改めて知った。

「ハカセってすごい人だね……私のお母さんもあんな人だったら良かったのにな」

居づらい空気になったため、私達は扉の外で話していた。

「でも、今さら仕方ないよね……よし、絶対優勝するぞ！」

「私も、負けないよ」

「次に会う時は、決勝の舞台だよ！」

そう言っつて、ミナトと別れた。

互いに逆方向に向かって歩いていっていると、扉を見つけた。今までに見たことのない扉だ。せつかくなので入ろう。ノブに手をかけた、その時だった。

「その人」

後ろから声をかけられた。



振り返って見ると、そこには一人の人がいた。

身長は私より上、メガネをかけていて、男……だと思つた。

最近は見ただ目で性別が判断できない人ばかり会っていたからか、少し疑ってしまうな、

「……何か？」

とりあえず尋ねる。

「いや、あなたもその扉に入るのか？」

「そのつもりでしたが？」

「ならいい、俺も入る」

俺も、つて事は男か。

「どうぞ、ご自由に」

私は扉を開け、中に入った。

そこは言うなれば、田舎の風景だった。

前に入った海の時も田舎風な感じはあったが、ここはその山バージョンと言つてもいいだろう。

正面に見えるのは見渡す限りの畑、右には林、左にも林、後ろは左右に木のある道、ここは森の出口らしい。

「……ここは自然に溢れているな」

あの男が後ろにいた。一応聞いておこう、

「あなたも参加者、ですよ？」

「ああ」

だろつな、他の人があの空間にはいない筈だからな。

……そういえばあの空間で参加者以外に会った事は無いな。扉を抜けた先の場所には色々な、つまりは参加者以外の人を見た事がある。そう考えれば、この扉を抜けた先のこの空間についても訳がわからないな。

確か、私達が戦う障害物のあるステージとか前は考えて終わった気がする。

様々な風景で

様々な地形で

様々な場所なここは、あの闇のような空間に浮いている扉を抜けた先。

ただそれだけ、知っているのはそれだけだ。

「ここは、似ているな」

男が呟いている……まだ居たのか。

むしろ尋ねるといっように呟いているよな？

「どこにですか？」

仕方なく尋ねると、

「俺の死んだ場所にだ」

「……」

もはや驚く事もない、もう何回自殺者を見たか、何回死んだ話を聞いたか、さすがに慣れた。

「俺は、首吊りでな……手頃な木を探して縄と椅子を持って山を歩き回ったんだ」

……もしかしてこの人、

「あの、もしかして……」

「ああ、戦う前の相手とはなるべく会話をしておこうと思っていてな、別に無理には言わない、今直ぐにでも武器を出して戦っても構わないが？」

やはり、私のような変わり者か。

「……いえ、少し話しましょう」

「そうか、なら、歩きながら話そうか」

私達は歩き出した。

## 第17話

男は自らモクと名乗った。

自分の名前を思い出せないと分かった時に、自ら付けたらしい。年齢は18で、大学一年だったそうだ。私よりも年上だな。

大学の勉強についていけなくて、首を吊ったらしい。

色々聞いた分、私も色々話しておいた。

名前と、死因を……

会話が一息ついた時、辺りを見回してみた。

そこは本当に田舎だった。

コンクリートの道はある。だがそれよりも土の道が多く、まるで畑の畦道が本道のようだ。

畑に作物はない、季節的には秋から冬なのだろうか？

そしてその畑の、何故かその真ん中で、戦っている2人がいた。

1人は女性、多分年、手にカッターを持っている。

もう1人は男、帽子を被り、手には小石……というか、レインだ。

「快特通過待ち合わせ！」

いつかのあの技が放たれた。

ガガガガガガガガ

ガスッ！

「うう……」

相手の女は倒れた、

「よっしゃ！ 俺の勝ちだな！」

レインが勝つたらしいな。

「知り合いか？」

モクが尋ねてきた。

「ええ、今勝った方、名前はレイン」

「そうか、彼とも話しておくべきだな」

そう言っただけで私達は、レインに近づいた。

「久しぶり、レイン」

「おおーツバサじゃねえか、久しぶりだな」

「うん、勝ったんだね？」

「おうよ！ これで三連勝だぜ！」

「それは凄いね……」

私は最初から考えると既に五連勝になるな……とはあえて言わなかった。

「だろ？ ……で、隣のアントは誰だ？」

「初めましてレイン、俺の名はモク、言わずもがな参加者だ」

「お？ 何で俺の名前を？」

「私が教えた」

「そうか、なら納得だ。よろしくなモク」

レインが右手を前に出した。

「ああ、よろしく」

モクも右手を出し、2人は握手をした。

その時だった。

「っ！ 危ない！…！」

ドン

ザシンッ！

「え……？」

「な……？」

何が起こったか最初は分からなかった。でも、直ぐに理解した。

私とレインが、モクに押されたんだ。

レインが倒した女が、起き上がっていたんだ。

そしてカッターを振りかぶって、切りつけてきたんだ。

それにいち早く気付いたモクが私達を庇い力、ッターに切りつけられた

「モク！」

「……これぐらい大丈夫だ」

カッターはモクの左肩に当たったらしい、モクはそれを気にせず、女性に向かい合った。

「2人共、少し離れていてくれ……直ぐに終わる」

モクの言葉通りに、私達は畑から離れた。

ドスンッ

少し離れた所で、振り返って畑を見た。

そこに見たものは、立っているモクと、倒れている女性と、

まるで畑に生えたような、大小様々な木の根っこだった。

## 第18話

私達3人は森の中にいた。別に起きた女性と私が戦えばよかったのだが、なんとなく、逃げ出した。

回りには木しかない、道らしい道はなく、木の間をただ歩いている。そんな場所で私達は止まった。

「ここまでくれば大丈夫だろう」

「そうですね」

「ああ、しつかし、モクって強いんだな」

「いや……相性がよかつただけさ」

そうなのか？ とも一度思うが、やはりモクは強い、そう思った。

しかも大学生だ。

そんな人が、ただ勉強についていけなくなっただけで自殺するなんて……

「さて」

レインが語りだす。

「どうする？ どうせ俺達戦わなきゃいけねえし」

「ああ、そうだな」

「とは言っても、俺とツバサはもう戦ったからな」

「じゃあ、俺か」

「そうなるな、どうする？ 俺からでも、ツバサからでも、どっちでも」

「……なら、ツバサ、まずは君と戦うよ」

「分かりました」

モクは回りを見回し、

「……ここは狭いな、もう少し動きやすい場所を探そうか」

「はい」

私達は再び歩きだした。

歩きだして数分たった。

その時、

「……なあ、ちよつといいか？」

モクが話してきた。

「なんだ？」

「いや、少し聞いてほしい事があるんだが……」

「なんだよ？」

「ああ、実はな……」

モクは語りだした。

必死に勉強をした結果、入りたかった大学に受かり、親許を離れて一人暮らしを始めた。新たな生活が待っている。そう思っていた。

そこで俺は、現実を知った。

まず、勉強についていけなかった。

これはまだよかった。

必死に勉強して、なんとか追い付けたからな。

そう、

これはまだよかったんだ。

本当に辛かったのは……

人付き合いができなかった。

人は一人では生きては行けない、ある本で読んだ言葉だ。その身で感じたさ、勉強だって、参考書のおかげだ。これを書いた人がいなければ、俺は駄目だったろう。だから、人付き合いができなかった。これでは生きて行けない。

なら……死を選ぶ。

大学の裏手が山で、あまり人が入るような場所ではなかった。俺はロープと椅子を持って山に入って行こうとした。

その時だった。後ろから呼ばれて、振り向いたそこには、一人の人がいた。

同じ大学のクラスメイト、だった筈だ。

名前は知らなかった。元より隣の奴の名前も知らないからな。初めて声を聞いたような、その女子大生の名を知る筈がなかった。

何故ここに居るかを聞いた。

そしたらあいつは……

俺に告白してきた。

俺は断わったさ、

誰かを愛する権利なんて、俺には無かったからな……

そのまま山に入って、

首を吊った。



「今考えれば、その告白を受けていれば、少なくとも死ぬことは無かっただろうな……俺は、バカだよな」

「……」

レインは黙ってしまった。予想外にづらい話を聞いたせいだろう。だが、私は言った。

「……そうですね、あなたはバカです」  
「だろう」

「今になって考えるのがおかしいんですよ。そして今考えるなら……相手の事も、考えてみてください……」

「相手の？」

「断られた相手も、あなたと同じ手段を選ぶ可能性があるんですよ

……」

「……」

今度はモクが黙ってしまった。

「……私が、そうだったから……」

私は語りだした。

これは私がまだ、生きていた時の話……

## 第19話

私には……いわゆる。彼氏、と呼べる者がいた。

同じ高校のクラスメイトで、高校生となれば珍しくはないだろうが、私達は互いに両思いだった。

告白してきたのは、彼からだった。

断る理由の無い私は、快く受けた。

それから、いわゆる、恋人同士となった私達、色々な所へ行き、色々な事があつた。

でも、私は見てしまった。

彼が他の女の人と歩いている所を。

それだけならまだ良かった。それだけなら……

しかし彼は、笑っていた。仲良く歩いていた。買い物だろう、荷物を持ってあげていた。

あれが、二股というもの……か。

よく……テレビドラマ……とかで……浮気……現場を……発見した人……の気持ちが……今なら……分かる……かな……はは

告白してきたのは、彼だったのに。

そして私は、ビルの屋上にいた。

そして……飛び降りた。

「……私もバカです。でも、あなたもバカです」

「……そうだな、俺も君も……大バカ者だ」

今考えれば、あれがそうだったとは限らないのに、聞いてみれば良かったのに。

間違いなら、笑ってすませた。

本当なら……何をしていたかな……

とりあえず聞けば良かったんだ。今さら遅いが。

でも、これで分かった。

私は、

私達は、

自殺者であり、

大会の参加者であり、

大バカ者の集まりなんだ。

何かがあって、

自ら死を選んだ、

他の選択肢を一切無視して、死を選んでしまった者達、それが私達だ。

「……」

「……モクもツバサも、色々あるんだな……俺は、まだ救われている方かもな」

「そうだな、レインの理由が何にせよ、俺達よりはいいのかもしれないな……」

「……そうかもな」

「……お、ここは良いかもしれないな」

そこはまさに開けた場所、その空間だけ木々が生えず円を形作っている。広さも申し分無いだろう。

「……じゃあ、始めるか」

「……はい」

私とモクは互いに間をとり、レインは後ろに下がった。  
一陣の風が通り過ぎる。

「……」

「……」

沈黙が続き、風の音だけが聞こえる。

風が止んだ瞬間、戦いが始まった。

## 第20話

「行くぞ！」

まずはモクが動きだした。

左手に何かを持っている、よく見ると、それはロープだった。

まるほど、首吊りに使ったものが思い形見になったのだから、納得がいく。

モクがロープを投げてきた、私も対処の為、鎖を放つ、

カツンツ

鎖とロープがぶつかり地面に落ちた。素早く鎖を引き戻し、モクの出方を見た。

その瞬間、

「……………」

気配を感じた。だが何も無い、少なくとも左右には……  
なら………下か！

素早く横に飛び、その場を離れた。

ドスンツ

そのつかの間だった。

そこに現れたのは、木の根だった。

改めてモクを見ると、左手にはロープを、右手には木の根を持つていた。いや、右手から生えていると言った方が正しい形だ。

根の先端部は地面に潜っているが、多分、横のこれだ。

なるほど、モクはロープで相手の視線を上に向け、その間に下から木の根を伸ばし相手を突く。

遠距離高威力タイプ。私と似て異なる武器……いや、思い形見だ。

「まだまだ行くぞ」

右手に持っている木の根が分離し、新たな木の根を出し、地面に刺

した。

またさっきの攻撃がくるならば対策をとるだけだ。  
鎖を螺旋状に作り、そのまま前に構え、その間に後ろに下がる。

ドスンッ

木の根が鎖の手前に現れたが、そこに私はいない。

木の根を確認してから右から遠回りでもクを指した。

「そっちか」

モクが気付いた。だが予想済みだ。

螺旋状の鎖を左側からモクに向かわせ、右手に巻き付けた。これで木の根は封じた。

モクは左手のロープを伸ばしてきた、それを弾き落とした。

今がチャンスだ。

私は十字架を横に振るった。

しかし

「甘いな」

ガキンッ

「なっ……」

右手に巻いた鎖が使われて十字架を守られた。

……強いな、私が今まで戦った中で一番だろう。

「……でも、負けませんよ」

「俺もだ」

鎖をほどき、間をとった。仕切り直した。

「……1つ教えておこう」

モクが語りだした。

「俺達のこの力は、1つの武器と、1つの能力からできている」  
いきなりなんだ？ そんな分かりきった事を。

「この2つを合わせる事により、強大な力になる」

合わせる……それは私が十字架に重力をかける事ではないのか？

「それは必殺技と呼んでもいいぐらいの威力を生みだす……このようにな！」

ドン！

モクは両手を地面につけた。右手の木の根が幾本と、左手のロープが地面に潜っていく。すると、またあの気配だ。

素早くその場を動くと、そこに木の根が  
現れなかつた。

だが次の瞬間、

ドスンッ！ ドスンッ！ ドスンッ！ ドスンッ！

私の四方に現れ、後ろに現れたそれに背中をぶつけた。

「くっ……」

その木の根の1つに十字架を向ける。

だが、甘かった。

よく見るとそれは、根っこではなく、木の幹だった。

そして木の幹から枝が現れた。いや、枝ではない、左右の幹からも現れたそれは、ロープだった。

「なっ……」

私は現れたロープに縛り上げられた。両手を縛られ、十字架も鎖も使えず、両足を縛られて身動きがとれなくなつた。

「……悪いな」

下を向いたままのモクがそう言った瞬間。

新たに現れた木の根が、私を貫いた。

ドス



## 第20話（後書き）

オモイノカタミビト、ついに20話まで書いてきました。

この数は、前の連載作の終了した数と同じ、つまりこれからはその連載記録を書き換えていこうというのです。いつまで続くか分かりませんが、これからもお楽しみください。

## 第21話

……体が浮いている気がする。

妙に、明るい場所に居る気がする。

何があったのか、何があったのかは

明確に思いだせる。

私は、モクに負けたんだ。

しかし、ここは何処だろう？

初めて負けたからな、レインやミナトが行った場所と同じなのだろうか？

コンニチワ

あの声だ。

やっぱりそうなのか、レインがあつたの声を聞いたと言っていたからな。

アナタハ マケタンデスネ？

そうみたいだ。

ココハ アナタノシヨウハイヲ キロクシテイルヨ

勝敗を記録？

イマノアナタハ ヨンシヨウ イッパイデス

四勝一敗。

つまりこの意味は、私が負ける度に、ここへくる度に勝敗数を聞けるという事か。

いったい何の意味が。

ジャア ガンバツテネ

あれ？ もう終わりか？ レインの時はハカセの事を教えてくれたのに。

まあ、今さらいららないうて事か。

そこで目を覚ました。目線の先には空が見える。どうやら仰向けで寝っているらしい。

「お！ 起きたかツバサ」

視界の右にレインが現れた。私は体を起こす。

「……私、負けたんだね」

「そうだな、やっぱりモクは強えよ」

「うん……強かった」

「……悪いな」

正面にモクが現れた。

「これも勝負だ、俺も景品の為に負ける訳にはいかなくてな」

「分かってますよ、全ては生き返る為、お互い頑張りましょう」

「生き返る？」

そうだった。モクは知らないんだ。

景品が、生き返る事だと。

私は説明した。

「そうか、となると……俺はあいつの告白を受ける事になるんだな」

「恐らくは、そうです」

「一人ではない、新たな生きた人としての生活か……悪くはないかもな」

私は、どうなるのかな……もしかしたら、飛び降りる前に彼が……

私は首を左右に振った。まさかそんな訳が無い。

「さてと、ツバサも起きたし、次は俺とだな」

「ああ、勝負だ」

「ツバサはどうする？ ここで戦いを見ててもいいぜ」

「私は……他の場所へ行くよ、さっき逃げたあの人も戦わなきゃいけないし」

「そうか」

「また、何処かで会えたらいいな」

「その時は、決勝の舞台でだよ」

「ああ、そうだな」

「じゃあな、ツバサ」

私は2人に手を振り、その場を離れた。

しばらく歩いたと思う、2人が戦っている音は聞こえない、そんな遠くまで来たんだな。

これから私はどうしよう。

とりあえずは戦う事、これは変わらない、ならこのままでいい筈だ。でも、モクの言葉が妙に頭に残っている。

2つを合わせると、それは必殺技と呼べる程の力を生みだす。

必殺技か……

これから先、モクみたいな強い人が現れてもおかしくはない。

いや、必然的になるだろう。

ならば私も、今以上に強くなれないといけないな。

今のままでは駄目、それだけは分かる。

とりあえずは、あそこに行くとしよう。

## 第22話

私は八カセの下を訪れた。

モクの言葉を伝える為と、これからの事を考えて、私は黒い扉を開けた。

「おや、ツバサじゃないかどうしたんだい？」

「ちよっと、聞きたい事がありました……」

まずはモクの言葉を伝えた。

「ふむ、もうそれに気付いた奴がいるのか、今回は早いじゃないか」

「早い？ という事は昔からそうだったと？」

「そうさ、私が気付いたのは確か……半分戦った後ぐらいだったかな」

「という事は……」

「そうだね、そのモクとかいう少年の言葉は正しい」

「では、私の思い形見にもその力はあると？」

「そうなるね、まあ出来る出来ないは使い手次第だがね」

そう考えると、モクはかなりの使い手という事だ。

首吊りのロープと、触れた物の木の根。2つを合わせた事により生まれたのがロープの生える木の幹という訳か。

「……」

「ツバサ、君は修行したいとは思わんか？」

八カセが提案してきた。

「修行、ですか？」

「うむ、私で良ければだが少しぐらい稽古をつけてやらん事もない、どうする？」

「……」

八カセは過去の参加者。その実力は決勝に進む程だ。

でも、それは過去の話……けど八カセのあの余裕は……

「……はい、お願いします」

「決まりだな、早速始めよう。こっちへ来たまえ」

ハカセは闇の奥へと入って行った。

私も後に続く、

「……」

深い闇の寸前で止まった。

何故か分からないが、ここに入ったら、何かおこりそうなく気がする。

「大丈夫だよ、気にせず入りな」

ハカセの声が聞こえる。

「……」

覚悟を決め、私は闇の中へと歩を進めた。

とても暗かった、目の前が見えない程の暗闇を抜けた先は、まるで図書館だった。

あの部屋よりも本と棚に溢れている場所、そんな場所の真ん中にハカセはいた。

「さあ、始めようか」

手には思い形見の本とペンを持っている。

私も十字架を構える。

「心配はいらないよ、ここは特別な空間でね、ダメージの概念が無いんだ。だからおもいつきやりな」「……はい、行きます！」

私は間合いを詰めた。十字架を横にはらう、

コン

持っていた本に止められた。音からもわかるよう、意図も簡単に力は込めた筈なのに、なぜ……でも、ハカセが何かしたのは見えた。

十字架が当たる前に、  
本を開き、ペンで中に何かを書き込み、本を閉じた、だけ。  
そして本が十字架を守った。

何が起こったのか……

とりあえず間合いをとった。するとハカセが、

「驚くのも無理はないさ、私の能力、せっかくだから言ってしまう  
が……」

右手を挙げ、

「この本に」

左手を挙げ、

「このペンで」

本を開き、ペンで字を書くふりをして、

「書いた言葉が実現、具現化するのさ」

と言った。

## 第23話

書いた事が実現・具現化。それがハカセの能力。それだけを考えれば最強の部類だろう。

だが、ハカセが次に述べた言葉がそれを更に際立たせた。

「ちなみに、これに書き込み使用する場合、私は軽い疲労感を体に覚えるという条件付きだ。故に書けさえすれば何でも実現可の能力なんだよ」

疲労感。久々に聞いた言葉だな、私達にはダメージの概念が無い分、ハカセのそれは諸刃の剣となる思い形見だった。

「それはこの空間でも同じ意味を持つているんだ」  
ダメージの概念の無いこの空間でもそれは起こる。

つまり、多用不可。攻め続ければ勝てるかもしれない……だが、今は勝負じゃない。私が思い形見の力を生む為の修行だ。

いろいろと考えて動かないといけないな。  
とりあえずは、色々試すでしょう。

私は鎖を放った。

ハカセは本を開き、字を書いて閉じた。

その間、僅か数秒。とても早かった。

そして本を前につきだす。それだけで鎖が向きを変え、上に飛んだ。もちろん私は変えた訳では無い、変えられたのだ。

恐らく方向転換の類いを本に書いたのだろう。上から再び向かわせた鎖も同じく上に上げた本の手前で左に曲がった。

「これで私は鎖は方向転換、十字架はガード可能だ。どうする、ツバサ？」

確かにそうだ。既に手の内を知られたとはいえ、こうも簡単にどちらも封じられてしまうとは思わなかった。早く考えないと……

私の思い形見はペンダントによる十字架と鎖。能力は飛び降りによる重力変化で……



ん？

重力……変化？

重力付加、じゃない？

そうだ。付加じゃない、変化なんだ。

ならひよつとしたらアレも可能な筈だ。

もしかしたら、もしかしたらだが。

よし、試してみよう。

でもその前に、

「ハカセ」

「なんだい？」

「もしもですけど……自分の思い形見で自分を傷つけた場合、ダメ

ージは……？」

「あるよ、私の能力がそれを述べた特例だ」

そうか、それが分かればもう問題は無い。

試してみよう。

私は鎖を伸ばし、放つ、そして巻き付けた。

「……………おや？」

ハカセも驚いている。

無理もない、私が鎖を放つたのは、巻き付けたのは……

自らの両足だからだ。

鎖が繋がっている為に少し歩きづらいが気にはしない、

私はただ思った。重力変化なら、付加が可能ならば。

減少も可能な筈だ。

そして、足に巻いた鎖を見て、思った。

……………浮け。

次の瞬間、  
私の予想が正しかったと証明された。

## 第24話

床に足がついていない。

私は　　浮いていた。

「ほお、面白いね」

ハカセも気付いたようだ。

「だが、それだけじゃあ何の約にも立たないよ？」  
分かっている。

ただ浮いただけでは何もできない、移動だつてままならない状態だ。  
けどこれを工夫すると、こうなるんだ。

私は一度床に足を着けた。そしてハカセに向かって十字架を縦に、  
突くように構える。

そして右足に体重を乗せ、床を蹴った。

瞬間、私は宙を跳んだ。

私が行ったのはこうだ。

まず私が浮いた時、重力変化を足に巻いた鎖に起こした。

ただしそれは重力付加ではなく、重力減少。

つまりは無重力にした。

それを足に巻いた鎖から体全体へと伝え、私の周囲数ミリを無重力  
に変えたことにより宇宙船の中のような状態になったのだ。

次にこの跳躍、これは重力付加だが、かける方向を変えたものだ。

重力とは基本的に人を地に抑えるために下にかかるものだが。私の  
重力変化はその方向さえも変えてしまつらしい。

現に私は今、重力により横に落ちてゐる

「なるほどね、重力を自分にかけてのか……発想は面白いけど……」

コン

重力をかけた突進による渾身の一突きさえも、本に守られてしまった。

「元を正せば十字架による攻撃、この本には効かないよ」  
もちろん。分かっていた。

重力を元に戻す。

この突進は、ただハカセに近づく為だけのもの。

ここで私が新たな実験を行う為だけのものなのだから。

これは少し前、丁度ミナトと戦っていた時、自ら鎖を十字架で断つた事があった。

あの時は十字架にどれだけ重力をかければ鎖を断つ事ができるか分からなかったので、思える分大量にかけていた。

それにより、鎖は断てた。

だが実はあの時、十字架を操作しきれていなかったのだ。

十字架の導くままに、十字架にかけた大量の重力が導くままに鎖を断つたんだ。

運よく鎖の上に落ちて良かったと、今になって思う。

そして……感謝する。

あれが私の新たな力を生むヒントだったのだから。

だが、それを試すのはまだもう少し先だ。

本にぶつかったままの十字架をすっ、と下へと下げ、ハカセを突き刺しにかかる。

その瞬間を見たハカセは数歩後ろに下がりながら自らの体と十字架の間に本を入れた。

コン

これで威力が無いのは分かっている。

だが、これでいい。

既に十字架には前に重力をかけてある。

そう、ハカセがいる方向にだ。

そのままその重力を

ハカセに移した。

そこで再び重力の方向を変える。

上に。

「おお？」

ハカセが予備動作もなく、上へと落ちた。

成功した。それと同時に、理解した。

私の重力変化は、付加・減少・方向の他、かける対象さえも変化する事ができた。

これは色々と使える。

そして、これが私の考えた、新たな力の必殺技だ。

足に巻いた鎖に重力をかけ、上に落ち、ハカセと同じ高さに行き着いた。

「ふむ……これは面白いね、いいよ……抵抗しないから、何でもやってみな」

ハカセは手から本とペンを落とした。防御の術を無くし、私の攻撃を受けてくれるつまりだ。

「……ありがとうございます……行きます！」

まずは十字架をハカセに一撃、下から上へ切り上げる。

これと同時に、ハカセと私にかけた重力を減少、無重力状態でハカセと向き合っ。

その場に浮くハカセに、私は手に振り上げた状態の十字架に下へと重力をかける。

重力に従い十字架が下がる。

ザスッ

通りがけに上から下へハカセを切りつける

続いて上に重力をかける

ザスッ

下から上へと切りつけた  
今度は右下へ

ザスッ

左上へ

ザスッ

右へ

ザスッ

左下へ

ザスッ

右上へ

ザスッ

そして再び

右下 左上 右 左下 右上

ザスッ ザスッ ザスッ ザスッ ザスッ

最後に、十字架を上振り上げ重力を下にかける。

ゴッ

頭に直撃を受けたハカセに十字架にかけていた重力を全て移し、下へと、ハカセを落した。

## 第25話

ドッゴーーーン！

まるでマンガみたいな音を立て、ハカセは床に叩きつけられた。

私は少しずつ重力をかけ降下していった。

「ハカセ！」

足がついたところで名前を呼ぶと、

「……大丈夫だよ、ここにはダメージの概念がないからね」

ハカセは立ち上がった。全くの無傷だ。

私達に傷はできないのだが、それで見てもハカセは元気だった。

「しかし、今のはなかなか良かったよ。それがツバサの新たな力だね」

「はい、ありがとうございます」

私の新たな力、能力の重力変化と、思い形見の十字架と鎖を合わせて生まれた力。

重力を付加しつつ、方向を変えて切りつける。今のように相手を浮かせれば命中率は上がるだろう。

「せっかくだ、名前をつけたらどうだい？」

その言葉に、少し前のことを思い出した。

「名前……ですか？」

「そうさ、必殺技つてのは名前があるものだよ」

「しかし……」

「なんなら、私が考えてあげなくもないよ？」

「いえ、自分で考えますから」

はつきり言い切った。

「そうかい、遠慮しなくてもいいんだよ？」

「いえ、大丈夫ですから」

ハカセのネーミングセンス。それは言うなれば個性的で、言うなら



独特で……

そして言ってしまうえば

変だ。

それを私は、あの時に知った。

「さて、その武器に名前をつけようか」

あれは、思い形見の名前を決めた時の事だ。

「やはり特徴をとらえた名前が良いと思われます」

ミナトが発言した。

それを聞き、ハカセは、

「では、死に際の所持品はどうだい？」

「怖いですよ！」

確かにそれは嫌だな……

「死んだ後に手が触れた後の人も居るのでは？」

私が反論を出すと、

「じゃあ……戦いの道具つてのはどうだい？」

新しい名前案が出たが、

「……それを武器つて呼ぶんですよ」

「ふむ、ではどうするか……」

それからハカセは幾つものおかしな名前を考えた。

思い出すのも大変なぐらい数多く、あれは絶対本気で言っていた。

ミナトが思い形見を出さなかった場合、ハカセの考えたどれかにな

っていたかもしれないと考えると……

名前については頼ってはいけないと、知らされたのだった。

……よし。

「グラビティア・クロス」

「ほお、面白い名前だね」

「それにします」

「良い名前じゃないか」

「ありがとうございます」

名前が決まると、ハカセは床に落としていた本とペンを拾い上げ、

「さて、そろそろここを出よう。長居は不用だし、長居は少しマズイからね」

長居はマズイ？

「………どういふ事ですか？」

## 第26話

私達は書齋へと戻ってきた。そして、知る事になる。

それはハカセの言葉から、

「あの空間にはダメージの概念が無い。確かにそうなのだが、ちょっとしたリスクがついているのさ」

「リスクですか？」

「うむ、浦島太郎の竜宮城を思い浮かべれば良いが、あちらの1分は、こちらの1日に匹敵するんだよ」

「……という事は」

「ツバサは何日も修行していた事になるんだ」

私で考えるとたったの62分。

だがこの世界で考えると62日間、私は修行していたことになるらしい。

今知り合いに会ったら、久しぶりと言われるだろう。

私としてはまだ大したこと無い別れが、皆には60日以上ぶりの出会いだから。

そんな訳で、私はハカセの部屋を出て空間を歩いていた。

とりあえずは、扉を探しているのだが

見つけた。

初めて見る扉だ。

迷う事もなく、私は中に入った。

そこには見覚えがあった。

周りを見渡して、思い出した。

私が初めて入った、扉の先にあつた都会だ。

初めて見る扉に入った先が見た事のある場所だとは、ハカセの言葉は本当だったのか。

「あの扉はね、この空間内に全部で黒い扉を除いて七枚しかないんだ。だがあの扉もまた特殊でね、引いて入ると、押して入るとで行ける空間が変わるんだよ」

ハカセが研究した結果、七枚の内五枚は別々の空間に飛ばし、それで十カ所。残り二枚の片方は別の空間だが、もう片方は十カ所の内の二カ所に飛ばす。つまり計十二カ所のステージが用意されているらしい。

確か私は、今引いて入った。ならあの扉を押して入れれば別の空間に行くのだろうか。

とりあえず今は、またここを探索するとしよう。

しばらく歩いていると、知った姿を見た。

ハンチングを被り、長袖の両腕に巻かれたブイ、見違えるはずがない。ブイなんて巻いているのはこんな場所でも1人で充分だ。

「おーい、ミナト」

私は彼女の名を呼びながら近くに駆け寄った。

「あつ！ ツバサだ！」

「久しぶり……だよね？」

一応聞いてみる。

「うん！ 何だかとっても懐かしい気がするよ！？」

ああ、予想していた反応だ。

「無理もないよ、だって私は62日間ハカセの下で修行していた事になってるからね」

「へ？ どういう事？」

私はモクと出会ってから、今に至るまでを語った。

「ふん、新たな力ね、私はまだそんなの無いな」

「ミナトはどうだった？」

「私はね、色々あつたよ」

ミナトは私と別れてからの事を語ってくれた。  
今ミナトは、21勝8敗らしい。

凄いな……勝利数もあるが、その試合数がだ。

私はまだ、二桁も戦っていない。これが62日間の差という事なん  
だろう。

だが大丈夫、私が全員と、全員が全員と戦うまでこの一回戦は終わ  
らないのだから平気だ。安心しろ……  
と、ハカセは言っていた。

「ところで、ミナトはどうしてここに？」

「それはねmここで会ったマイちゃんと……あー！」

ミナトが急に声を上げた。

「何？　どうかしたの？」

「あのね、ツバサに会ってもらいたい子がいるの」

「私に？」

子、という事は私やミナトよりも年下という事か？

「うん。いいよ、その子はどこに居るの？」

「こっちだよ」

ミナトに連れられ、私はその場を後にした。

## 第27話

ミナトに連れられてやって来たのは、あるマンションの一室だった。ミナト曰く、開いていたから寢床に使っているのだとか。

そういえば、この空間にも昼夜の概念がある。でも別に眠くならな  
いから私は歩きまわっているし、夜を迎えようとした時にはその空  
間を出ていたので、寝ることは考えたことなかったな。

「さあ、入って入って」

中に通され、部屋の中を見た。机が1つ、椅子が4つ、棚が2つに  
タンスが1つ置かれている。普通の部屋だ。

その椅子の1つに、ミナトが会わせたかったであろう子が座ってい  
た。

椅子に座っているのもあり身長は分からないが、見た目は凄かった。  
年は10〜12ぐらいだろうか、髪は金髪、瞳は青、髪は左右に分  
けられてリボンで束ねられている。

見た目は、まるで西洋人形のようなだ。

だがそんなその子の手には、本物の西洋人形が握られていた。

「ただいま、マイちゃん」

名前はマイらしい。

「……お帰りなさい、ミナトちゃん」

ギリギリ聞き取れるぐらいの、小さな声が聞こえた。

「……その人は……誰？」

マイは私を見ながら首を傾げて訊いてきた。

「ツバサだよ、この前話した強い女の人」

「初めまして、マイちゃん、でいいのかな？」

「……うん、初めまして」

マイは首を縦に振って挨拶してきた。

「あなたも、参加者よね？」

ミナトと共に居る時点で確定だが、私は尋ねてみた。

「……………うん」

やっぱり。

「じゃあ、何でこんな所に居るの？」

少し気にはなっていた。参加者である以上、戦うことが必要なのにこうして家の中に居るのはどういう理由があるのだろうか。

「……………」

マイは黙ってしまった。

代わりに、ミナトが答える。

「あのね、マイちゃんは変わった力の持ち主で、今は休んでるの」

「休んでる？」

「えっと……………マイちゃん、言ってもいい？」

「……………」

マイは黙っている。

「……………あのね、マイちゃん的能力って……………」

ミナトが語り出そうとした。

その時だった、

「待って！」

声の主は直ぐに分かった。マイだ。

先ほどからは考えられない、そんな大きな声が出るのかと思ってしまっただけの程の大声だった。

「マイ、ちゃん？」

「……………」

マイは手元にあった人形をぎゅっと抱きしめたまま下を向き、

「……………私が……………自分で……………話す」

また先程とは比べものにならない小声で言った。

「……………うん。頑張ってるね」

「……………うん」

マイは小声ながらも、語り出した。

## 第28話

……正直言いづらいが、小声で聞き取りにくかった。

でも、重要な部分は声が少しだけ大きくなっていた気がする。それをふまえて、マイの言った事を整理してみた。

年齢は10歳、小学四年生で、一人っ子。この容姿は、イギリス人の母とのハーフだかららしい。

病弱の為、学校にはあまり行けず。元より人付き合いが苦手で人形が話相手だったとか。

親が共働きで、1人で1日を過ごす事もあつたらしい。

そして、死を選ぶ時。どうすればよいか分からず。医者に渡された薬を全て一度に飲んだらしい。

そのまま人形を握って、死んでしまったようだ……

「……なるほど」

薬による自殺、思い形見はあの人形だろう。

「……それでね……私の思い形見は……あそこにあるの」

え……？

マイが指差したのは、ダンスだった。その手に持つてるのじゃないのか？

ミナトがその前に立ち、

「開けるよ？」

「……うん」

マイは首を縦に振って答えた。

そしてミナトは、ダンスを開けた。

開かれたダンスから現れたのは、人型の何か。それは開かれたダンスから自ら動き、降りたつた。

見た目はやはり、マイが持つものと同じ西洋人形。あれがいわゆる、ゴシック何とかと言う服装なのだろうマイと同じ黒と白の服に身を



包んだ、ミナトと同じぐらいの身長をした人形がマイの横に回った。

「……私の思い形見」

人型の髪に触れながらマイは言った。

「……元は、これぐらいの大きさだったの」

続けて自らが持つ人形を撫でる。

「え？ どういう意味？」

人形の大きさが変わる何かなのか？

改めて大きさの違う人形を見る、それで気付いた。

大きさは全く違うが、マイの隣の大きな人形と、マイが抱いてる小さな人形、2つはそっくりだった。

いや、少しだけ違うな。頭に付けているリボンが左右逆だ。

「……あのね」

マイが語りだした。

マイは死ぬ際に、この2つの人形を握っていて、それが思い形見となった。

その能力とは

人形の自動制御と、毒の投与。

大きい人形の方に、まるで空気の入った風船のように毒が入っているそうだ。

その毒は相手が触れるとダメージとなるもので、人形に触れる程に毒が体に移り、知らずのうち倒れてしまうらしい。

今マイが人形を抱いているのは、その人形に毒を投与しているらしい。

「……」

説明を終えたマイは下を向いて人形の頭を触った。

コポポポポポ

その手から人形に、毒が入っているの音が聞こえた気がする。

「……」

なるほど、人形を使った遠距離操作タイプではなく。毒を入れた人形を使った至近距離長時間戦闘タイプと言ったところか。

「マイちゃんはね、私と戦った時に毒を使い切っちゃってさ、こうして補充してるの」

ミナトが言った。

「ちなみに、勝敗は？」

「私の勝ち」

「そう」

「マイちゃんって本当に凄いなだよ、私に負けるまで負け無しだったんだから」

「それで、ミナトととの勝負で毒を使い切って、今は補充してるのね」

「そういうこと」

「……もしかして、それで一緒にいるの？」

「……それもあるけど、マイちゃんって、私の妹にそっくりなの。だから……何か放っておけなくてね」

「……なるほどね」

もともとは10歳の子供だ。私や、ミナトよりも年下の参加者が居るなんて思っていなかったし、七人兄弟のミナトは、妹のことを思い出したのもあるんだろう。

「……ゴメンね……ミナトちゃん」

「気にしないでよ、私が好きでやってるんだから」

「……ありがとう」

マイは更に顔を下に下げた。

「それとね、私がここに居るのは他にも理由があるんだよ」

「理由って？」

「……2人組の参加者」

マイが普段より大きな声で言った。

「言われた!？」

ミナトがシヨックを受けている中、マイの言った言葉を繰り返す。

…… 2人組の参加者？

## 第29話

私が修行していた62分間。その間に空間では様々な出来事が起こっていたらしい。

まずは名前、モクが広めたのだろう。自らが考えた名前を名乗る参加者が増えたらしい。

次に対戦数、多い者は既に50戦以上、二桁いつていない者はいないと言われているらしい。

だが、私はまだ5戦だけだ。

最後に、2人組の参加者。

分かりやすく言うところのコンビだ。

それだけなら良いのだが、その2人は1人に戦いを挑む際に、まずは1人が戦い、相手が弱ってきた所で

2人目が現れ、その1人を挟み撃ちにする。

しかもその後、倒した相手が起きた瞬間に致命傷を与えてまた倒してしまい、これで2人が一勝ずつ手にするらしい。

正直……ズルい方法だ。

その対策として、ミナトとマイのように2人組で行動する参加者が増えたらしい。

「私達はまだ会った事が無いんだけどさ、この前戦った人が、殺られちゃったんだって……」

「……」

「噂だと、この空間に入ったみたい」

「ということとは……」

「うん、私とマイちゃんまで戦うんだ」

「そっか、頑張ってるね」

「うん。それで、ツバサはこの後どうするの？」

「私？ とりあえず出会った参加者に戦いを挑まれるだろうから、手当たり次第戦いまくると思う」

「うわ、それも大変だね……2人組には気をつけてね」

「うん、ありがとうねミナト。私、そろそろ行くね、頑張ってる人共」

「うん、ツバサもね」

「……気を付けて」

「ありがとうマイちゃん。じゃあね」

2人に……いや、マイの持つ二つの人形も手を振っている。大きいほうは自分で、小さいほうはマイが手を持って振っている。

4人に見送られ、私は部屋を出た。

私と戦った事のある参加者は少ない筈。

だったらこうして歩いているだけで、向こうから戦いを挑んでくると思った。

カシンッ      カシンッ      カシンッ

ドスッ

ジャ  
ラ

ドス  
ッ

ズザ  
ズザ  
ズザ

ドスツ

カシンツ

ズザザ

ドスッ

カシンッ  
ジャラ



ドスッ

バシユ

ズザザザザザ

スッ

ド

結果、この街を歩いていただけで8人と出会った。

正直連戦はキツかったが、新たな力のおかげか、8人共勝つ事ができた。

「ふう……」

倒れている8人目の横を通りすぎて歩きだした。

これで私は、13戦12勝1敗だ。

### 第30話

そんな時だった、

「その人」

声の聞こえた方を向くと、男が立っていた。恐らく参加者だろう、手には注射器を持っている。

「……勝負ですか？」

「そうさ……行くぞ！」

こちらの返事も待たずに男は注射器の針を向けて突っ込んできた。見た限り注射器に中身は無いようだが、油断はしない。

空気注射というものがある。空の注射器を血管に刺して空気を入れると、死に至るらしい。あれはそういう物だろう。

刺さればアウト、空気を入れられれば一撃に死に至る。至近距離一撃必殺タイプか。

私は十字架を構えた。

ガキーン

「くっ……！」

正面からきた相手の注射器を十字架で弾いた。この男、あまり強くないな、動きが単調すぎる。

注射器が手から離れた男は、そのまま殴りかかってきた。

……何かおかしい、参加者と知っていて肉弾戦を仕掛けてくるなんてありえない、それに一撃型の思い形見手放すことも……もしかして……

繰り出された右ストレートを十字架で防ぐ、そのまま鎖を伸ばして相手を縛りつけた。

これ以後は首でも断てば私の勝ちだ。

だが、そうはいかない。なぜかそうなるだろうと私は分かっていた。

カキン！ カキン！

気配を感じた方向に十字架を向けると何かが当たった。  
地面に落ちたそれには、見覚えがあった。

「これは……」

「チツ、上手くかわしたようね」

声の聞こえた方向を向くと、そこにはやはり見覚えのある姿がいた。

「あなたでしたか、2人組の参加者とは」

「そうよ、久しぶりじゃない？」

やはり予想通りの反応。

彼女とは大分前に会い、レインが勝った後に戦った、ナイフ使いの女性だ。

「言つときますけど、あなたはもう私と戦いましたよ？」

「分かってるわ」

「二度戦う意味は無い筈ですよ」

「分かってるわ、でもね」

女性は鎖で縛りつけた男を指差す。

「彼はまだなのよ」

「では」

「ええ、彼の為に私は戦うの、私達は2人組の参加者だからね」  
「……」

とりあえず、彼女の武器はナイフ。能力は分からないから用心するとして、あちらが動き出した瞬間に男を巻いている鎖をキツく絞めて殺してしまおう。

これで一対一になって鎖も使えるようになる。

考えがまとまった瞬間、相手が動いた。  
ナイフを投げてきたので、鎖に力を込めながら十字架を前に構えて  
防御に……

何かがおかしかった。

トスツ      トスツ      トスツ

ナイフが刺さったのは、私の少し手前の地面、もっと言えば、私の  
影に刺さった。  
すると、

「……!？」

影に刺さった時から予想はしていたが、まさか本当にそうだとは思  
わなかった。

「あなた、前に聞いたわよね？ 私がどうしてここに来たか、教え  
てあげるわ、私はね、ナイフで自分の首を切ったのよ。そして手が  
触れたものは床、そして影」

影縫い、それが彼女の能力だった。

恐らくあの空間では気付いてなかったか、元より暗くて影が分から  
なかったからか、私達が早く倒してしまっただからか、彼女は能力を  
使わなかった。だから私は油断してしまった。

「フフ、これでああなたは動けないわよ」  
女性がナイフを持ったまま近付いてくる。

「後はあなたを殺してから彼の鎖をほどいて、もう一回殺してあげ  
るわ」

ナイフを振り上げた。狙いは頭のような。

「じゃあね……」

ナイフをが降り下ろされた。

### 第30話（後書き）

ご拝読ありがとうございます。

感想、お待ちしております。

### 第31話

ガキーン！

「くっ……誰よ!？」

ナイフは刺さらず、私の後ろから来た何かによって弾き落とされた。

「大丈夫!? ツバサ!」

声に聞き覚えがあった。

動けなかったが、声の主から横に来てくれた。

「ありがとう、ミナト」

声は出せた。

「いやいや、どういたしましてだよ」

今この場所に居るのは、動けない私と、私の鎖に縛られて動けない男と、ミナトと、ナイフ使いの女性。

そして、

「……大丈夫? ツバサ」

マイが横に現れた。

「うん、動けないけど……私は大丈夫だよ」

「……待っててね」

「うん」

「よし、勝負だ! 2人組の参加者!」

「……待って、ミナトちゃん」

「え?」

マイが数歩前に出た。

「……相手は1人……だから私が1人で戦う」

「ええ!? でもマイちゃん」

「……大丈夫……私は負けない……から」

「でも……」

「ミナト、もう1人はこうして動けないから一対一に変わりはない

よ

「……でも」

「……それに……あの人に2人で挑むと……私達があの人達と同じ」

「あ……」

「……だから……待ってて」

マイは私達の前に立った。

「話は終わった？　まずはあなたからなのね、お嬢ちゃん」

「……負けない」

「こっちの台詞よ！」

女性はナイフを投げた。

私達が話している間に何故か動かなかった。

理由は、分かった。

影がこちらを向く方向、私達が目を背負う方向は、彼女が能力を発揮できる方向だからだ。

トスツ　トスツ　トスツ

マイの影にナイフが刺さった。

「……」

「さあ！　これであなはもう動けないわよ！」

「……分かってる」

「何？　その余裕、あなた今の状況分かってるの！」

「……分かってる」

「武器も動かせないあなたがどうするといっねよ！」  
ナイフを振り上げた。

「マイ！」

私は声を上げた。だが、

「大丈夫だよ」

ミナトは冷静だった。

それは、マイも同じだった。



「……大丈夫……私の武器はあなたの後ろ」  
「え？」

ドカッ

「かつ……」

後頭部を殴られた女性は、ナイフを地面に落とした。

「なっ……何よコイツ！」

女性が振り向いて見たのは、あの人形だった。

リボンが右に巻かれている。最初に見た時から大きかった方だ。

「……私の武器」

「ふうん、でも残念ね……なぜならそこからこれは守れないわよ！」  
女性はナイフをマイに向けて投げた。

しかし人形は動かない、間に合わないのは分かる。

でも少しも動かない理由は、私にも分かった。

### 第32話

マイにナイフは、当たらなかった。

「なっ……」

女性も驚いている。無理も無いさ、全く同じ姿をした人形がマイをナイフから守っている。もちろん先ほどの人形はその場から動いてもいない。

あれは頭のリボンが左、最初に見た時は小さかったマイが毒を入れ直した方だ。大きさは右リボンと変わらないのは、毒を入れきつたからだろう。

「……今度はこっちの番」

マイの体は動かない、しかし人形は動ける。こういう思い形見のため、元よりマイに戦闘力は少ないだろう。

人形は前と後ろから女性を捕まえた。

「くそ……離しなさいよ！」

右にリボンの人形が後ろから女性の両手を取り、左にリボンの人形が前から女性の腰に抱きついた。完全に動きを封じる。

「離……しな……さ……い」

これがマイの能力……人形が触れるとそこから毒を相手の体に投与する。

それが体に溜まりダメージとなって残り、知らぬ内に……

「は……な……し……な……」

倒れてしまう……

女性は気を失った。

「……私の勝ち」

マイが女性を倒した後、ミナトが私とマイのナイフを抜き動けるようになった。

まず話になったのは、

「この人よね……」

私が鎖で巻いていた男だ。

「私、初めて見たよ」

「……私も」

もちろん私もだ。

……だから、

ドスッ

私は勝った事になった。

続いてミナトが、

シパッ

続いてマイが、起きたばかりの男を倒した。

今まで彼らにやられた人への報いにといい、彼らと同じ方向で勝つておいた。

おそらく、もうこんなことはやめるだろう。

もちろん、彼女にもだ。

私達3人はあの部屋に戻って、食事をとっていた。  
あの2人はそのまま、つまり置き去りにしてきた。  
そして、今になって思う。

負けた相手は、起きるまでは見ないか、見ずに去る方が良い。  
これは私だけに限らず、しかしマイには関係ないだろうと思われる。  
それはダメージ再生の時を言っているのだが、マイの場合、体に回  
った毒が浄化されて体に変化は無い。

しかし、私やミナトの場合は傷口がある。血は出ないが、傷口はあ  
るのだ。

私がミナトやレインに勝ち回復を待っていた時……

見てしまった。

十字架の刺さったレインの腹が、

十字架を射し込んだミナトの左半分が、

修復されている様を、

細胞が動き、蠢き、繋がり、戻っていく。

血が無い分それは、はっきりと見えた。

見えてしまった。

見てしまった……

私は首を左右に振った。

タイミングを考える。今は食事中だ。

「どうしたの？ ツバサ」

「うん……何でもない」

誤魔化すように、サンドイッチを口に運んだ。

「……ツバサは……これからどうするの？」

缶ジュースを飲み干して、マイが尋ねてきた。

「私は……多分、さっきと同じだよ、手当たり次第戦いまくる」

「……そう」

「うん……だから」

マイが言いたい事は分かる。しかし、自分で言うまで待つ。

「……じゃあ、私と戦おう」

言った。

いずれ、行わなければいけない戦い、避けては進めない戦い。

私は何時だっていい、後はあちら次第。

その時は、今まさにきた。

「うん。正々堂々、一対一で戦おうね」

「……うん」

マイは立ち上がった。

「……行こう」

「うん」

レインと戦った広場、そこぐらいしか人目の少ない場所を知らなかった。

「さあ勝負だよ、マイちゃん」

「……負けない」

「私もだよ……行くよ!」

十字架を構えて出方を待つ、予想はつく、

「……現れる」

2つの人形が現れた。

右リボンと左リボンの人形。身長がマイと同じ、130センチメートルぐらいになっているが。中身を使ったからだ。でもまだ残っている中身は毒、触れたらダメージで、自ら動く、それが2つ。

…… 大変な戦いだな。

### 第33話

まず分かった事は、マイの持つ人形。思い形見の人形には名前があった。

右にリボンをしているのがリア

左にリボンをしているのがロマ

マイ本人が言ったので本当だと思う。

「……行くよ……リア……ロマ」

2つの人形、リアとロマが動き出した。

2つとも正面から突っ込んで来る。

私は鎖を飛ばし、人形の片方、リアの足を縛り引っ張る。

ボタン！ とリアが転けた。

その間にも攻めてくるロマに対して十字架をぶつける。

ギーン！

金属と金属が当たったような音がした。

「固いね」

「……2人の材料は布と綿だけど、中に入れた毒は固くできる」

そういう事か、綿に毒を染み込ませ、布を通して相手の皮膚へ、それが毒投与の方法か。大きくなる原理は分からないけど。

考えていた隙に、ロマが抱き抱ってくる体制になっていた。

私は十字架を前に突きだしロマの手が触れる前に十字架を当てた。

そのまま重力をかける。後ろへと。

ロマは重力に従いマイの方向へと落ちていった。

「……ロマ！」

ガシッ！

マイが落ちてきたロマを受け止めた。

「……………大丈夫？」

ロマへと語りかける。

だが相手は人形、もちろん返事など無い。

しかしマイは、

「……………うん……………分かった……………重力なんだね？」

答えたように語りかけている。

しかも、私の能力に気付いたようだ。

まさか、本当に意思疎通ができるのかもしれない。

「……………うん……………大丈夫だよ……………直ぐに治してあげるから」

マイはロマを抱き締めた。

その時、何かが聞こえた。

音は2つ、

コポポポポ

片方は何かを注ぐ音。

もう片方は、

ドクン ドクン ドクン

何かが脈動するような、何かを透いとするような音。

音が止んだその時、

「……………はい……………おしまい」

ロマを抱いていたマイの手が離れた。

その途端、ロマが何事も無かったかのように動き出しこちらに向かって来た。重力をかけた筈なのにだ。

「……………毒は使い方次第で……………薬にもなる」



意味はよく分からないが、音からするに体内の毒を入れ換えたのだらう。

それだけで動ける筈は無いのだが……今は戦いだ。考えるのは後にしよう。

動き出したロマと、起き上がったリアが私に向かって来た。

あれが駄目なら、作戦変更だ。

リアの足の鎖を外し、私の左肩に巻いた。

あれから8連戦したおかげで使い方を知った。別に両足でなくても良かったのだ。

ようは鎖を通して重力を私の体内に通すだけなら、鎖が体のどこかに触れてさえすれば良かった。

その簡単かつ最速の部位が左肩だったただけだ。

これにより私は鎖を使えなくなったが、代わりに変化可能な重力を得た。

私は重力の方向を変え、上へと落ちた。

私が数秒前居た場所にリアとロマが飛びかかった。

その後重力を無くし、無重力となりその場に浮いた。

「……………すごい」

マイがこちらを見ている。

「……………さあ、仕切り直しだよ」

### 第34話

私は飛べる訳ではない。重力を操って浮くだけだ。だから空を自由に動ける訳ではない。

しかし、こんな事は出来たりする。

高度を下げて、地面に足がつかない程度の距離に降り、再び無重力に、十字架を前に構えて……

と、その時リアとロマが向かって来た。だが慌てない、意外にも重力変化は集中しなくてはならない。

そして十字架に、前へと重力をかける。目一杯にだ。

結果、私は前へと落ちた。

リアが後ろを向きこちらに向かって来た。

重力を上にかけて上へ、そこにロマがジャンプして飛びかかる。

下へと重力をかけ下へ、足が地面に付く前に重力を減少し無重力にする。

この技はつまり、高速移動に近い移動方法だ。

私の体に重力をかけ、上か下に変換すると上昇と降下が、十字架に重力をかけ重力の方向を変えれば、その方向へと急発進・急カーブ・急停止が可能だ。

鎖に巻かれた体はともかく、十字架に方向を変えるのは制御に苦労したが、その際に十字架の四辺が役に立った。

例えば直進なら正面に、後退なら持ち手の部分に、右や左でもそれは同じだ。かなり役に立つ。

リアが左から、ロマが前から迫る。

右にカーブだな。

しかしカーブは簡単ではない。

まずは右に重力をかける。十字架に導かれ右へと正面が向いてくる。そこで右から正面に重力をかけなおす。すると正面へと落ち、正面

へと進む、先より右斜め上へとだ。

……これはカーブか？ と使ったびに思う。

右斜め直進だよな……

仕方ないさ、曲がった重力なんて無いのだから。

暫くそうして人形の動きを避けていた。

チャンスを伺う為に……

そして、チャンスは来た。

正面に落ちている私の、向かう先にはマイがいる。

リアとロマは遙か後ろ、そこからでは間に合わない。

私は重力を目一杯前へとかけて

ドスッ

「あ……」

マイに十字架が刺さった。

十字架の重力を無くし、マイに重力を移す。

下向きの重力をかけたマイは後ろに少し飛び、地面を転がる事無く地面に落ちた。

無重力をやめて足を地面に付ける。

勝った……のか？

ふと後ろを見ると、リアとロマが倒れていた。まるで人形のように

……いや、元よりあの2人は人形だ。

あれが普通なんだ。

動かす人が居なければ、動く事はない人形なんだ。

……勝ったようだな。

互いに1敗だった私達。2敗目を手にしたのは、マイだった。

その後分かった事だが、マイとは、ミナトが付けた名前らしい。  
理由を聞くと、妹の名前だったそうだ。

「ちなみに四女で、年齢が同じだったから……つい」

マイは一人っ子で、独りぼっちだったから。まるでお姉さんができたような、そんな気持ちだったのだろうな……

### 第35話

「……………んむ？」

「あ！目が覚めたよ！」

「……………ここは？」

マイが目を覚ました。

今私達が居るのは、あの部屋。戦いの後、倒れたマイをミナトがおり、リアとロマ、2つの人形を私が鎖で巻いて重力を減らし、まるで風船のように浮かばせて運んでここに戻って来た。

「と、言う訳だよ」

マイは左右に置いたリアとロマを見て、

「……………ありがとう」

笑った。

今までの無表情からは想像も出来ない程の、可愛い笑顔だった。

……………という訳で、

「2人はこれからどうするの？」

「そうだね……………2人組の参加者対策として2人組で行動する参加者が増えたんだよね、だから私はマイちゃんと一緒に行くよ」

「……………私はここに居る」

「じゃあ、ここで別れだね」

「……………行くの？」

「うん。元より出ていくつもりだったけど、色々あったから止まっちゃっただけだし……………それに私は皆よりも対戦数が少ない筈だから、戦わないといけないしね」

「……………そう……………気を付けて」

「ありがとうマイちゃん。じゃあね2人共、お互い頑張ろうね」

私は部屋を出た。

扉を抜け、あの空間に出た私は、その場でぐるりと回り、扉に向き合った。

『扉は引いて入ると押しして入るでは場所が異なるんだよ』  
ハカセの言葉だ。

今の場所には引いて入ったので、次は押しして入ろうと思ったのだ。私は扉を、押しして入った。

俺と妹を置き去りにして出ていった両親を探す為に旅に出た俺達はある雪国で、離ればなれになってしまった……

それからの俺は、昔から好きだった絵を描きたくなくて、親に会ったときに見せようと思ったある道具を持って、人1人居ない、回りは雪だらけの、そんな場所に立った。

そして、描こうと思った。

だが紙は無い、そして筆も無い、もちろん絵の具も無い。道具はただ1つだけ。

さて……描くか。

題名は……そうだな……

『絵具を使わない日の丸』で、いいか。

パンッ

### 第36話

扉を開けたらそこは、雪国だった……

何か本の冒頭みたいだが、仕方ないだろう、本当なのだから。

という訳で、私は雪が積もる平野にいた。

辺りを見渡すと、家の形が見えたのでそちらに歩き出す。

雪が降っていて、足下にも雪が積もっている。歩く度にサクサク鳴る。そんな雪まみれの場所だが、寒さを感じなかった。

これもまた、私達だからだろう。

改めて私達は、何者なのか分からない……

そんな感じで考えていたら、村に辿り着いた。

遠くからも見ていたからだが、ここは町のような大きさだ。人々は分かりやすい程の寒さ対策をして歩いている。

あの人達は違うな、何故なら私達は寒くないのであれ程着込む必要は無い。もちろん買って着る事も決して不可能ではないが、わざわざこの空間の為に防寒着を買う必要は無い。

とりあえずはこの寒そうな格好で歩き、相手を探そうと思う。

私は町に入った。

……よくゲームとかで、雪の上に倒れた傷だらけの人の血が雪に染み込み赤く染まる場面を見たりする事があるが、私達の間でそれはありえなかった。

何故なら血が出ないからだ。

ドサッ

首を貫いて倒れた相手が雪の上に倒れた。

しかし血など出ていない、雪が赤く染まる事も無い。



何故なら私達には血が流れていないからだ。

しかし、戦いやすかったな。

この人は何故か動きが鈍く、攻撃が読め、攻撃を当てやすかった。いったい何故だろう……

……もしかすると、寒さは感じないが、寒さで動きが鈍るのか……？  
あ……倒した相手が降る雪に埋もれてきた……

わたしと兄を置き去りにして出ていった両親を探して旅に出たわたし達は、ある雪国で離ればなれになってしまった……

それからのわたしは、リアルマッチ売りの少女になった。

売れる物と言ったらマッチしかなかったから仕方ないとはいえ、これは明らかに先が見えた。物語のように寒さに耐えきれなくなった私はマッチを擦り……

なんて事はせずに、以外にも売れたマッチを売って得たお金で寒さ対策をして、兄を探して歩き出した。

歩けど歩けど、雪しか見えない場所。

そこで私の体力は尽きた。

やっぱりもう少し対策するべきだったかな……

帽子とコートと手袋だけ……マッチって、意外に高値で売れるんだなと思った。

でもやっぱり……

靴を買えば良かったな……

### 第37話

という訳で、私はマフラーを購入して首に巻いた。  
うん、幾分かはマシだろう。

しかし参加者が少ないな、寒さの異変に気付いてここを離れたのか  
もしれない。もう少し歩いて見つからないようなら私もここを出る  
としよう。

マフラーが持ち出せたら直ぐにでも出るのだが、そうはいかないの  
でもう暫く探してみるとする。

その時だった。

「おや？ …… ツバサか？」

名前を呼ばれた。そちらを振り向くと、そこにはモクが居た。

「久しぶりだな」

「はい、そうですね」

「戦いは順調か？」

「一応、今のところあれ以来負けてませんから」

「そうか……」

あれ以来、つまりはモクに負けて以来、私は強くなり、連勝してい  
た。

「しかし、ここはあまり参加者が居ないぞ」

「分かっています。先程ようやく1人見つけました」

「そうか、俺は戦った事のある相手しか居なくてな……ここを出よ  
うと思う」

「そうですね、私はもう少しここに居ます」

「ああ、お互い頑張ろう」

「はい」

簡単な会話だけをして、モクは行ってしまった。

さてと、改めて探すか……

そう思った時、

「おい、その人！」

また呼ばれた。そちらを向くと、始めて見る人がいた。青いコートを着た少年、年は14〜5というところか。

「何か用ですか？」

当たり前な事を聞いてみた。

「いざ尋常に勝負しろ！」

そう言つてとりだしたのは、銃だった。

拳銃と呼ばれる小さな物、アレが思い形見のようだな。

「分かりました」

私は十字架を構えた。

「行くぞ！」

少年が大声で言った。

その時、

「ちよつと待った！！」

更に大きな声が待ったをかけた。

### 第37話（後書き）

今日、この辺りでも珍しく雪が降り、自分もマフラーをつけて外に出ました。

妙にタイムリーな感じになって幸いです

これを読んだ貴方の周りはどうでしょう？

それでは、

### 第38話

声がした方向にいたのは、少女だった。

帽子にコートに手袋と暖かそうな格好だが、それに反して靴が無く、裸足だった。

雪の上を裸足で歩けば普通なら赤くなる、あるいは青くなる足に変わりがない彼女も参加者なのだろう。

年はおそらく前にいる少年よりも下、12〜3ぐらいか。

その裸足の少女は私と少年の間に割り込んできた。

「えっと……何かご用で？」

私が尋ねると、

「もちろん！」

少女は答えた。

それはそうだ。そうでもなければ止める訳ないだろうし。

「それで、いったい何の用ですか？」

「それはね……」

ビシッ！

という音がしそうな勢いで少女は指差した。青いコートの少年を。

「アナタ！ まず私と勝負しなさい！」

「は？ ……何でだよ？」

「いいから戦いなさい！」

凄いい見幕とはこういうものだろう。

「う……わ、分かったよ、あんたから戦えば良いんだろ？」

少年は根負けした。

「えっと……じゃあ私は横で見学していますね」

私は2人から離れて、雪が積もり出来た丘の上に登った。

丘を登りきって2人を見た時、勝負は始まったようだ。

「わたしの名前はマチ！ いざ勝負よ！」

「俺の名前はスノウ、手加減なんてしないぜ！」

少女の名前はマチ、少年の名前はスノウらしい。

スノウは思い形見の銃をマチに向けた。

「ふん、分かりやすい武器ね、そんなの当たらなきゃ意味無いじゃないの」

……どんな思い形見でもそれは言えるけど。

「わたしの武器は……コレよ！」

そう言つてマチがコートのポケットから取り出した思い形見は

マッチ箱だった。

物語で、マッチ売りの少女が売っていきそうなそれがマチの思い形見らしいが……能力が予想できない。

……見てれば分かるか。

そして2人は戦い始めた。

### 第39話

先手はスノウ。

「どんな能力が知らねえけど、コレを避けてみな！」  
銃口をマチに向けて放った。

パン パンパン

計三発、普通銃弾を目で追える筈が無い、しかし、その銃弾は見えた。

速度が遅いのか、この戦い仕様なのか、はたまた私達の目が凄いかは分からない。

銃弾が見えているからか、マチは動じない。それどころか、マッチ箱からマッチを一本取り出し、

シュツ

箱の側面で擦った。

ポツと火が灯り、明るく……暖かくなり……

……それが普通だ。

しかしあれは思い形見、普通じゃなかった。

擦られたマッチから出たものは 氷だった。

マッチの先端に小さな氷が灯っている。

それをマチが前へと投げる。

次の瞬間、氷が膨張した。

まるで酸素を吸収して燃え盛る炎のように膨張した氷は盾となり、



カシンツ　カシンツカシンツ

銃弾からマチを守った。

「なっ……」

スノウも驚いているようだ。

「さあ……どうするのかしら！」

マチの能力はマツチによる氷を精製しての様々な攻撃か。

もしかしたら、マチという名前はマツチから来てるのか……？

それはさておき、マチの攻撃はなかなか応用がきくだろう。氷を膨

張させて使用するが、飛ばした攻撃をしない所を見るに、距離は投

げられる範囲だけ、変則的中距離タイプだな。

一方スノウは、先程から銃による攻撃しか行っていない。まさかそ

れだけではないだろうとは思いが……

「何よその簡単な攻撃は？　わたしを舐めてるの？　手加減はしな

いんじゃないかったの？」

マチが挑発している。それに対してスノウは、

「分かったよ……本気で攻撃してやるよ！」

挑発に乗り、銃口を向けて放った。

パンパンパンパン

計五発、先程より弾数が増えただけで速度に変わりはない。

「……はあ」

マチはマツチを擦り、

カシンツカシンツカシンツカシンツカシンツ

先と同じ方法で銃弾を防いだ。

「それが本気？　弱すぎじゃないの……よく最初の時に勝てたわ……」

「隙あり！」

パン

マチはこの時油断していて反応が遅れた。  
氷の盾に隠れて近づいたスノウによって、銃弾を心臓に受けた。

## 第40話

ペシヤ

しかし、倒れなかった。

「な……何よコレ？」

マチが受けた銃弾は

雪玉。

ただへんてつの無い雪玉が当たっただけだった。

「何って……雪玉だけど？」

「分かってるわよ！ 何で雪玉が拳銃から射ち出されたか聞いてるのよー！」

「そりゃ、これが俺の武器だからだけど……」

「雪玉で勝てると思ってるの！？」

「それで俺は勝ってきたんだけどな……ざっと20勝」

「な……！」

マチは驚いているようだが、私は別に驚かなかった。

確かに雪玉に威力なんて皆無だろうが、マイを思い出した。

毒を相手に投与して傷を付けずにダメージだけを与える方法。スノウもその類なのだろう。雪玉に触れるとダメージが貯まる。遠距離

連続長期戦タイプか。

スノウが雪玉を放つと、マチが擦ったマッチで盾を精製し雪玉を防ぐ。マチがマッチを擦って投げると。スノウは後ろに後退してマッチを避ける。

それがしばらく続いた。

……吹雪いてきた。

天候が悪くなる中、2人の戦いは続いている。

暇だな……普通ならここでこんな格好、防寒具はマフラーのみ。寒

くて震えるだろうな。

この格好は、死ぬ間に着ていたそれだ。

皆がそうなのなら、マチは裸足のままで死んだ事になるな。

……暇過ぎて思わず考えていたが、転機が訪れた。

「このままじゃ終わらないわね……」

「このままじゃ終わらねえな……」

「……だったら」

「……こうなったら」

「これで決めるわ！」

「これで決めてやるぜ！」

2人がほぼ同時に言った。それを合図に、2人は行動に移った。先に動いたのはスノウ。

「これが俺の本気だ！」

スノウが左手に新たに銃を持った。二丁拳銃か。

「くらえ！」

ズダダダダダ

二丁拳銃を放った。片方はマチに向けて、片方は、足下の雪に。足下に放った雪玉が雪に埋まる。

カシユ

マチはマッチを擦り前へと投げる。それが氷の盾となり、

カシユッカシユッカシユッカシユッ

向かってきた雪玉を防ぐ、

カシユ

再びマツチを擦り、前へと掲げた。

「私は……………」

マチが何かを呟いた。吹雪いているせいからここでは聞こえない。そしてマツチを投げた。氷が膨張して盾を作るが、それだけではなかった。

氷の盾から、火の矢が飛び出した。

計……数えきれない数が、スノウへと向かう。

スノウは動かない……いや、動けないんだ。

足が雪に埋もれている。それだけなら普通は動ける筈だが、普通ではないようだ。

まるで足が地面と繋がったような、そう見えた。

そのスノウはというと、目を閉じていた。元より動けないのを知っているかのように、まるで何かを操る為に集中しているかのように。

そして戦いが終わる。

ズバシユ！

ドストドストドスト

「っ……………」

「う……………」

まず先に、足下の雪が巻き上がってマチが雪に飲まれる。

続いて、無数の火の矢がスノウの体を貫き。

そして、2人は倒れた。

「……………」

勝負を遠くで見っていた私は2人に近づいた。

これは……引き分けか？

速さでいえば、先に攻撃を受けたのはマチ。しかし倒れたのは同時だ。

引き分けがあるのなら、これは引き分けだろう。しばらくして、2人は起きた。

仰向けだったスノウが、うつぶせだったマチが、互いが起き上がり、互いを見て、

「……………何で」

「……………どうして」

2人は声を合わせて。

「……………どうして引き分けなんだよ!」「……………」

「さ、さあ……………」

私に言ったのでは無いが、つい答えてしまった。

「……………しっかし、強えなアンタ」

「うつん……………あなたこそ、強かったわよ」

「ははは……………」

「うふふ……………」

2人は近づき、握手して、

「あははは!」

「あははは!」

大爆笑した。

「……………?」

私はただそれを見て、首を傾げた。

どうやら、友情が芽生えたようだ。

## 第41話

その後私達は、何故か座って談笑していた。

確かにダメージ回復を待つ為に私と戦わないのは分かる。しかし、それだけではなかったようだ。

「いや、こんなに誰かと話したのは久々だよ」

「わたしもよ、普段は戦ったらそれっきりだからね」

「えっと……ここに私が居てもいいのですか？」

「おうおう、大丈夫だよ」

「うんうん、大丈夫よ」

「はあ……」

この二人、すっかり仲良くなったようだ。

「せっかくだ、互いに改めて自己紹介しようぜ」

マチ、年齢は13

スノウ、年齢は15

そして私、ツバサ、年齢は17

そんな簡単な自己紹介が終わった後に、私達は普通ならしない紹介を始めた。

「俺は、銃で頭を撃ち抜いた」

「私はホテルから飛び降りました」

「わたしは……雪道で倒れて」

互いの死因紹介だ。

普通じゃないなあ……

そんなことを考えていたら、ふとスノウがマチに尋ねた。

「そっぴゃ、何で俺とツバサの戦いに水を刺したんだよ？」

忘れてた。それが今に至る発端だ。

私もマチの方を向くと、

「……それは」

彼女は語りだした。

親と離ればなれになった事絵を描く事が好きな兄がいた事、  
その兄と旅に出た事、  
途中の雪国で、兄と離ればなれになった事、  
その後はマツチを売りながら兄を探していた事、  
そして、倒れた事を。

「……………」  
悲しい話だ。涙が出るなら流しているだろう。

「親が居なくなつたわたしにはもう、お兄ちゃんしか……………いなかっ  
たから……………でも……………見付からなくて……………」

「……………」  
スノウが下を向いている。何かを言う気配は無い。  
なら、私が言おう。

「それで、何故戦いに水を刺したの？」

「……………スノウが……………どこことなくお兄ちゃんに似ていたから  
私はスノウの方を見た。」

「……………なあ、マチ？」

すると声を出した。

「何よ？」

「そのお兄さんとは雪国で離ればなれになったんだよな？」

「うん」

「その後……………お兄さんを探してどっちへ向かつたんだ？」

「え？ えつと……………あれは……………西かな？」

「……………そうか、俺はそのお兄さんに似ているのか」

「うん」

「……………そうか」

「どうかしましたか？」

「いや、何でも……………次は俺の番だな」

スノウは語りだした。

自分にも妹がいた事、



雪道を歩いていて自ら頭を撃ち抜いた事を。

「最初に最後の作品だったんだが、誰にも見られないかもな」

「それは、どこの雪道ですか？」

「忘れちゃったよ、どこかの雪道だ……さてと」

スノウは立ち上がり、

「そろそろ戦つか、まずは俺からだ」

「……はい」

……なるほど、そういう事か。

だったら……

## 第42話

既に吹雪は止んでいた。

先ほど私が登っていた丘にマチが登り、私とスノウが対峙する……  
という事にはならなかった。

もとい、私がしなかった。

「本当に良いのか？」

「はい、時間短縮になりますからね」

「だからって……」

私は、マチとスノウの2人を同時に相手する事にしたからだ。

「構いません。さあ……いきますよ」

私は十字架を構えた。

「まあ……そこまで言うのなら」

スノウは銃を手に持った。

「……容赦はしないわよ？」

マチはマッチを取り出した。

「行くぞ！」

マチとスノウ。2人を同時に相手にしたら、分かった事がある。

まずは2人の能力。

スノウは雪道で銃を撃って自殺した。

道具は銃、能力は雪玉で、触れた相手の体力を奪う毒系統の思い形  
見。

あの足下に撃った雪玉の意味も分かった。スノウは死ぬ時に銃で頭  
を撃ち抜き、血が染み込んだ雪が能力となった。

雪玉を雪に地面に撃って、染み込ませる。その染み込んだ雪玉を操  
り下から攻撃するというもの。しかしその際には足が地面に貼り付  
いてしまうという条件付きだ。

マチは雪道で倒れて凍死してしまった。

道具はマッチ、能力は氷で、擦られたマッチから氷が現れて盾を作る変化系統の思い形見。

あの時マチが何か呟いていたのは、まるで物語のような新たな力だったのだ。

マッチ売りの少女、マッチを擦って暖かい物を思い浮かべる話なのだが。まさにそれだった。

マチが呟いていたのは、

『私は望む、火の矢を放て』というもの。

つまり擦ったマッチに欲する物を望むと、それが氷の盾から現れるという能力だ。しかし、暖かい、もしくは熱い物限定らしい。

そしてこれは、私の勝手な考えなのだが……

マチとスノウ、2人は互いの話に出ていた兄妹だ。

親と別れた事、旅に出た事、雪国で離ればなれになる事、互いの兄と妹の特徴が似すぎている事、一致する事が多すぎる。もし違いういうなら理由が欲しい程にだ。

そして、それを決定付けるのが、今のこの戦いだ。

息が合い過ぎている。

マチを相手にするとスノウが、スノウを相手にするとマチが私の後ろをついてくる。油断すると直ぐにやられてしまうだろう。

しかし分からない事もある。

何故マチは気づかないか、何故スノウは気づかないかだ。

マチはスノウの見た目が似ていると言った。普通なら見た瞬間に分かる筈だから……

もしかしたら……本当に分からないのか？

互いにそうだと気付かないのか？

だとしたら、先程の2人の戦いは兄妹ゲンカだ。

互いに分からず行っ、最悪なパターンの、命をかけたケンカだった

(いや、もう死んでいるけど)。  
知らなくて良かったのかもしれないな……

さて……やはり相手の事を知ると、戦いやすかった。

ズザザザザザ

ザシユ

「くっ……」

ドスッ

「うっ……」

マチとスノウに、私は勝った。  
実際、2人になら負けてもいいと思ったけど……やはり勝負だからな。  
2人のためにと同時に戦ったが、やはり辛いな……次からはやめよう。

私は2人が起きるのを待ちながら、ある事を考えていた。  
2人が起きたら、あれを伝えようか……どうしようか。  
互いに離れ離れになり、互いを求めて歩き、互いに別々の場所で、  
死んだ。

そして、ここで再開した。夢のような再開だ。  
それが2人の為になるのなら……

……そうだな。

やめておくことにした。  
よく考えたら、確証も無いわけだし。  
それに……それが2人の、為になるのだから……

## 第43話

2人が目覚めた。

「大丈夫ですか？」

私が訪ねると、

「おお、大丈夫だよ」

「ええ、心配ないわよ」

2人は大丈夫なようだ。

「しかし、ツバサって強いんだな」

「そうよ、2人がかりで勝てないのよ」

「いえ、自分は修行しましたから」

そう言った瞬間、

「なに！？ 修行したのか！？」

「どこで！？ どうやって！？」

2人が興味津々に訊いてきた。

「えっと、それは……」

あ、そうだ。

「ある扉の先です。そこにいる人に修行をつけてもらいました」

「そこ、是非とも案内してくれよ！」

「わたしも！」

「はい、一緒に行きましょう」

私達3人は、扉を抜けた。

その瞬間、マフラーが無くなった。

私達は黒い扉の前に、辿り着いた。

扉を開き中に入ると、ハカセは椅子に座っていた。

「おや？ ツバサじゃないか、久しぶりだね」

私に気付いて本を閉じた。瞬間、椅子が現れる。

その時ハカセは、部屋の中を見回していた2人に気付いた。

「おや？ 新顔だね、名前はあるのかい？」

「スノウっていいいます」

「マチです。どうぞよろしくお願いします」

2人は礼儀正しく頭を下げた。

「ふむ……名前を名乗る者も増えたね。私の事はハカセとでも呼んでくれたまえ」

「それでハカセ、彼等はハカセに修行してほしいというのですが」

「ほお……面白い」

ハカセの眼鏡がキラリ、と光ったような気がした。

「私の修行は厳しいぞ？」

「……そこまですりでもなかったような気が……」

「それでも構いません！」

「どうか、よろしくお願いします！」

2人はやる気まんまんのようだ。

「はっはっはっ、いいだろう、しっかりと着いて来たまえよ」

あ、ハカセが楽しんでる……この部屋から出れないと言っていたから、暇してたんだろうな……

「「はい！」」

「よし！ 良い返事だ。早速始めよう、こちらに来たまえ」

ハカセは暗闇の中へ2人を招き入れた。

2人が意気揚々と入って行った後、

「……さて、本題を聞こうかな？」

ハカセは闇を背にして私に向き直った。

「2人は良いんですか？」

「心配無い、あちらの1分はこちらの1日だからね。こちらで数分話したところであちらでは数秒の出来事にすぎない」

「……では」

私は2人の事を語った。

「ふむ……これは面白いね」

「もしかするとですが、あの2人は分かっているものだと思います」

「はっはっ、やはりツバサは面白い考え方をするね。研究者に向いてるよ」

ハカセはけらけらと笑った。

「真面目に考えてます？」

「もちろんだとも。彼等は分かっている、それは正しい考え方だ」「そうですね……しかし……」

「何故思いを込めたであろう人も死んでいるのに思い形見を持っているのか？ かな？」

「……その通りです」  
そこが謎だった。

互いを思えるのは、互いしかいないだろう。だが2人はここに同時に存在する。

「簡単さ、ここでこうして存在しているからだよ」  
「……」

「マチとやらが望んだ物呼び出したろう？ あれで分かると思うが、我等にも思う事ぐらいは出来るのだよ」

あれから暫くハカセと話した。

その後、ハカセは暗闇へと入って行ったので、私は部屋を出ていった。



## 第44話

これはもしもだけど、最初でどちらかが殺られて消えてしまったらもう片方も消えていたよ。

しかし彼等はずいついてる。どちらかが優勝すれば、もう片方も生き返るからね。

これがハカセの言ったスノウとマチの成り立ち方だ。

2人は互いに互いを思っ成り立っている。

他の参加者もそうだ、誰かに思われてできている。誰かに思われてるからここに存在して戦ってられる。

私は、誰なんだろう……

やっぱり……あの人、なのかな？

おそらく、彼以上に私を思っている人はいないだろう……と、思う。それほどに、私たちは

暫く歩いた気がする。

途中、幾人もの参加者に会い、戦った。

ある者は包丁、ある者は彫刻刀。カッターを持った女性とは二回目の出会いだった。

またある者は薬の瓶、ある者はホースだった。

色々あるな……死に方と思い形見。

ホースってどうやって死んだのか最初は分からなかったけど、戦ったらガスだと分かった。

戦いながらの徒歩が続き、私は扉を見つけた。初めて見る扉だ。

引いて入るか押して入るか、どちらもすれば良いのだが。

まずは、引いて入ってみた。

チーン

鐘を叩いて手を合わせた。線香の香りが鼻を通る。

あの人が逝ってから早二年、三回忌が終わり、一段落したこの時期に、私は決心しました。

いつまでも貴方の事を思い続けてはいけません。それは貴方も安心していけないだろうから。

死んだ人は帰って来ない。それは決まった事。病気で亡くなった貴方もそれは例外ではない。

だから私は、決めました。

貴方を思っていると、私も貴方も先に進めないから……

私は、貴方を追います。

そこはまるで、闘技場だった。  
生で見た事はないが、俗にコロシウムと呼ばれる建物が、目前に建  
っていた。

周りを見てみると。今までで戦った事のある者無い者。  
そして、あの3人がいた。

帽子を被った男と、袖にブイを巻いた少女と、頭の左右にリボンを  
巻いて人形を2つ抱いている女の子だ。

見た限りでは仲良く話しているようなので、私は3人に近付いた。  
それにまず、帽子の男が、

「おお！ ツバサじゃないか、久しぶりだな！」  
続いてブイを巻いた少女が、

「うわぁ〜本当に久しぶりだね、ツバサ」  
最後に頭の左右にリボンを巻いた女の子が、

「……………久しぶり」  
各々挨拶してきた。

帽子の男がレイン。

ブイの少女がミナト。

リボンの女の子がマイ。

3人共一度戦った友だ

「こんな所に集まってどうしたの？」

私が尋ねると、

「え？ まさかツバサ、知らずにここへ来たのか？」

「そうだけど」

「じゃあ教えてあげるよ、あのね、今からここで大会が始まるんだ

けど……その賞品がなんと！」

「……二回戦の突破」

勿体ぶるミナトの横で、マイがぼそりと言った。

## 第45話

3人から聞いた話をまとめてみた。

この空間へ来る扉は私が入った物と、レイン達3人が入った物の2つ存在するという。

そして今からこの闘技場を利用しての、大会が行われるという。

それに優勝すると、勝敗数関係無く、二回戦突破を約束されるという事だ。

その席は、計4つ。

しかしこの大会は四回目らしく、以前に三回行われており、すでに3人が二回戦を突破しているらしい。

「聞いた話じゃ、モクがその中の一人だったらしいぜ」

「私達もここに来て初めて知ったからさ、前の大会がいつやっていったのが分からないんだよね」

「……これが最後の大会になる」

「なるほど、それで、皆は出場するの？」

「まあな、戦った事の無い奴とも戦えるかもしれないしな」

「もし優勝したら万々歳だもんね」

「……ツバサも出るの？」

「私か、どうしようかな……」

でも周りを見る限り、知らない人が多いから戦う手間が省けるかもしれない。

レインと同じ理由だけど、仕方ないさ。私は他の人より試合数が極端に少ないんだから。

「うん、私も出ようかな」

「そうか、だが今度は負けねえぞ！ あれから俺も強くなったからな！」

「だとしたらまたツバサと戦うかもね、私も負けないう私も新たな力つてのを手に入れたからね」

「……負けないよ」  
皆やる気満々だ。  
私も、頑張るかな。

こうして、大会が始まった。  
ルールを語ったのは、やはりあの声  
ではなかった。

さあ！ いまから大会のルールを発表するぜ！

分かりやすい元気な声、あの聞き取りづらい声とは別人のようだ。  
そんな声が闘技場内に響き、ルールが発表された。  
まずはくじを引き、そのくじに書かれた数字の参加者とペアになり  
戦うというものだ。  
それに何か違和感を感じたが、文句を言ったところで声には聞こえ  
ないだろうから私は黙ってくじを引いた。  
書かれていたのは六番、早く相方を探そう。

闘技場内を歩き回り六番の人を探したが、一向に見当たらない。  
その途中、3人に出会った。

「ツバサは何番だ？」

「六番、レインは？」

「十一番だ、まだ相方に会えないんだよ」

「私は九番、マイちゃんと一緒だったんだよ」

「……良かった」

「とりあえず、俺達も早く探そうぜ」

「そうだね」

私とレインはミナト達と別れ、相方探しを続けた。

それから多分5分ぐらいが過ぎた。実際に時間の感覚は分からないが、そのくらいだろう。

今だに相手は見つからない。ただし、私だけ。

レインは探しだして、多分3分ぐらいで見つかった。

既に相手を見つけた2人組が周りに増えている。

しかし、これはこれで見つけやすくなる。私のように1人の人を探せばいいのだから。

その時だった、

「あの……」

後ろから声をかけられた。

振り返るとそこには、声の主がいた。

その人を見て、私は少し驚いた。

年齢は同じぐらいか、下。身長もそんなに変わりない、格好も、髪の毛の長さも似ている。まるで鏡を見ているかのように何が違うのかを探すの方が大変なぐらい似ていた。

何故なら、右手に持った唯一違う可能性の高い紙に書かれた番号さえも、同じ六番だったから。

## 第45話（後書き）

突如現れた謎の少女、それはともに戦う仲間にして鏡を見ているように自分にそっくりなのだった！（次回予告風）

たまには後書きを書こうと思ったのですが、なぜかこんな風になりました……

全部に書こうかと思いましたが、さすがに無理ですかね。

それでは、

感想及び評価、お待ちしております。



## 第46話

「よろしくお願いします」

そう言って彼女は頭を深々と下げた。

「よ、よろしく……」

……うん。やはり私に似すぎている。

年上そうに見える人には必ず敬語を使う所までそっくりだ。

やっと見付けた違いは、髪の色だ。

長さは似ていても、私は青混じりの白髪、彼女は赤混じりの黒、そこだけだ。

まだ思い形見も死に方もしらないけれど、それぐらいしか違いが見当たらなかった。

彼女は何者なんだろう……

彼女は頭を上げて、

「私の名前はミカっていいいます」  
名前を言った。

「私はツバサって呼んで」

「はい、よろしくです。ツバサさん」

「ツバサでいいよ、多分同じ年でしょ？」

「えっと……私は17なんですけど」

「うん、同じ年だね」

実際はそうは見えなかった。

「で、では……ツバサ」

「うん、よろしくね、ミカ」

「は……はい！」

言って彼女　ミカはにっこりと笑った。

名前を呼ばれたことを喜んだ……とは、少し違った気がした。

さあ！

全ペアが出来上がった所で対戦順を発表するぜ！

ちなみに番号から順番に戦う訳ではなく、こちらが勝手に呼んだ番号同士が戦ってもらうぜ！

何か妙に暑苦しそうなお会の声が話している中、私は驚いていた。私とミカは、似すぎていたからだ。

ペアでの戦いという事でお互いの思い形見について話していたら、まさに偶然だと思った。

ミカの死因は

ビルからの飛び降りだった。

しかも能力は私とは違い、空間で固めるといふもの。それにより思い形見の砂を固めて武器を作るらしい。

でも驚いた事は驚いた。死因まで一緒とは……

さあ！

まずは始まりの第一回戦の始まりだ！

番号六番と十四番はコロシウム中央に集まってくれ！

「六番、私達だね」

「はい、頑張りましょう」

私達はコロシウム中央へと歩き出した。

相手は既に来ていた。

片方には見覚えがあるハサミを持った大柄な男。片方は初めて見る無手で細身の男だ。

さあ！

戦ってもらうぜ！

第一回戦六番と十四番、試合開始だ！

カーン！

ゴングが鳴り響いた。

瞬間、大柄な男がハサミを剣に変えた。細身の男も構えている。手には何も持っていない、肉弾戦か？ そんな訳はないだろうけど…

…まあいい。

私達は私達のやり方でやるだけだ。

「それで、ミカはあの2人と戦った事は？」

「えっと、あのハサミの人は初めて見ます」

「ならミカはあの人と戦って、あの人はハサミによる近距離戦だから」

「はいです、お気をつけて、あの人はコンクリートを使ってきますから」

「分かった」

私達の作戦は、1人が1人に戦いを挑むというもの。あちらのコンビネーションを崩す事が目的だ。

結果、一回戦を突破した。

## 第47話

さあ！

一回戦全ての試合が終わり続いて準々決勝を始める前に、数十分の休憩にするぜ！

今の内にダメージを回復してくれよ！

ペアの数は十六組、一回戦が終わって半分となった今は八組で、次が準々決勝。

これに勝ったら残り四組で、次が準決勝になるのか。そんな事を思いながら、私達は集まっていた。

「2人は、双子か何かなのか？」

「違う」

「はいです、私は一人っ子でしたから」

「でもさくどう見たって2人は似すぎでしょ」

「……そっくり」

回復をしつつ、会話していた。

そこに集まった人数は、5人。

「そういえば、レインの相方はどうしたの？」

「少し休みますって、どこかに行っちゃったよ」

「レインの相方ってどんな人なの？」

ミナトが聞くと、

「えつとな……」

レインは語りだした。

私は会ったことがあるが、レインの相方はアロマという女性だ。見た目からして年はかなり上に見えたので、私が訊ねてみたら、

「ヒミツです」

と言われてあしらわれた。

物腰の低い女性で、既婚者で未亡人だとか。

先に逝った夫を追って、自ら銃で頭を撃った結果ここに来たらしい。  
「かなりハードに戦ってたから、疲れたんだろっな」  
「ふっん」

レインの説明が終わった時、

さあ！

休憩は終わりだぜ！

番号六番と一番はコロシム中央に集まってくれよ！

「私達だ。行こうミカ」

「はいです」

「頑張れよ2人共！」

「頑張つてね！」

「……頑張れ」

「うん、頑張るよ」

「応援、ありがとうございますです、頑張ります」

さあ！

準々決勝第一試合

彼方かなた、番号六番

重力と空間の双子コンビ

ツバサ選手とミカ選手だ！

あれ？ 名前言っていないのに、何故あの声は……  
それに双子じゃないし。

しかも能力言ったな、あの司会。

此方こなた、番号一番

電気と爆発の元気コンビ

キキ選手とテル選手だ！

司会の言葉と同時に、前にいる2人を見た。

片方は首程で緑色の髪、年は同じぐらいだろう。身長は隣にいる人が私と同じぐらいだとするとそれよりかなりも低く、手に携帯電話を持っている。

もう片方は肩程で紫色の髪、年上だろうな。身長は同じぐらいで、手には鍵を持っている。

身長や髪の長さなどは異なるが、2人に共通して言えるのは、

「元氣コンビだつてさキキちゃん！」

「それもだけど、本当にあの2人似てる！ 本当の双子なのかな！？」

とても元氣だという事だ。

紫の髪がキキで、緑の髪がテルのようだ。

「違いますですよ！」

ミカが反論したが。

「あはは！ 何その話し方？ 面白すぎるよ！」  
軽くあしらわれた。

「あう〜」

ミカが落ち込んでいる。

「大丈夫だよミカ、私達が頑張ればいいんだからさ」  
私は十字架を構えた。

「そ………そうですね、頑張りますですよ！」

……正直言えば、私もそのしゃべり方は少しおかしいと思うが。

強くは言わない、

強くは言えない、

昔の私がそうだったから……

さあ！

試合開始だ！

カーン!

## 第47話（後書き）

本日は3月3日、この日の為に、少々細かな物語を書きました。  
よろしければ、そちらもご覧ください。

それでは、



## 第48話

「さあつて、いっくよー」

先に動き出したのはキキだった。

「ミカ、あの2人とは…」

「いえ、どちらも初めて会いますです」

「じゃあ勝手に決めるけど、私が今突っ込んでくるキキと戦うから、ミカは向こうのテルと戦って」

「わかりましたです」

私は前に出て十字架を構えた。

カキン

鍵と十字架がぶつかる。

その際にミカは大回りでテルへと向かった。

「ねえ、あなた達って本当に双子なの？」

やっぱりその質問か……

「違いますよ、ただ背格好がそっくりなだけです」

「ふう〜ん、でもでも〜似すぎじゃありません？」

「……そうですね」

「まあ、いつか〜今は勝負の最中だしね〜」

キキは間合いをとった。

「さくつと倒しちゃっよ」

バチ！

キキの持つ鍵に電流が走った。電気の流れが、目に見える。

「いっくよ〜」

電流の走った鍵をこちらに向けて、

「サンダー・ロック！」

バシユン！

電流を飛ばした。

速度が早い電流がこちらに向かってくるが、目で追える。避ける事は可能だった。

私が避けると、

「おゝやるねゝでも、いつまで持つかなゝ」

バシユン！

バシユン！

バシユン！

バシユン！

一方その頃、

「勝負です！」

「あなたが私の相手？」

「はいです！」

ミカ能力は空間操作。砂を出した周囲の空間を操作してまとめるといふもの。つまりは砂の造形を扱うのだ。

ミカは砂を集めて、槍を作った。それをテルに向けて飛ばす。

「砂の槍ね……ふう」

テルはため息と共に携帯を操作し始めた。槍は迫って来ているが、避ける素振りすらしない。

カチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチ

ボタンを押す音が響く、暫く操作した後、

ピッ

ボタンを押した。

その瞬間、

ドン！

砂の槍がテルに当たる前に爆発した。

「なっ！」

「私に飛び道具は利かないよ、妹さん」

「双子じゃないですよ！」

ミカは再び砂の槍を飛ばす、

「だから利かないって」

ピッ

ドン！

ボタンを押しただけで槍が爆発した。

「二度目は驚きません！」

その間にミカは間合いを詰め、

「固定せよ！」

空間に砂を固定し剣を作った。

「てええい！」

砂の剣を持ち、テルに向けて振るう。

「次は砂の剣ね……」

テルは数歩後ろに下がりながら剣を避けて携帯を操作した。

カチカチカチカチ

先程の半分も時間はかからず、

ピッ

ボタンを押した。

ドカン！

剣が爆発した。

「うぶ！」

砂が舞い散って互いが見えなくなり、直ぐ近くにいたミカは目をつぶった。

その間にテルは、携帯のボタンを押し続ける。

カチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチ

「えーと……はぁ……やっぱり人の爆発は大変だな……よし、出来た」

テルの死因は、爆発。

密室にガスを貯めて、ライターの火をつけたのだ。

その前にテルは携帯を操作し、友達全員にメールをした。

内容はただ五文字、

さようなら、と。

そして携帯を握ったまま火をつけた結果、携帯はテルの思い形見となった。

携帯にメールをうち、送信するとうった物や指定した場所に爆発を起こす事が出来るという能力。

履歴を使えば、同じ場所に連続して爆発を起こすか、砂の槍を、砂

の剣に書き換えるという新規にメールをうたずに爆発させる事も可能だ。

そしてテルは今まさに、ミカの周辺を爆発させるメールをうち終えた。

「じゃあね、妹さん」

砂にまみれて見えないが、ミカの居そうな方向に携帯を向けて、

ピッ

ボタンを押した。

## 第49話

爆発しなかった。

「…………あれ？ 書き忘れない筈だけどな」

テルのメールは、内容が間違っていると発動しない。とはいっても物の名前か、人の範囲メールアドレスを書けば発動するので、その物が無いか、その人がいないか、あるいはそのものがそのものと同意するかが必要になる。

「ん〜どうしてかな〜」

テルが打ったメールを見た。

範囲 妹さんの3センチ内と書かれている。

「当たり前ですよ」

「え？」

テルの後ろに、ミカは居た。

ドスッ！ ドスッ！ ドスッ！

「えっ…………？」

テルの腹から数本の砂の槍が現れた。

「何で…………無事なの？」

「だから言っただじゃないですか」

ミカはゆっくり歩きながらテルの前に回り、メールの文面を見て、  
呟いた。

私は双子でも、妹でもないんですよ。

一方その頃、

「いや〜避けるね〜、でも、まさか空飛ぶとはね〜お姉さん驚きだよ〜」

「…………それはどうも」

私は鎖を左肩に巻いて宙に浮き、鍵から放たれる電流を避けていた。「でも、もうそろそろテルちゃんが来ると思うから〜その前にとどめだよ〜」

キキは鍵をこちらに向けた電流を貯めて、放った。

「サンダー・キャノン」

それは今まで電流よりも大きく、まるで小銃と大砲ぐらいの差があった。

しかし慌てない、はっきり言って、彼女には負けない、鍵による電流しか使わないような彼女にはだ。

これも簡単に避けられるし、隙が多すぎる。

しかし相方が来る可能性があるのなら、こちらも、とどめをさすでしょう。

私は重力をかけて下へ、足がつかない程度に下がりますは電流を避ける。

そして重力を前にかけて、前へと落ちた。

キキとの間は、直ぐに埋まった。

「おお！」

もらった…………

しかし、キキもそれだけではなかったようだ。

「甘いよ！」

キキは鍵を手前に投げた。

その瞬間…………

何も起こらなかった。

……えっと、

「なんちゃって〜何も起こらないよ〜てへ」  
キキは笑っていた。

「……あの、あなたいくつですか？」

「ん〜？ 21だけど？」

私より上……見えない。もっと下かと思った。  
いや、だからこそこの性格か……

まあいいや。

他人の性格に、とやかく言う必要はない。

何故ならそれで自分がいいと思っているのなら、それが自分なのだ  
からとやかく言うてはいけない。

グラビティア・クロス

ズザザザザザザ



スバシユ!

「あはは、負けちゃった」

最後に弾き飛ばし、キキはその場に倒れた。

あまり、やられた感が見えないが……動けないくらいにはダメージを与えたみたいだから勝ちだと思う。

後になって分かった事だが、

キキの死因は感電死、鍵を閉めた、密室でだ。

故の鍵の思い形見と、電気的能力らしい。

さあ!

第一試合が終わったから続いて第二試合を始めるぜ!

番号七番と十一番、至急コロシアム中央に集まってくれ!

## 第50話

さあ！

準々決勝全試合終了だ！

今は準決勝前の休憩中だが、ここで残った参加者ペアの紹介をさせてもらおうぜ！

まずは番号十一番

石と棒術の男女コンビ

爆走する列車車掌

レイン選手と

香りの棒術使い

アロマ選手！

続いて番号九番

水と人形の少女コンビ

枷をつけた水使い

ミナト選手と

無口なドールマスター

マイ選手！

番号六番

重力と空間の双子コンビ

空を翔る十字架

ツバサ選手と

ですます砂使い

ミカ選手！

最後に、番号三番…

何か……勝手に名前つけられたな……

ああ、声を大にして言いたい、私達は双子じゃないと、あの声に言いたい。

……でも、

「今の聞いたか!? 俺、車掌だつてさ! カッコいいよな! な!?」

「マイちゃんドールマスターだつて! いいな、格好いいな」

「……うれしい」

「うう、私そんなにですます言ってますか?」

「うん」

「確かに」

「……今も言ってる」

「はう!?!」

……喜んでる人もいるし、まあいいか。

今私達は集まって会話していた。その中に、アロマさんはまたいな。やはり私達との年齢差的に会話しにくいのもかもしれないな。

4人が楽しそうに話しているので、私はアロマさんについて考えてみた。

姿や性格は分かったし、能力についてだ。

彼女の能力を知らない分、名前の由来から考えてみる。

香りの棒術使い、そう呼ばれていた。

名前の通りなら棒術が基本、ならば近距離タイプだな。

しかし、前半の香り、これが分からない。もしも香りを操るのならば。距離なんて問わない攻撃が可能となるが、香りなんて持つのは

不可能だろう。

だとしたら、香りの意味する物は何だろう……？  
これから戦う可能性もあるから、レインに訊くわけにもいかないし、  
そもそもレインが知ってるとは限らないしな……

おーい、ツバサー？

「！？、え、えつと、何？」

また深く考えすぎ過ぎていたみたいだ。

「私達の順番です」

「え……ああ、試合ね、相手は誰？ 何番？」

と言っても三択だけど。

「ツバサ、本当に聞いてなかったんだね」

「えっ？」

「……番号は九番……相手は……私達」

いずれ戦うとは思っていた。確率は3分の2だから高確率で戦うと  
思っていた。

ただ、その時が来たただけだ。用意はできている。一度は戦ったんだ。  
いい勝負をしよう。

そう思いながら私は、ミナト達を前にした。

さあ！

準決勝第一試合

此方番号九番

水と人形の少女コンビ

ミナト選手とマイ選手！

「さあ！ 勝負だよツバサ！ ミカちゃん！」  
「……負けない」

彼方番号六番

重力と空間の双子コンビ  
ツバサ選手とミカ選手！

「こちらですよ」  
「良い勝負をしようね」

試合、開始！

カーン！

私は十字架を構えた。既に作戦は決まっている。  
私がミナトと、ミカがマイと戦うという。  
作戦でも何でもない、ただの2対2を行うだけだ。

## 第50話（後書き）

オモイノカタミビト。ついに50話という大台に突入いたしました。一話一話は短いですが、こつした連載を続け、50話というサブタイトルをつける。自分にとって初めての出来事です。

物語はまだまだ続きますので、よろしかったらご拝読を。それでは、

## 第51話

「勝負よ、ミナト!」

私は鎖を伸ばした。

「負けないよ、ツバサ!」

ミナトも水の鎖を作り、飛ばした。

カシン

互いの鎖がぶつかり地面に落ちる。

私は素早く回収し、螺旋状を作った。それをそのままミナトに向けて飛ばす。

「その手は食わないよ!」

ミナトは両手のブイを外して鎖に投げつけた。

カン カン

ブイが鎖に当たる。

だが、これはフェイクだ。

本当は……来た。

シパッ シパッ シパッ

カキン! カキン! カキン!

水切りが鎖に当たる。

鎖が水に濡れ、水が意思を持っているかのように動いて鎖のこちら側に流れてきた。そして、それが変化、水のナイフとなりこちらへと飛んできた。

私は十字架を上へと上げて重力をかける。上へと落ちた。

「おお！ さすがは空を翔る十字架だね！」

「ありがとう」

鎖を戻して左肩に巻き、上への落下を止めた。

「さあ、いくよ！」

「おうよ！ 私も新たな力を見せる時だね！」

そういえば言っていた。ミナトも新たな力を手に入れたと。

水の創造+写真を入れるロケットが2つ。

全く予想が出来ないな。

ミナトは先ほど投げたブイを拾い、腕に取り付けた。

「行くよ！」

次の瞬間、ミナトが腕に巻いたブイが腕から離れ、同時に両腕に水が纏わり。ブイが手の先端に繋がった。

それはまるで銃だった。

ブイには腕を通す為の穴が通っている。それがまるで銃口のように、水が作った機械のような籠手の先端にくっついている。

「アクア・ガントレットって名前を付けたんだ」

ミナトも私と同じで、直接攻撃には関係しないタイプらしい。

「行くよツバサ！」



## 第52話

ミナトはガントレットを宙に浮くこちらに向けて、撃った。

ダウン！ そんな音が合うだろう。まるで濁流だ。

水の帯がこちらへと飛んでくる。私は重力を右へとかけ、右に落ちていく。

瞬間、私が先まで居たところを水の帯が通り抜けた。

「まだまだ〜！」

ダウン！ ダウン！

次は計二発、両腕から一発ずつ撃った。

私は下へと落ちて足が地面に付く前に止める、ミナトへと方向を変えて前へ落ちていった。

今のミナトは、言わば砲台だ。威力こそあれ、射撃の反動でそこから動いていない、いやむしろあれは重すぎて動けないのかもしれない。

だが私も今は鎖を体に巻いていて遠距離攻撃は不可能。なら、ミナトに十字架を当てるしかないな。

私は十字架を前に構え、突きの体制をとった。

ダウン！

ミナトが水を撃った。私は落下をさらに速める。

十字架と水の帯がぶつかった。

若干、私の力が勝り、十字架に触れた部分から真つ二つに水の帯を切り開いて私は前進した。

「おお！？」

ミナトが驚くそこに私が飛び込んで来た。

ミナトとの間合いを詰め、十字架を払う。

ガイイン！

ガントレットのついた両腕により守られた。

しかし攻撃の手は止めない、このチャンスは逃すわけにはいかないから。

十字架に重力をかけて右へ、

ガイイン！

左へ、

ガイイン！

右上へ、左下へ、右下へ、左上へ、

ガイイン！

ガイイン！

ガイイン！

ガイイン！

やはり近接では使いにくいのだろう。ミナトは先ほどから水を撃たない。

その間に十字架を、ガントレットに当てる度に重力を移した。

元より動きにくかった物にさらに重力が増え、ミナトは下へと落ち、「……うっ」

ミナトはついに片膝を付いた。だがそれも一瞬で、すぐに立ち上がろうとしたが、私には純分な隙だった。

私は自らに重力をかけた。地球の約何分の1、つまりは月のように、私は宙を舞った。

そのままミナト後ろに回り、放った。

グラビティア・クロス

ズバシュ！

一方その頃、

丁度ツバサがミナトを飛び越えた時に、  
ミカとマイの戦いに大きな転機が訪れていた。

## 第53話

「うく……へえ……こんな事も、出来るんですね……」

ミカの能力は砂を空間で閉じ込めて扱うというもの。しかしそれは砂だけとは限らなかった。

「……2人を離して」

リアとロマ、2つの人形を空間で固めて動きを封じていた。

人形が抵抗して動く分、ミカはそれに集中して攻撃に移れなかったが、マイもまた自身で攻撃するよりも2人の救出を考えていた。

「すみませんが、それは無理です……これを……外した瞬間に襲ってきますよね？」

「……うん……負けたくない」

「ならば……無理です」

かと言って今の状態では、どちらも攻撃できない。マイ自身は毒をミカに触れれば倒せるが、そこまで考えられなかった。

「……じゃあそのままで」

「え？」

マイは目を閉じて、唱えた。

「……夢を見る人形ロマ……相手に夢を、与えよ」

瞬間、閉じ込められているはずのロマの口が開いた。

シュー

何かが漏れる音が聞こえる。

「な……何ですか？ この音」

「……秘密」

その時だった。

ズバシユ！

「あ……………」

「……………ミナトちゃん……………」

ツバサがミナトを倒した。

「……………ロマ……………もういいよ」

そう言った途端、ロマは口を閉じた。

「どうしたんですか？」

「……………私は降参する……………だから2人を離して」

マイが両手を挙げて降参の意を示した。

「は、はいです」

ミカは空間を無くして2人の拘束を解いた。リアとロマはマイの元へと歩いて行く。

「……………どうして、降参するんですか？」

ミカが尋ねると、

「……………2人同時は……………大変だから……………かな？」

ミナトが負けた今、マイはツバサとミカを相手にすることになる。

リアとロマがいることを考えれば3対2ではあるが、2人をミカに止められていたら、ツバサを無手で相手にすることになる。それは避けたかったようだ。

「……………」

「……………折角だから……………教えてあげる」

「え？」

「……………ロマは体内の毒を気体化できる」

「気体化……………ですか？」

「……………ロマはお父さんがくれた、夢を持つ人形」

「え？」

「……リアはお母さんがくれた、まこと実を知る人形」

「ご両親のくださった、大切なお人形なんですね」

マイは頷いた

「……夢を持つ人形ロマは、毒を気体化して相手に吸わせて夢を見させる。実を知る人形リアは、毒を個体化して相手に直接飲ませて実を知らせる」

「……さらりと、怖い事言いますですね」

「……これが私の戦い方。あのままほおっておいたら……あなたは毒で倒れてた」

「ひい！　さらりと凄い事を言いますですね！」

知らされた真実にミカはびくびくとおびえた。

「……だってこれが、私の戦い方だもん」

そう言つてマイは、ほんの少し、笑った。  
まるでいたずらっ子のように。

その後、

ツバサが2人に近づいた時マイが再び降参を宣言し、ツバサ達の勝利が確定した。

さあ！

準決勝第二試合だ！

彼方番組十一番

石と棒術の男女コンビ

レイン選手とアロマ選手！

此方番号二番…

「いや、強いねツバサ、私じゃもう勝てないよ」

「……おめでとう」

ミナトが目覚め、私達は集まっていた。

「でも驚いたよ、2人共に新たな力を持つてたんだね」

「あれから色々考えたらね、私もマイちゃんも新たな力に気づいたんだ」

「……ミカは無いの？」

「え？ 私ですか……私はまだ皆さん程の力は持っていませんです」

「え？ そうだったの？ それでマイちゃんに勝ったんなら凄いじゃない！」

「いえ……あれはマイさんが降参してくださったからで、実際に戦ったら恐らく……あわわ」

何かを思い出したのか、びくびくと震えていた。マイの毒は外相がないからな、普通に聞いたら怖いかもしれない。

「……それでもない、多分わからなかった」

ミカは新たな力をまだ持っていない。しかし彼女は強い。ならば別に必要はないかもしれないな。

さあ！

数分の休憩の後に

いよいよ決勝を始めるぜ！

いよいよ最後の試合。相手はレインとアロマさん。2人共強いだろう。

……正直言えば、私はこの大会で優勝しなくても構わないと思っ  
ている。

大事なものは今のではなく、本当の大会だ。

今ここで負けても、ただの一敗として残るだけで、その分勝てばい

い。

これは架け橋、ただのショートカットだ。無理に勝つ必要は、無い。ただいい勝負をすればいい。

そう思いながら、私達はレインと対峙した。

周りには、戦いなど見る必要は無いのだろう。私達とレイン達、そしてミナト達と、何故かキキ達が残っている。それだけの人数しかこの空間には残っていなかった。

それと、あの司会だけだ。

さあ！

いよいよ決勝戦だ！

しかし、まだ疑問に思っている人がいると思うから

ここで言ってしまうぜ！

疑問……確かにある。

2回戦突破の席は、後一つ。

しかし、私達は2人組だ。

つまり

この勝負の景品は一つだけ

だけど君達は2人組だ！

よって決勝で勝ったペアには

その場で景品をかけて戦ってもらうぜ！



## 第54話

「は!?!」

「ええ!?!」

「……」

「……」

レインとミカは驚きの声をあげた。

……予想はしていた。決勝は四人によるバトルロイヤルか、こうなるかのどっちかとは思っていたが……

いざ正解だとしたら、それは……それで……

「おい! どういう事だよ!」

レインが声をあらげて司会の声に怒鳴った。

だが聞こえる筈はないだろう、

しかし、

どういう事って

当たり前だろ?

だって席は一つしか

ないんだからな

声が返してきた。聞こえてたのか……

「だったら最初に言ってくれよ!」

レインが再び怒鳴る。

それはそうだ、今までともに戦ったペアの人と、最後の最後に戦わなくてはいけないなんて、苦しくてたまらないだろう。

それはダメさ

司会は声を続ける。

だって……

そうなった方が……

面白いじゃん？

「なっ!?!」

「ええ!?!」

「……」

「……」

とりあえず自己紹介しよう

俺様の名前はフレイ

このシード権大会最初の優勝者

最初に二回戦を突破した男

それが俺様だ!

やはりこの勝負は何回も行われていたのか……

あゝちなみにだが  
俺様の時は

司会はあの声で

一対一だったんだが

あいつは負けた相手に

勝敗数を教えるという

忙しい仕事をしているからな

代わりに俺様が

やってあげているのさ

だからルールを少しだけ

返させてもらったぜ

勝ったコンビは頑張れよ

共に戦った相手との

本当の決勝戦をな

さあ！

話も終わったところで

戦っていたくださましよう

決勝戦

試合開始！

カーン！

「  
……」  
「  
……」  
「  
……」  
「  
……」

開始のゴングが鳴ったが、誰も動くどころか声を出さない。  
当たり前だ。

ただの考えで、今まで共に戦った味方と戦わなければいけない。  
それがどれだけツライか、特にミカはそうだろう。  
レインも、そうだな。

しかし私と……アロマさんは違うようだ。

「……さあ、戦いましょう」

アロマさんの声が、沈黙を破った。

## 第55話

「……本気ですか？」

私があロマさんに尋ねると、

「もちろんです」

間髪入れずに答えた。

「私は生き返りたいのです。これはその為の……言わば近道、進める可能性があるのならば、私は、是が非でも進みます！」

そう言つて彼女が取り出した物は

線香だった。火を

付けると煙と共に香りが出る普通の……なるほど。香りの棒術使い。納得した。

しかし、あれでは棒が小さすぎるだろう。

と思つた瞬間。

その線香はまるで、如意棒だった。

手に収まる程の小さな線香、それが一瞬間の間に伸びて、両手で持つ程の棒になった。丁度、棒術に便利そうな長さに。

「さあ、いきますよ！」

……やはり、アロマさんも参加者だ。

景品の為に戦う参加者。

自ら死を選んで、運命を変える為に戦う。

そんな私達にとって、当たり前な事を決心している参加者だ。

私達は、決心していないから、戦う事を拒んでいるんだな。

そついう意味も含め、この4人の中で、一番大人だと思つた。

しかし、私は違う。

戦いの決心はすでにしていた。

最初にした筈だ。あの鉄パイプの男と戦い、あの十字架を使って男

の首を断つた時に。

戦いは仕方ない、決して避けては通れない。

何にせよ、アロマさんとはいずれ戦う事になるのだから。

それがただ、今になっただけ……ただ、それだけだ。

ガキン！

ミカに向けて降り下ろされた線香の棒を、私は間に入って十字架で受け止めた。

固い音がしたが、硬度も上がってるんだな。

「ツ、ツバサ!？」

ミカがそれを見て驚く、

「ミカ！ これは決まった事なんだよ、いずれにしてもあなたはあの2人と……そして私とも戦わなくちゃいけない。それが今になっただけで、これを避けては前に進めないんだ！」

「前に……進めない……?」

「だから戦おう、私とミカが、前に進む為に」

「は……はいです！」

ミカは力強く頷いた。

「じゃあ悪いけど、ミカはレインと戦って、アロマは私がなんとかするから」

「了解です！」

ミカはレインへと近づいて行った。

「……お待たせしました。戦いましょう、アロマ」

「はい、お互いの避けては通れない道の為に」

アロマさんは間合いをとった。

棒術については理解したから、とりあえずは香りに注意だ。どうやってかは分からないのだが、それを除けばアロマさん……いや、ア

ロマは私と同じ近距離タイプだ。

ガキン！

再びの交差。

しかしそれで終りではなく、一度の離しての二撃目、

ガキン！

続けて三撃目、

ガキン！

四撃目

ガキン！

連続攻撃を十字架で守る。だがそれだけではない。

守る度、十字架に触れる度に、重力を棒へとかけた。ただ純粹に下へと。

「くっ……？」

その棒はもはや、持ち上げるのが精一杯な程重いようだ。

「私は……負けませんよ……」

だが、それで戦う気力は無くならないようだ。

「……私ですよ」

「……仕方ありません。あまり使いたくはないのですが、本気でいかなくは、負けてしまうようなので……これからは本気でいきますよ」

そう言つてアロマは、ある物を取り出した。

その見た目は、拳銃。

しかし次のアロマの行動がそれは違う事を示した。  
銃口を棒の先端に向け、引き金を引いた。

ポツ

それは、拳銃型のライターだった。

銃口の先から出た火は近づけた、線香の先端に火を付け

そうか、大きさが変われどあれは線香。火を付ければ香りが出る。

現に今あの棒の先端は火が付いて白い煙が昇っている。あの周りには線香の香りがあるのだろう。

アロマはライターをしまった。

「さあ、続けましょうか」

恐らく彼女は更に攻撃してくるだろう。

何故なら線香が燃えている。

自らの武器が煙を上げて短くなっているからだ。



## 第56話

予想は当たった。

あれだけ重力をかけた棒を、何もなかったように持ち上げ、そのままは間合いを詰めて横に払って一撃。

ガキン！

十字架で防いだ。

燃えている部分がこちらを向いているので、線香の香りが分かる。よくあるスタンダードな香りだ。

続けて二撃目、

ガキン！

三撃目、

ガキン！

4・5・6・7・8・9

ガキン！ ガキン！ ガキン！ ガキン！ ガキン！ ガキン！

十撃目、

ガキンッ！

先ほどの倍の連続撃。

彼女は本気で、恐らく必死だ。

なぜなら、棒の長さが四分の一になっているから。

故に軽くなって振りやすく更なる連続攻撃が可能に、しかしリーチ

が短くなってこちらの十字架に当たる可能性もまた高まる。

そして線香が燃え尽きた時、どうなっているだろうか。何故なら香りは、毒だからだ。

マイの人形であるロマ、彼女もそうだ。

毒を気体化して相手に吸わせる技がある。線香の香りもまさにそれだ。

あまり吸いすぎはよくない、しかしそれは彼女も同じだ。

ロマのように所持者から離れていれば問題は無いが、彼女の香りは自ら持つ線香からだ。

一番近いのは彼女だ。それは線香が燃える程に近づいてきて、武器も短くなる。

まさに諸刃の剣だ。彼女が望んでそれを選んだ訳ではないだろうが、それで勝ってきたのだ。全ては知らないが、この決勝まできたのだ。戦いの度にいなくなったのは、恐らく本当に休んでいたのだろう。

吸い込んだ毒を、浄化したのだろうな……

そうまでして彼女は、勝ちたいんだ。

先に逝ってしまった夫に、会いたいんだ……

……しかし、ふとハカセの言葉を思い出してみた。

その間にもアロマは攻撃を仕掛けてくる。

ガキン！

この大会は自殺者だけで行われている。

ガキン！

何故病気や殺された人ではないか、

ガキン！

それは私達が死ぬ直前に生き返るからだ。

ガキン！

もしも病死の場合は病氣中、

ガキン！

殺された人なら殺される寸前に戻るんだよ。

ガキン！

思いだしながら、すごい事を思いついた。

これは言っていていいものか、ダメか否か……

もし知っているなら、関係は無い。

しかし知らなかったら、彼女は、どうなってしまっただろうか……

よし、言ってみよう。

ガキン！

既に片手で持てる程の長さとなった線香で戦っているアロマの隙を  
つき、私は言った。

あなたが生き返る時、それは死ぬ直前なんです。  
だからあなたが生き返った場合でも、既に旦那さんは亡くなっ  
ています。

それはあなたが生き返っても変わりません。  
何故ならば既に死んでいますから、もしも勝って、あなたが生き返  
った場合、旦那さんを追えません。

「！！！」

……知らなかったか、アロマのショックは相当のものようだ。

「ウソよ……嘘……うそよね？ ……嘘……ウソでしょ？ ……ウソうそ……嘘だと言って……」

おそらく、この大会に勝つと生き返る、ということを知らず。願いを叶えてくれる、ということを信じていたようだ。

「本当です、あなたが生き返る時は……あなたが死んだ寸前です。追う為にここへ来た寸前なのですよ」

愛する者の為に死を選んだのに、その後を追うためにここに来たのに、それができないと知ったことでここまで取り乱す。

自分のしたことが意味のないと分かった時、たとえどんな大人だろうと、こうなってしまうのか……

「嘘よ……うそよウソよ！」

アロマは飛びかかってきた。既に棒は手に収まる程だ。

それを彼女は投げつけてきた。

カキン

十字架で下に払い落とす。

決着はついたな、彼女の手にもう武器は無い。

正直、悪い事をしたと思う。

しかし彼女程の年齢なら、この真実を受け止めて欲しかった……

後は私が、止めを……

「嘘よ！」

チャキ

え……？

拳銃型ライターを、

私の目の前でつけた。

ボツ

## 第57話

「っ!!」

意外に火は強力だった。

目に火がついた気がする。

頭に近い分、敏感な場所な分、熱さと痛みが直ぐ伝わる……気がする。

それが普通、しかし私達には痛みが無いから、今の私は自分がどうなっているかが自分では分からない。

「嘘よ……嘘をつくから……こうな……るの……よ……」

アロマが倒れたのを見た。

そこで意識が途切れた。

イマノアナタハ、ニジュウニシヨウ イッパイ イチヒキワケダヨ……

あの声を聞いた。

……そうだ。この声が、初めに言ってくれば良かったんだ。生き返る事も、死ぬ寸前の事も、心残りを与える事もだ。しかし声は言わなかった。

何故言わなかった。

理由があるなら教えてくれ。

もしかしたら、まだ私達の知らない何かを隠しているのか？それならそうだと、言ってくれ！

聞こえているだろう！

何か答えろ！

何か

答え

ろ

そこで私は目を覚ました。

目線の先は夕日の空、ここはいつまでも夕日だな。

「目は覚めた？」

ミナトの顔が横から現れて尋ねてきた。

「うん……もう大丈夫」

いったいどれくらい寝ていたのだろうか……

恐らく、試合はもう……そうだ！

私は素早く起き上がり、ミナトに訊く。

「ねえ！ 試合ってどうなったの!？」

「お、落ち着いてよツバサ、ちゃんと説明するから」

「あ……ゴメン……落ち着くから、話してくれる？」

「うん、まずは結果を言うけど……結果は……」

その瞬間、

「……ミカの勝ち」

「言われた!？」

ミナトの隣にいたマイがさざりと言ってしまった。

結果は、ミカの勝ち、か……

結果はマイが言った為、ミナトは内容を語り出した。

それは、私が倒れてからの話。

ライターの火をゼロ距離で受けた私と、香りの吸いすぎと私の言葉によるショックでアロマが倒れたのが

ほぼ同時で、引き分けとなった。

それは知っている。重要なのはそれからだ。

ミカは、レインに勝つたらしい。

それにより優勝したのは私達のコンビ、その後普通なら私とミカが二回戦突破の席をかけて戦う事になっていた。



しかし、私は倒れていた。  
それを知った司会、確か、フレイとか言ったかあの声が、こう言っ  
たそうだ。

おーっと！

こうなったのならば新の決勝戦は最早いらないだろう  
最後のシード席を手にした幸運な参加者は…

ですます砂使い

ミカ選手だ！

「ええ！？ わ、わた…私が、優勝…ですか？」

おめでとうございますミカ選手

そしてお疲れ様でしたミカ選手！

さあ、この光に触れてこちらに来たまえ

そして二回戦が終わるまで充分すぎる程の休息を  
とってくださいませ

そう言つて、光の柱が現れたそうだ。

「……」

その時ミカは少し考え、手を触れたらしい。

「……」

「その時に、アロマさんが起きたの」

「アロマが？」

早い目覚めだな。しかし私のように顔が焼けたとかではなく、毒と  
精神的ダメージだ、治りは早かったのだろう。

「それからアロマさんは、あの司会に聞いたの。ツバサが言った事  
は全部本当なんですか？ って」

「それで？」

「本当だよって、ただ一言だけ」

「……………」  
「流石に少しショックを受けたみたいだけど、直ぐに私達の所に来て、ツバサに伝えてくれ、って伝言を預かったの」

ツバサさん。

あなたの言った事は全て本当に正しいのですね。  
しかしそうと知ってしまった以上、私はさらに負ける訳にはいかな  
くなりました。

夫以外にも私を思っている人がいるから、私は存在する。  
たがらその誰かの為に私は負けられません。必ずや生き返ってみせ  
ます。

もしまたどこかでお会いしたのなら、そこはおそらく決勝の場で、  
あなたが私の最後の壁です。

その時はまた、良い勝負をしましょうね。  
ではまた、何処かで。

「そう言い残してアロマさんは、この空間を出ていったよ」

「……………アロマ……………さん」

「でね、ミカちゃんもツバサが起きたら、伝えてほしい事があるっ  
て」

「ミカも？」

その言葉はこうだった。

ツバサ。

まずは、すみませんです。

あなたと戦いもせずに席を手に入れてしまっ

本当ならこれは、あなたの物。あなたが私に勝って手にした物です。

しかし、私にも生き返りたい理由がありますです。

私は……………

自分が分からないのです。

本当の名前はもちろんの事、親も友達も、全てをです。

だから私は、自分の事を思い出す為に生き返らなくてはいけません  
です……

だからすみません……です。

……そして、こんな事を言うのは悪いかもしれないのですが……勝  
ってください。

そして、三回戦に来て下さい。

そしてそこで……出来れば決勝戦で。本当に本当の決勝戦で、私と  
戦いましょう。

私はツバサを、遠くで応援してますです。

## 第57話（後書き）

今回で『オモイノカタミビト』一区切りとなります。

話自体はまだ続きますが、次回は流れとは関係の無いものを一度挟み、少し間を置いてから再開する予定です。

つきましては、ここまでの感想、一言、ご指摘をお待ちします。

もしも予想以上のメッセージがありました場合、予定を早めたりする可能性もあります。

ここまで読んで下さったその貴方、何か一言送ってみませんか？

それでは、

## 研究レポート byハカセ

やあ、コレを読んでいるキミ、初めまして。あるいはコンニチワ。私の名前は……まあ、ハカセとでも呼んでくれ。

これは、私の居るとある場所についての、他に研究者がない為に私が調べて書きまとめたレポートだ。

ん？ 何故レポートに誰かが読んだ上での自己紹介や説明書きがあるのかって？

それはまああれだ。ある魔法の言葉を唱えておいてくれたまえ。

なに？ 魔法の言葉を知らない？ ならば特別に、この後に記載しておこう。

それを唱えてから、この先を読むようにしてくれ。

## 魔法の言葉

『細かいことは気にしない』

さて、魔法の言葉を唱えたところで再度記載するが、コレは私が今居るとある場所の出来事や事柄、ここに存在する者達の少々変わった能力を調べて記載したレポートだ。

なに？ さつきと違うって？ そこは魔法の言葉を（以下略）

このレポートは、大きく分けて4つのグループにて記載されている。まず初めは、この世界についてだ。

## 1. 世界

まず、この世界は太陽や月という照らす為の光が無く、どこかにある光源のおかげで普通の行動をする上では問題無いほどの明るさしかない。

だがそれでも暗さの方があるので、視野及び歩行による距離や広さの計測。つまり世界の大きさは不明だ。まあぶつちやけ歩いて調べようとは思わなかったただけだがな、あまり運動は得意ではないんだ。とにかく端から端まで、そもそも端があるかも分からないが、世界の大きさは不明のままだ。

この世界には、建物、囲いという物は無いが、ただ、『扉』だけはある。

世界の至るところ、おそらく等間隔にその『扉』は浮いている。

『扉』は計……ある特殊な『黒い扉』を除いて、七枚。その『扉』は開くことで、その世界とは異なる場所に移動する事が出来る。そこは『扉』に入る前の世界とは違い、建物、植物、あらゆる普通に存在する物が存在する。

この世界は、『扉』の奥の世界、仮に『扉空間』としておこう。

この『扉空間』は世界に存在する『扉』の数に、押して開くか引い

て開くか、その2動作により異なることで二倍、だがある2つの『扉』は同じ『扉空間』に行く仕掛けがしてある為、 $5 \times 2 + 2$ の12箇所あるということだ。

『扉空間』がある理由はいまいち調べ方が分からずよく分かっていない。決して外を歩くのが億劫な訳ではないぞ？ 本当だぞ？

なのでここには、分かっている限りの事柄を、私の予想を混ぜてここに記載しておこう。

・『扉空間』はある一定の区切り……それについては後に記載するとして。風景が変わっている。これはこの世界で主に動く人物達に合わせて変えられているものだと考えられ、現に、その『扉空間』にどことなく見覚えがある。あるいは似たところを知っているという者が幾人もいる。

・私が思うに『扉空間』は新たにこの世界に来た新参者に対して、ある意味で未練を思い返させる為の優しさだと思われる。

続けて、二つ目、この世界にいる人。人物についてだ。

## 2. 人物

まず初めに記載するが、この世界を訪れる者に、ちゃんとした生者、ちゃんとした死者はいない。加えて人間ではないのであえて人物と上に記載した。

手前の世界で自殺、及び自発に死んでしまった者が手前の世界の誰かに忘れられずに思われる事で存在する。死にきれてない者達。それがここに存在する人物だ。

ここでは『オモワレビット』と記載しよう。

『オモワレビット』が何故ここに来るのか。それはこの世界で戦い、願いを叶える為だ。

その願いとは……いや、それは書いてはいけないな。誰が読むか分からないからな、忘れてくれ。

言ってしまうえば、この世界、『扉』、『扉空間』は、『オモワレビト』達が戦う為の場所なんだ。その戦いにちゃんとした名前は無いが、それを名付けることはあえてやめておく。始めた本人の意思無しに名づけることは悪いからね。戦いは新たな『オモワレビト』が一定の数に達すると開始され、あらゆる手段で百人にされる。

前に一度、何故百人になつたら初めないんだい？ と聞いた事があったが、そうしたら……おっと、これではレポートではないね。百人になつたら改めて世界へ新米『オモワレビト』達を招き、戦わせる。そして優勝すると、願いを叶えてくれるのだ。

ここで、ある一つの謎が生まれる。一人は願いを叶えられたとして、残る九十九人はどうなるのだろうか？

それは……前にも記載したが、コレを読む者を考慮して、ここに書く事は自粛しようと思う。

これを読んだ者で、関係者ならば、それはその身で見えて知ってほしい。

ここからは、3つ目

### 3. 戦い

前記で『オモワレビト』は戦っているとしたが、それは肉弾戦ではない。

『オモワレビト』達には死んだ後最後にその手が触れた物が彼らの武器になる。更にその死因が、武器に特殊な力、魔法や特殊能力と言ってもいい力が付き、それを手に『オモワレビト』は戦っている。その武器がある時数人で名前決めをして、『思い形見』と名付けたのでここでもそう呼ぶ。

ここで『思い形見』を持つ『オモワレビト』を、『カタミビト』と言い換える事にする。何故かは　　これを読んだ者に考えても



らおう。

『カタミビト』はこの世界と『扉空間』で優勝者を決める戦いを行うことが定めで、避けては通れない事柄である。

『カタミビト』には痛覚の概念が無く、『思い形見』で傷つけたところで痛いと思うことは無い。だが体には限界があり、特定以上のダメージを受けるとダウン。それが戦いの負けとなる。

負けるとその『カタミビト』に今現在の戦績が言われるらしいが、それを聞いた事は無いので他人から聞いた事だ。

『思い形見』は『カタミビト』の数だけあると言って過言ではない。その者の死因。最初に手が触れた物。十人十色多種多様の様々だ。私が今までに見てきた物も、2つと同じ物はなかった。

さて、ここからは4つ目としておくが、これは正直読み飛ばしてくられても構わない。

なに、ただ少し私の思った事を記載するだけだから読んでもらっても構わないのだけれどもね。

#### 4・この世界のイレギュラーについて

イレギュラーという事態。それはルールから外れてルールでは処理出来ない事柄を差す言葉だ。

私がコレを書いている時、この世界でもイレギュラーを二回見たことになっている。

一度は当事者として、もう一つは傍観者として。

一回目は、別に願いを叶えなくてもいいと言った女性の時。

二回目は、勝敗の数が全く同じになった者達がいた時。

もしかしたらその以前にも行われた可能性はあるが、それは私には分からない事だ。

ただルールが簡単で、それでいて難しい分、イレギュラーはよく起きることだったりする。よく今まで二回しか起こっていないと思っ  
た。

出来れば関わりたくないが、私は研究員のため、そして自身の待遇  
の為、関わらなくてはいけない。

これから先、幾回ものイレギュラーを見るかもしれないが、その度  
に改善点を見つけて治していけばいいさ。とプラスに考えている。

さてと、ここまでとしておくが。最後の一言。

コレを読む者、どこの誰が読んでいるか分からないが、もしも、こ  
の世界外の誰かが読んでいたとしたら。

こんなものがあるということを知っておいてほしい。

著者 八カセ

## 研究レポート by八カセ（後書き）

これは『オモイノカタミビト』における八カセの研究レポート。

今までのそうまとめのようであり、謎を解決できたり、新たな謎を残していたりと、プラスマイナゼロになるような物です。

少し間をあけて、物語は再開しますので、これをご覧の方は少々お待ちを。

それでは、

感想及びご指摘、あるいは一言、お待ちしております。

## 第58話（前書き）

再開いたしました。『オモイノカタミビト』  
彼女たちの物語は、終わりへと着実に近づいている。

## 第58話

目が覚めた時、私はまず困惑した。  
何故なら死んだ筈なのに、感覚があつて 手足が動いて 目が見え  
たからだ。

目の前は暗かつたけど、あの景色以外は初めて見た。  
これは何なのか。考える前にあの声が聞こえてそのまま一回戦が始  
まった。

相手の男の人は、絶対に私を、もう一度殺すつもりだった。  
しかし私にも、男の人のような武器はあつた。だから勝てた。死に  
物狂いというやつだ。あ、もう死んでたっけ。あはは……

……私は何で死んだんだっけ？

あの声が教えてくれた、あなたの死に方が力になる。

何とか思い出して使ったけど、何で………だっけ？

確か………た時………

てた気が………けど。

どうして、だっけ………？

あれから、幾日過ぎただろう。しかしこの空間には日の傾きが無い  
ので実際の時間は時計を見ないと分からない。どうやって時計は動  
いてるのか、もう謎にも思わない。実際数えてないからな。

まあ幾日なんてこの際、どうでもいいのだが……とにかくだ。  
私は今、ハカセの部屋にいた。

ここには私だけでは無く、ミナト、マイ、レイン。修行していたスノウとマチ、そして何故かキキとテルがいた。

2人に何故居るか尋ねると『細かい事は気にしな〜い』と軽くあしらわれたので、気にしないことにした。

ちなみにレインは今、暗闇の先でハカセと修行中。かれこれ28日ぐらい前だ。多分。

参加者の人数は全100人、つまりは私を除いて99人、そして大会で抜けた4人を除いた95人と戦う。用は最低95戦すればいいのだ。

私は特に試合数が少なかった訳で、会った人全てと戦う勢いで戦い続けた。

結果、今に至る。

最後の、戦いを終えた時にあの声を聞いた。

オメデトウ アナタハゼンイントタタカイマシタ

センセキハ キュウジユウヨンショウ イツパイ イチヒキワケデス

アトハミンナガオウルマデ マツテイテネ

皆が終わるまで待っていて、それは94人が皆、全員と戦うまでだな。

そういうなら待つとするよ、のんびりとね。

そうして早幾日か、日付を数えればよかったなレインが修行に入る前には戦い終わっていたから、28日以上、それだけだ。

「平和だね〜」

「……平和はいい事」

「でも暇だな…」

「仕方ないわよ、私達は全員と戦ったんだから」

そう、今ここにいるメンバーの共通点は全試合終了だ。

ミナト 8 2 勝 1 3 敗

マイ 9 2 勝 3 敗

スノウ 7 2 勝 2 3 敗 1 引き分け

マチ 7 0 勝 2 5 敗 1 引き分け

キキ 6 5 勝 3 2 敗

テル 7 5 勝 2 0 敗

レイン 9 4 勝 5 敗

そして私、ツバサ 9 4 勝 1 敗 1 引き分け

皆の試合数が異なるのは大会で抜けた相手と事前に戦ったからで、レインの 9 9 戦、つまり全員とが一番多い。

ちなみに負けた相手 5 人を聞いてみたら、

あの時の司会 フレイ

奇妙な男 ゼロ

私も負けた モク

大会の決勝で ミカ

そして最初の最初に 私

フレイは知っているが、ゼロという男は知らなかった。なので皆に聞いてみたら、ミナトとキキが戦った事があるらしい。

だが、よく覚えていなかったようだ。

あまり喋らないで、ただ試合を申し込まれ、知らぬ間に負けてしまったそうだ。

……ふう、暇だな。

最初の方は話が弾んだ。しかしそれも長くは続かず、後はハカセの書齋で本を読むか、お腹が減ってあらゆる所に行って食べ物調達して食べるか、ぐらいしかなかったから……

……よし。

「どうしたの？ ツバサ」

「私も修行するよ、それにあの空間なら時間の流れも早いから時間が潰せる」

そう言い残して暗闇の中に入ろうとした。

その時、

「私も行っていい？」

「……私も行きたい」

「俺も修行したいぜ！」

「じゃあ私も行くわ」

「私も手伝うよ」

「私も！」

皆が言ってきた。

……暇だったんだね、皆。

そうして、私達は暗闇へと飛び込んだ。



## 第59話

そして私はそのまま、二回戦に突入したようだ。

始めは暗い空間を歩いてた。前は見えるけど全体的に暗く、ふらふらと歩いていたら、

ガン！ 扉に正面からぶつかった。痛みはなかったけどね。

扉は押すと開いたので、中に入ってみた。

そこは町並みだった。先ほどまでの暗い空間よりマシだ、とか思いながら歩いていると、私と同じものに、参加者に出会った。

既に彼は戦う気満々だったので、私も武器を構えて戦った。

何とか勝つ事が出来た。

倒れた男の人はそのままに、私はその空間を出た。

ここにはこういうところが他にもあるらしい、ぜひとも他の所も見てみたい。そう思って、扉を探して歩き回った。

何故なら私は、……………直…の…しか……………た…ら…  
も…っ…と…い…ろ…ん…な…景…色…を…、…見…た…か…つ…た…か…ら…だ…。

いずれ来ると思っていた。

その時は、必ず来ると思っていた。

その時は、必ず来るに決まっていた。

そしてその時は、

やって来た。

ミナサン ナガラクオマタセシマシタ

あの声が聞こえた。今この場所に居る、ハカセ以外の全員にそれは聞こえているらしい。

イマ コノコエガキコエテイルミナサंगा ニカイセントツパシタ  
ミナサンデス

つまり、私達は残れた全員残れたようだ。

イマカラシテイスルバシヨニ アツマツテクダサイ

ジカンハカカツテモカマイマセン ゼンインガソロツタトキニサ  
ンカイセンヲセツメイシマス

デハ アツマルバシヨハ ココデス

頭の中にある場所が浮かび上がる。

ここは……あそこか。皆も分かったらしい。

そして、あの声が聞こえなくなった。

今からその場所に行くのは簡単だ。しかしそうはしない。

何故なら、

「ハカセ、今までありがとうございました」

私がお礼を言うと、皆も一言ずつお礼を言った。

「いやいや、どういたしましてだよ」

ハカセはいつもの調子だ。これでサヨナラなのに……

「一先輩としてアドバイスするけど、恐らく三回戦からは全部トーナメント。つまり一回の負けは夢の終わりだ。なるべく負けないよ

うに、皆頑張ってくれたまえ」

「はい、ありがとうございます」

トーナメントか……確か人数は100人の4分の1で、25人。それに加えてシード者4人の計29人。

一対一の対戦の場合、奇数はとても数が悪い筈だ。何かしら対策があるのか？

「では、私達はこれで……」

ハカセに挨拶して私達は扉を抜けようとして扉に手をかけた。

その時だった、

「ちよつと待った」

ハカセに止められた。振り返り尋ねようとしたら、

「あゝいいからそのまま、むしろそのまま聞いて」

「はい」

「よろしい」

そしてハカセは言った。

「トーナメントとは言わば、複数人が違う入口から入りその内ゴールに出れる道はたった一つしか無い迷路だ、それは分かっているね？」

「……はい」

皆も分かったと言った。

「だがこの迷路の出口は、決して一つだけではない……決して1人だけではない……これは分かるかな？」

「……いえ」

皆も分からないと言った。ハカセは何が言いたいんだ？

「よろしい、それでいいよ。皆頑張れ……そして、さようなら」

その声は、いつものハカセとは違った。

「……はい、ハカセもお元気でいてくださいね」

「勿論さ、もしもまた来るようなら、ここに来たまえよ。助手として歓迎するよ」

……いつものハカセだ。

「…………お元気で」  
私が扉を開け、私達は部屋を出た。

…………皆が行った数分後、  
「ふむ、皆は分からないと言ったが…………分かった者は何人居たのかな？ ……さて」  
ハカセは立ち上がり、本棚に納められた一冊の本を取り、開いた。ペンで字を書き、閉じる。そして再び開いたそれを読みながら、暗闇の中へと消えていった。

## 第60話

扉を開ければ、

そこは海岸だったり

そこは雪国だったり

そこは山道だったり

そこは町並みだったり

そこは草原だったり

そこは砂漠だったり

そこは闘技場だったり

色々な景色がそこにあつた。

私が唯一……………る。……………いた…の景…ではない新たな場所の景色。

次は何だろう、そう思いながら見つけた扉は今までとは少し違っていた。

この暗い空間の中でもなぜか見えている、不思議な、真つ黒な扉だった。

入るのが少し怖かった。でも、この扉の先は何なのか、何があるのか、また新しい景色なのか、と好奇心の方が勝った。

黒い扉を開いた。

あの声が指定した場所、それはあの闘技場だった。私達が行くと既に他の参加者が集まっていた。

その中にアロマさんが居た。言い換えれば他の参加者の名前を知らないからだが、一度戦って会っている筈だけど覚えている顔は少な

かった。

ソロイマシタネ

あの声が聞こえた。

デハイマカラココト トビラヲキリハナシマス

言った途端扉が消えた。これで他の参加者がここに入る事は無いのか。

しかし、残った参加者はどうなるのだろうか？

……あの時みたいに消えてしまうのか？

分からないが、いずれ分かると思いつながら私はあの声を聞き続けた。

サンカイセンハ トーナメントデス

シカシ イマココニハ ニジュウゴニンイマス

デスガ ダイジョウブデス

マズハ クジヲヒイテクダサイ

そうやって現れたのは、白い箱だった。言葉の限り、中身はくじのようだ。

周りの参加者から順にくじを引いていったので、私達は後に残った物を引く事にした。

最後の一枚を私が引いた。

紙に書かれていたのは

「え？」

「ツバサは何番？ って、あれ？ 白紙じゃん」

何も書かれていなかった。

まさか、ハズレか？

これは二択だな。アタリかハズレ。

奇数を補う為のシードなら、アタリ。

奇数を補う為の失格なら、ハズレ。

さあ、どっちだ……

くじに書かれた同じ番号どうしが戦うとか、運良くレイン達は互いに当たらなかったらしい。

それを伝えた後、あの声が続ける。

クジノナカデ　ハクシノ　カタ　オシエテクダサイ

私だ。

「……はい、私です」

私は挙手で標した。周りの参加者の視線が集まる。

アナタハ　シードセンシユヨニンノウチ

ダレカ　ヒトリトタタカツテイタダキマス

シード選手の誰かと戦う。これは、ハズレくじだな。

シード選手とはつまり、大会の中で行われた大会を勝ち抜いた参加者で、つまりは強いという事だ。

確か4人とは、

一度負けた事のあるモク

同じ大会で優勝したミカ

謎の多い強敵の男ゼロ

そして……

「はっはっは！　俺様の相手はどこ誰だ？」

……あいつだ。

あの時の司会で、正直言えばムカつく男で。

第一回大会優勝者の、フレイだ。



## 第61話

「おや？　こんな所に何の用事だい、お嬢ちゃん？」

黒い扉の先には書齋があつた。

見渡す限りの棚、それに隙間無く本が詰まっている。

正面には机、上には羽ペンと紙数枚に本数冊、そしてその机の奥にある椅子には人が座っていた。

「ふむ……もしかして君……」

な……何だろう……？　もしかして、入ったら駄目だった場所なのかも。

それを知らずに入った私を、もしかしたら……

「ご、ごめんなさいです！　私は扉を探していただけで、ここは入ったら駄目、とか聞いていなかったものですから！　す、すみませんです。直ぐに出ていきますですから、どうかお許しを！？」

「落ち着きたまえ、ここは別に入ってはいけない場所ではないから」

「そ……そんなんですか？」

「そんなんですよ。まあ立ち話も何だな、座って話でもしようではないか」

そう言つてその人、多分……男の人は手に持っていた本にペンで何かを書き、本を閉じた。

瞬間、椅子が現れた。

「かけたまえよ、迷い子のお嬢ちゃん」

「……はい、です」

私は大人しく椅子に座った。

私とフレイの試合の順番は最後だった。

それまでは皆の試合を見ていた。

勝利条件は前と同じで、相手の体力をゼロにすれば勝ち。致命傷は

致命傷になる。全く同じルールだ。変わりなくて助かるな。レイン達は勝った。アロマさんも勝っていた。そして次は、私の番だ。

「頑張つてねツバサ！」

「アイツは本当に強えから気をつけるよ！」

「……負けないでね」

レイン、ミナト、マイの3人が応援してくれた。

「うん、負けないよ」

それだけ言つて、私はコロシアムの中央に向かった。

私が付くと、まだフレイは居なかった。そういえばどこから現れるのだろう？

その時だった。一筋の光がコロシアムの中心に落ち、そこから男が現れた。

これがミナトの言っていた一筋の光か。

「はっはっは！ 待たせたな参加者よ！」

男の口調からいって、彼がフレイだな。

「俺様がフレイだ！」

いや、今名乗ったから確実にこいつがフレイだ。見た目は同年代か上、黒いズボンに赤いシャツ、青黒いマントを羽織った。見た目からウザい奴だ。

しかし実力はあるのだろう、いつ開かれたからは知らないが、シード権大会の優勝者だ。

油断出来ない勝負になるだろう。

アツマリマシタネ

あの声が聞こえた。

「おう！ さっさと始めようではないか！ 俺様は最初に勝つてしまつてから、暇で仕方なかったのだ！」

……確かに私も、戦いは久しぶりだ。

修行としてレイン達と稽古はしたが、本気の勝負は久方ぶりだ。

「さあ！ 早く始めようではないか！」

デハ イツカイセンサイシユウシアイ

カイシ！

カーン

ゴングが鳴り響いた。

## 第62話

まず驚いたのは、私達は自殺した人で、生き返る為に戦っている事。そして更に驚いたのは、ハカセが女の人だった事でした。それから暫く話をして、私は思いだしていた。

こ……………誰と……………事があ……………の……………達が……………のか。  
そ……………も私は……………のを

「さあ！ 楽しませてくれよ勝ち抜いた参加者よ！」

先手をとったのはフレイだ。

正直な所、私は不利だと思う。何故ならアイツは私が戦っていた時に司会をしていた、私達の手を知っている筈だ。それに引き換え私はアイツの能力など知らない。

まあ、何にせよ私は戦い、勝つだけだ。

友達との約束を果たす為に

パチン

ガキン！

……………油断などしないさ、

私は十字架で飛んできた物を防いだ。

それは刃だった。横に長く縦に薄い、赤黒い刃だ。

まるで血のような色の……………いや、香りがした。本物の血だ。

「……………フレイさん、あなたはいくつですか？」

普通ならあり得ない試合中の質問、アイツはやはり答えた。

「おお？ 俺様は19だが？」

年上か、

ガキン！

防いでいた刃を下に叩き落とした。

「ふっふっふっ、一つ守ったところで変わりなんてないぞ！」

パチン　パチン　　パチンパチン

ガキン！　ガキン！　　ガキン！　ガキン！

一直線で合図がある為に防ぐ事は容易だが、数が多すぎる。

アイツはただ、指パッチンをするだけで刃を呼び出すのだ。

「はっはっは！　ただ守っているだけでは俺様には勝てないぞ！」

確かにそうだ……アイツの技は見切った。

私は鎖を左肩に巻いた。

「さあ！　これで終わりにさせてもらっぞ！」

パチン

再びの指パッチン。それを合図に私は飛んでくる刃を飛び越えた。

その空中体勢のまま重力変化、前へと落ちた。

そのままフレイへと近づく。

「おお！　やるではないか、そうではなくては楽しめないな！」

パチン　パチン　パチン　パチン　パチン　パチン

六枚の刃を放った。

ガキン！　ガキン！　　ガキン！

まずは三枚を払い退け、次の二枚を重力の方向を変えて避ける。最後の一枚を、

ガキン！

下に叩き落とした。

「な……！ やるではないか！ しかしまだ俺様は負けてないぞ！」  
……あれ？

もしかしたらアイツ……試すか。

フレイとの間合いを詰めて十字架を振り上げ、振り下ろした。

「うお！」

ガン！

フレイの少し横の地面を叩いた。わざと当てなかったのだ。

それだけでフレイは、目を瞑った。

やはり、ただの口だけ野郎みたいだ。普通ならあれで目をつぶっているようでは簡単に負けるはずだ。

そう思つて、考えてみる。

レインに勝つたらしい、だがそれはかなり最初の方、おそらく私が勝つた後のあの時のレインに勝つたとなれば、そこまでではない。皆強くなっているのだから、今の私ならあの時のレインは楽勝だろう。

第一回大会優勝者、それだけ考えれば凄い。しかし第一回大会がいつ開かれたか知らない。もしかしたらかなり最初の、まだ新たな力に誰も気付いて時に開かれたのかも知れない。

フレイの力は、ただ刃を飛ばしているだけ、だがこれぐらいの力なら最初の方のあまり強くない参加者が集まれば勝てる事は出来るだろう。

そしてあと一つ、

これは聞いてみるか……

「あの、あなたの戦績を教えてくださいませんか？」

するとフレイは、

「ん？ 俺様の戦績か？ いいだろう、教えてやろう！」

あっさり答えた。

「6勝0敗だ！ どうだ驚いたろう？ 俺様は、無敗の帝王だぞ！」

「はっはっは！」

……試合数が少なすぎる。暫く戦ってないとは言ってはいたが、まさかここまでとは……

……もういいや、

コイツは本当に、

口だけで、

第一回大会優勝者で、

弱い奴だった。

「ありがとうございます……では」

「え？」

グラビティア・クロス

## 第63話

私は何者何だろう。

生……た……し……は、記……なす……る。

だって……び……る前の……憶……、……切……出……いの……ら  
私って一体、何者なのですか……？

ドシャ

強烈な一撃を受けたフレイが地面に叩きつけられた。

動かない所を見ると、勝ったようだ。これはアタリくじだったな。

その時、フレイが現れた一筋の光が新たに三本現れた。それは私が  
勝つたために、本当の三回戦が開始されることの証明でもあった。

光の中から、シードとなっていた3人現れた。

1人は眼鏡をかけた大学生、モク。

1人は全身黒づくめの服装、髪が目にかかる長さの、同い年くらいの  
少年、彼がゼロだな。

そしてもう1人は、

「……ミカ」

「ツバサ……」

「私来たよ、約束を果たしに」

「ありがとうございます……でも……」

「でも？」

「……いえ、何でもないです」

「？ そう？」

明らかに何か言いたそうな顔をしているけど……

ダイイチシアイシヨウシャノミナサン オツカレサマデシタ



ツツケテダイニカイセンノ タイセンジュンヲキメマス

ミナサン クジヲヒイテクダサイ

次の第二回戦からは、シード選手3人が加わり計16人。これで偶数、しかも普通のトーナメントが開始できる……考えたものだな。私の番号は二番だった。

皆の話を聞いて回った結果、レインとキキ、マイとテルが戦うらしい。

そして、私の相手は…

「……ゼロか」

謎多き黒ずくめの男、第二回シード大会優勝者のゼロだ。

再びのシード選手との戦い、彼は恐らくフレイのように弱い訳はないだろう。第二回大会となるといつ開かれたかは知らないが、恐らく私がモクと戦った後ぐらい、私が修行していた頃だろう。その頃には新たな技を使う者も現れ始めていただろう、その中を勝つたのだ、強敵な筈だ。

そして、第二試合が始まった。最初の試合にアロマさんが出ていた。相手は分かっていたが試合の順番が分からない以上、それまでに間にゼロ対策を考える為、皆と別れて一人考えていた。その時だった。

「ツバサ」

振り返って見ると、そこにはモクがいた。

「何か？」

「いや、特に用という訳ではないが……お前、フレイと戦ってみてどうだった？」

「正直言つて、強くなかったですよ。何故大会に優勝できたかを疑います」

「無理もないさ、そうだな……アイツについて、まあアイツが勝手に語った自分の事を話してやろう」

モクは語りだした。  
それは、ある男がここに来るまでの話。

我が道は自分で決める。これが俺のポリシーだった。

しかし、そんな事ができる存在ではなかった。

言わば実験体だ。実験体でしかなかった。

俺はある実験の実験体選ばれた。

人は首を断つても、断ってから直ぐならば呼び掛けると反応がある。

聞いた瞬間に分かったのは、反応した直後に反応出来なくなる事だ。

拒否権など無かった。それが実験台として育てられた俺の運命だったから。

ああ、次に生まれるなら。俺は支配者になりたい。

司会でもいい、俺の作ったルールで、誰かが戦うのが見てみたいな  
……

ドスン

「……」

「アイツはギロチンで首を断つて、手には血が染み付いたらしい」  
あの刃はギロチンの物だったのか。

「血の刃とは、とんだ執念から生まれた武器だよ……出現条件が  
簡単だから、運良く勝てたんだろっよ」

フレイの武器は、血で作られたギロチンの刃。それを指パツチンを  
合図に呼び出して相手を断つ、レインと似ているが、レインよりも  
威力がある。遠距離連続高威力タイプ。

実験の為、自ら自らの首を断った、支配欲のあつた男。

それがフレイだった。

## 第64話

「……  
「おい大丈夫かい？」

「……！」

しまった。深く考えてしまっていた。

私は考え事をしてしていると、知らぬ内に1人の世界に入ってしまうのだ。

私は頭を左右に振った。

「すみませんです……もう大丈夫ですから」

「ふむ、君はやはり面白い。私の助手にならないか？」

「助手……ですか？」

「ああ、私はここから出られないのでね。君が色々謎をここに持ち込んできてくれればそれでいい」

「助手……」

「どうかね？」

私は悩んだ。誰かと関わるのは初めてな気がする。

「……何故だ？」

今の年齢になる今の今までに誰とも関わらない事なんてあり得るのか？

それともただ、忘れていただけか？

「……びりて……あの空間で目が覚めるまでの……れて……らのそ……  
時まで……忘れている？」

あり得るのかな……あり得るのかもですね……

暫くの会話の後、モクの順番になり。

「じゃあな、誰が相手か知らないが頑張れよ」

「あなたもね」

「ああもちろんだとも、じゃあ……ん？ どうしたんだこんな所で？」

私からは見えていないが、モクが柱の影に尋ねている。

誰かは分からな……

「ほう！？ すみませんでした！ 別にお二人の会話を聞くつもりはなかったのですが、声が聞こえたものでして、そちらに向かったらお二人が居ただけでつい隠れてしまっただけで……えっと……」

…誰かは分かったが、姿はまだ見えない。

「どうしたのミカ？」

「あ、あの……」

柱の影からミカが現れた。

じゃあな、とモクがその場を離れていき2人きりになった。

「何か用事？」

「え、えと……その……」

何だろう、最後に会った時と何かが変わった気がする。

性格ではない、見た目でもない、相変わらず髪の色意外は昔の私そっくりだな……？

……昔の……私？

確か……私は昔……

「ツバサ？ どうかしましたか？」

「！ いや、大丈夫だよ」

「そうでしたか、なら一安心です」

「それで、どうしたの？」

「はいです。えっとですね、ツバサの相手って誰何ですか？」

「私は、ゼロっていう男の人だけ……」

「でしたら！ 私がその人について教えますです！」

そうか、ミカはフレイやゼロと同じようにシード大会の優勝者、彼らと話す機会があった、つまりはゼロについて知っているという事だ。

「ありがとう、早速教えてくれる？」

「了解です！ あの人はずね……」

そして私の番になった。

私がつどりつくと、相手は既に来ていた。

改めてみてもゼロは不気味だ。

黒い靴、ズボン、服、髪、まさに黒づくめだ。髪は目にかかり、目が見えるのかと尋ねたい。

「……大丈夫ですよ？」

答えがきた。尋ねてないのに何故分かるのか。

理由は分かっている。

でもその前に、ミカが教えてくれた事。

彼の死因は、自らによる舌切り。そして思い形見は……

空気だ。

## 第65話

「助手になりますです」

「そうかい、歓迎するよ。えっと……」

「？　どうかしました？」

「名前を聞いてないからね、何て呼ぼうか考えていたんだよ」

「あ、すみませんです。まだ私、名乗っていませんでしたね、私の名前は……」

……あれ？　私の名前って……

「無理してはいけないよ、私達は生前の名前を忘れているからね」

「そうなんですか？」

「そうなんですよ。だから自分で新しいの考えてたまえ、それで呼んであげるからさ」

「私の……新しい名前……」

……何故だろう。新しい以前に、私にはちゃんとした名前が無かった気がする。

そんな筈は無い、忘れてるだけ、その筈だ。

そうだ、

そうに違いない、

そうだとしよう、

そうしよう。

さてと、名前だ。

私の、名前だ。

どうしようかな……

ゼロは生前、空気を読むのに長けていたらしい。

誰がどうしたら怒る、誰がどうしたら泣く、それらが手に取るように分かってしまい、まるで空気に触れて会話していたと言ってもよかったですか。

しかし彼は一人だった。その不思議のせいで、彼に近寄る者はいなくなり、彼は一人になった。

ここではない何処かならば、私を受け入れてくれる。私を仲間に入れてくれる。

そんな場所に行けるさ、今の私の周りは何も無い。

私は……ゼロだ。

悲しい話だとは思わない。

それ以前に、話を聞いた限りでは、対策が取れなかった。

空気と舌切り、どうやっても合わさらない。何をどうやって攻撃してくるのが全く分からなかった。まずはゼロの出方を見るしかない。

シアイ カイシ！

カーン



「……行くよ」

ガキン！

それは形のある上に、見る事のできる空気だった。まさか空気を物理的に防げるとは思わなかった。

空気を作っている形は逆三角形、それがただ一つ上から降ってきた。「やるね、でもこれだけな訳ないよ」

ガキン！

続いて、下から三角形が現れた。

三角形の色は白、これが空気の色なのか？ いや、これは空気であって思い形見だ。本物の空気の色ではない。空気から作っているのは確かだった。三角形が現れる直前にその場に空気が渦を巻いていた、だからそれだけは確実だ。

これが思い形見だとしたら、能力はいつたい……

「油断は禁物だよ」

その瞬間、

ゴウ！

三角形と逆三角形の間から、赤色の光線が飛び出した。ゼロの言葉のおかげで気づき、掠める程度で済んだ。

しかし、謎がさらに深まった。

三角形と逆三角形は攻撃の手段でありながら、あの光線を飛ばす土台の役目をも持つ。

光線は赤色。三角形は共に光線を放つと消えた。光線一発につき土台を二つ使用するらしい。

恐らく、同じ形ではなく、逆三角形と三角形のような二種類必要なんだな。

……うん。

ますます分からなくなつた。

## 第6話

私の名前……

ワタシの、ナマエハ……

……ふと、思い出してみる。

私が死んだ時の事を、

私は確か……び……で死……だ。それは分かる。

し……しそれ……前だ、

死……理……を、……んだ……由を……い出す……だ。

「まだまだ行くよ」

ゼロは再び空気を形作った。今度は四角だ。

ガキン！

受け止めてから観察する。正方形では無い、しかし長方形ではなく、台形と呼ぶにふさわしい四角形だ。それが下から、

ガキン！

続いて上から再び台形。

という事は……

来た。

ゴウ！

次は避けるだけではない、光線は一直線なので横に動くだけで避けられる。そして、攻勢に出た。鎖を伸ばし、ゼロへと向ける。

「そんなの利かないよ」

ゼロは横に鎖を避け、

ガキン！

鎖の上に四角を落とした。

引き戻そうとするが……全く動かない、あの形には重量があるのか。

「これで鎖は使えない」

ゼロが言うが、これがそうでもない。

鎖に重力をかけ、上に乗った四角に移す。

そこで方向を変えた、

ゴス！

ゼロのいる方向にだ。

油断したのか、ゼロは四角の直撃を受けた。

「やるね」

ゼロは四角の移動から抜け、新たな四角を生み出して光線を放った。

ゴウ！

四角が消滅する。

……そうか、分かったぞ。ゼロの能力が。

今までは近すぎた四角や三角形だが、ゼロのいる距離から放たれた光線と四角を見てそれが何を意味するか分かった。

まずは四角や三角形、あれは空気で作り返した……歯だ。

四角は前歯、三角形は犬歯だろう。

そして赤色の光線、あれも元は空気だが、アレこそがゼロの死因。舌切りの舌だ。

つまりゼロの能力とは、空気で作り出した歯の形を模したものから舌を模した光線を放つ、まるで歯で舌を切るように、歯から舌が飛び出しているのだ。

土台の条件はあるが、その分光線は威力が高そう。遠距離設置型高威力タイプ、かなりやりづりらい部類だ。

しかしそう考えれば容易い。相手を知る事は勝利への近道、誰かが言った言葉だ。何か隠している可能性も無い訳ではないが、今の所の対策は出来た。後は攻めるのみ。

私は鎖を左肩に巻いて前へと落ちた。

ゼロは私の近くではなく自らの近くに四角を呼び、上からも一つ呼び出す。その時既に私はゼロのかなり近くにいた。既に光線は放てる。向きもこちらを向いている。

そこで私は対策をうった。

急に重力を止め、その場で跳躍、

ゴウ！

数秒前いた場所を光線が通り抜けた。

そのまま浮き続け、ゼロの真後ろに着地する。

「甘いよ」

ゼロは半回転して正面に三角形を飛ばした。十字架を当てて左に落とすと、落ち続ける三角形にゼロは新たな三角形を当てて光線を放つ。

しかし私には当たらない、光線は明後日の方向へ飛んで行った。

よし、予想通りだ。私の十字架に触れれば、光線の向きを変えてゼロに当てる事が可能……

……な訳が無い。しかし、先ほどの歯の事もあり、ゼロはそう思って警戒していたのだろう。元より近距離では使い難い能力だから。

その点私は、十字架の間合いに入った。

私が有利で、今が勝機だ。

グラビティア・クロス

十字架でゼロを切りつけていく、

だがその時、

「負けない」

左右から三角形が迫り、光線が放たれた。距離が近すぎて避けられず、左腕に受ける。

大丈夫、一発受けたくらいでは倒れない、私は攻撃は続けた。

「負ける訳にはいかない」

ゼロが再び光線を放った。それを腹に受けながらも十字架を振り続ける。

「こ、こうなったら」

するとゼロは、私の後ろに歯を作りだした。狙いは見えないが、おそらく頭などの急所、一撃で決めるつもりだろう。

その前に、決めなくてはいけない。

私は十字架の一点に重力を集め、一気に振り下ろした。

ズブツ

ゴウ

十字架がゼロの胸に刺さる方が早かった。それで照準がずれたのか、光線は私の頬を掠めるだけに終わった。

「……………」

十字架を引き抜くと、ゼロはその場で倒れた。  
勝った……のか？

しかし、ゼロの能力が単体による発射で助かった。あれを二、三回  
時に放てていたら分からなかったな。

「……放てる……よ？」  
放てるのか……危なかったな。

シアイ シュウリョウ

ツギノ シアイマデ スコシキユウケイヲトリマス

ゼロもまた、私達と同じ自殺者であり、私達と同じように誰かに思  
われてここに存在していた。  
だから彼は決して、ゼロでは無かったのだ。

## 第67話

オマタセシマシタ　ダイサンカイセンヲ　ハジメマス  
ミナサン　クジヲヒイテクダサイ  
テルとキキは負けてしまったらしい。ちなみに相手はレインとマイだった。

しかしだ。今の私にはそれ以上に気になっている対戦カードがあった。

アロマ対ミカ

ちようど私の試合の前だったらしく、故に見ていない。  
だから私は2人を探した。どちらでもいいから会えれば、話を聞けるからと思つて。

探した結果、出会つたのはアロマだった

「アロマさ……」

聞く前に勝敗が分かつてしまった。彼女はとても落ち込んでいた。

それは香りのダメージからではない、シヨックからくるものだ

「……ツバサ」

アロマが私に気付いた。

「すみませんね、約束を果たせなくて」

申し訳なさそうに、しかし悲しみいっぱい表情で微笑んだ。

「……相手はミカだったんですね？」

アロマは頷いた。

「……話してもらえますか？　何があつたのかを」

つらい思い出だとは分かっている。けど、それを聞きたくて探していたんだ。

「……分かりました。お話しいたします」



また、駄目だった。  
私はただ、……………に。…れ…い……………なのに。  
あの時がチャンスだった、なのに……………  
のに……………

シアイ カイシ!

カーン

「行きますよ!」

私は……………ただ、

バチ

肩に何か当たった。

何だろう?

でもそんなのどうだっていい、

私はただ、……………に……………れた……………だ……………

バチ バチ バチ

肩に腕に頭に何か当たる……………何だろう?

でもそんなのどうだっていい、

私はただ……………

バチン!

見ていた右手を弾かれた。

……………何だろう?

今のはいつたい……………分からないや。

でも、ただ一つ分かる。

「トドメですー！」

あれは、

これから先に邪魔だって事だ。

ドスッ

「え……？」

ド  
ツ  
ヤ

「大振りな攻撃のせいで、心臓に砂の槍を受けました。あれが一撃必殺となつて……私は負けました」

「……」

「作戦にしては手が込んでいましたし……何か思い考えていたと思います」

「……ありがとうございます。思い出すのも辛い筈でしたでしょう」

「いえ、大丈夫ですよ。これが戦いの道ですからね」

「……」

「ツバサさん、頑張ってくださいね、あなたにはまだ約束をした友がいるのでしょうか？ 彼女の為にも、そこまでは絶対に負けてはいけませんよ？」

「……はい」

## 第68話

ダメだ……どうしても思い出せない。

私が死んだ理由、死ぬ前の記憶すら思い出せないのだから当たり前なの当たり前前

しかしそれではまるで、

死んだ直前しか生きていないみたい。

まるで生きた時間がとっても短いみたい。

とっても短い

生きた時間が

トテモ……ミジカイ……

イキタジカンガ……

「……………ミカ」

「ん？」

「……………私の名前は、ミカです」

トーナメントも三回戦、既に人数は8人。人数が少なくなった為か、対戦表が書かれていた。

3対7 2対5 1対6 4対8

番号は引いたくじの番号、やはりそこからランダムに数字が書かれている。

そこから皆に番号を聞いて回ったキキとテルが名前入りの完成番を作った。それがこれだ、

3 ミカ 対7 スノウ  
2 ミナト対5 マチ  
1 マイ 対6 モク  
4 ツバサ対8 レイン

次の相手は、レイン。

強敵に変わりはないが、無論容赦などはしない。

私にも負ける訳にはいかない理由というものがあるのだから。

試合はあの順番通りで、私達は四番目、最後だった。

それはつまり既に手前三組が終了しており、これが準決勝最後の参加者を決める戦いとなる。

ちなみに手前3人とは、ミカ・ミナト・モクだ。

私もそこに行かなくてはならない。

だからその為に、レインに……勝つ、

私たちはすでに向き合って準備も整っていた。

「負けないよ、レイン」

「俺もだよ、あの時とは全然違うからな」

シアイ　カイシ！

カーン！

「行くぜ！」

先手はレインだった。

レインは一番ハカセの元で修行していた、故に私たちよりも戦闘経験がある筈だ。

レインは複数の小石を一度に放った。

今までもそうだったが、その比ではない、更に複数。しかも方向が異なるのだ。

あるものは私に向かい直進、

あるものは左からカーブ、

またあるものは右から、

あるものは上から、

あるものは下から、

あるものはフェイントをかけて止まり、

あるものは素早く、

またあるものは鈍く、

車庫へ一斉に戻る列車のように全てが私に向かって飛んできた。

普通なら複数操るのさえ難しい筈だがそれを様々な方向から放つ、修行の賜物なんだろう。

しかし、いくら方向を変えようと狙いは全て私だ。様々な道を通って様々に寄り道はしても最後の終着駅は私なんだ。まずは鎖を螺旋状に伸ばす、

カツン！　カン！　カン！　カン！　カン！　カン！

速度の早かった小石がぶつかる音がする。

「それはもう利かないぜ」

レインは小石に指示をした。

「連結！ 十二両編成！」

すると飛んでいた小石が集まり、縦に繋がった。その数、計12。

それが連結できる限12の塊を作っていく、結果5つの塊が鎖へと迫り、

ガシン！ ガシン！ ガシン！ ガシン！ ガシン！

鎖の中心へとぶつかった。

螺旋状の鎖には真ん中に先端があり、そこが一番弱い。それを知っていて狙ったレインの放った小石の塊は螺旋状の鎖の先端をこちらに押してきた。

私は素早く鎖をほどき、右へ移動した。

ガッン！ ガッン！ ガッン！ ガッン！ ガッン！

先まで私がいた場所に小石の塊が落ちた。

鎖を戻しながら、私は思った。

やはり、レインは前の2人よりも強敵だ。

## 第69話

それから私ことミカは、ハカセの助手になりながら参加者と戦い続けました。

ハカセは様々な事を教えて下さり、私の事についても親身になって考えてくれた。

面白い観察対象を見つけたよ。というのを聞いた気がしますが、気のせいですよね？ ……ね？

「ふむ……死ぬ前の事全てと、死ぬ理由を忘れたと」

「はいです……」

「死んだ時の事柄がの戦う道具になるはず。それを使えているから指して問題は無い筈だけどね……、少し調べさせてくれないか？」

「どうやってですか？」

「もちろん、体中を懐中電灯で照らして、あんな物やそんな物で調べ……」

「本気ですか!？」

「まさか、ここにはあんな物もそんな物も……まず懐中電灯から無いからね」

……もしあったなら、ハカセなら本気でやっていた筈です……。

「ふむ、そういえば関係があるか分からないが、ミカそっくりな参加者がいるのだよ」

「私そっくりの?」

「うむ、ミカが行ってから暫くして現れたんだがな、背格好、身長、見た目、声までそっくりだったよ」

「はあ……」

「もしかして、双子?」

「違いますです。私には姉も妹もない筈です」

「前の記憶が無いのにその言い切りはないんじゃないかな?」

「あ……」



「ふむ、一度会って見たらどうだい？」

「会う……ですか？」

「どうせ戦う必要があるんだから探してみたらいいよ。名前は……」

ハカセとの修行は端的に言えば組み手だが、本当の理由は別にある。新しい攻撃方法を得る事だ。

ハカセの思い形見は本にペンで書いた事を実現することで、まず最初に思いあたる攻撃方法を防ぐという事を書く。これで準備完了だ。後は今までの攻撃方法では一切傷つかないハカセに何かしら新しい方法、本に書かれていない方法で攻撃を当てるといふもの。時間がないから力をつけるよりも技を多く持つておく方が効率が良いとハカセの助言だった。

ちなみにレインは分単位で約90分間は修行していた。

私は70分ぐらいから皆と共に参加して修行をしたが、それだけでも攻撃方法を4つ程思い付いた。

その内の1つを今、使ってみることにしよう。

私は鎖を伸ばした。先のように螺旋状だが、言うなればドリルだ。円錐形を型どった鎖をレインに向けて放った。

レインは小石を放つ、先と同じように鎖の中心に、しかしこれは先とは違うのだ。

中心に当たる寸前で、小石は明後日の方へと飛んでいった。

これは竜巻だ。故に中心からでしか入れないそれだが、これはその中心に向こう向きに重力をかけている為に中心には入れず、回りの鎖には様々な方向へとかけた重力により飛び道具類は明後日の方へと飛んでいく。

縦に長くでリーチが伸び、横に広くで防御率が上がる。使い勝手の良い盾だ。

しかしこれは攻撃ではない、それに使い続けるとレインに対処法を  
思いつかれてしまうだろう。  
なので、次の手段をとる事にした。

## 第70話

扉を抜けて、

空間を歩いて、

また扉を抜ける。

再び空間を歩いて、

見つけた扉を抜ける。

その先の空間を歩いて、

見つからないので扉を……

……それが何回続いたか、途中参加者に何人会ったか、

そんな動き回る探し物をしていた私は一度八カセの所へ帰ってきま  
した。

「お帰り、見つかった?」

「いえ、色々歩き回りましたが見つからずじまいです……」

「ふむ、タイミングが悪いね、実はさっき来てたんだよ。ついさっ  
きね」

「ええ!? なんで止めてくれないんですか!？」

「ちよつとキツク言っつてね、呼び止められる雰囲気じゃ無かったね」

「そ、それで……その人はどちらに向かいます……」

「分からないよ、私はこの空間から出れないからね」

「あう、そうでしたです」

「無理はしちやいけないよ。落ち着いていれば全員には会えるのは  
決まっている事だからね、大丈夫さ」

「…も、もう一回行って来ますです!」

私は扉を抜けた。

上手くいけばいいのだが……

私は鎖を伸ばして十字架に巻き付けた。

これで何が出来るのか、直ぐに分かる。

十字架の四辺、その左右に鎖を巻き付けて持ち手の部分から手を離れた。勿論十字架はそのまま重力に従いカランと音を立てて落ちる。十字架の四辺に巻き付けた鎖だけが私と十字架を繋いでいる。私は十字架の普段の持ち手ではなくその逆を持って持ち上げた。

そしてそのまま、

ブオン

投げつけた。

十字架は持ち手をレインに向けて飛んでいく。

これはいわば鎖鎌。鎖に繋がれた十字架を投げ鎖から重力を流して十字架の方向を変えて操作する技。今までの近距離高威力タイプから、遠距離操作高威力タイプへ攻撃方法を変える技だ。

しかしこれには欠点がある。

第一に防御が疎かになる事、十字架が手元に無い以上左腕の鎖か避けるしか自らを守る術が無い。

第二に避けられやすい事、鎖を伸ばせば伸ばす程に鎖から流した重力が十字架へと到達するのが遅くなる。今の長さだと約10秒かかるけれど対策はある。

攻撃の手を止めないだけだ、防御がおろそかになると伝わり難くなるうと攻撃の手を止めていけない。相手の視線を十字架から離さなければいいんだ。

その間に間合いを詰め、それにより重力が伝わる時間は短くする事も出来る。

そして、この技の本当の意味は、

「これで決める！」

「なっ……！」

相手の回りに鎖を張り巡らす事だ。

後は鎖に重力を流す事を、鎖を動かす事に切り替えるだけ。  
伸ばした鎖をレインを巻き付け、かなり長い量の鎖がレインに巻き  
付いた。手を封じて攻撃出来ないようにした後、最後に先端部に巻  
かれた十字架が

ドスッ

レインを突き刺した。

## 第71話

扉を見つけたら入る。

押して入ると引いて入るでは場所が違う事を知ってからは前の倍の場所を探す……けど見つからない。

仕方ないので、一度戻る事にしました。

「はぁ……探してもない人は見つかるのに、何故探している人は見つからないですか……」

行く先々で参加者に出会っては戦いを申し込まれました、なんとか全部に勝利していますが。

そう思いつつ、とりあえずは探す事を一時的に止めてハカセの扉へ向かっていた。

その時でした。

「あれ？ ハカセの扉から誰か出てきましたね？」

扉が見える所まで来ていた私は、扉から誰かが出てくるのを見つけました。

「あ！ あの人は！」

そしてその人こそ、まさに探し求めていた私そっくりな参加者、その人でした。

確かに見た目がそっくりで、一瞬鏡を見ているのかと思いましたがあの人はこちらに背を向けて歩き初めたので鏡ではないなと思いがら……

「はっ！ い、行ってしまえます！ 早く追いかけないと！」  
私は後を追いました。

シアイシュウリョウ

ツギノシアイマデ

スコシキユウケイヲトリマス

「いや、負けたよ、やっぱツバサは強いな」

「いいや、そつちも強かったよ」

「でも負けたのは俺だからな、ここまできたら優勝してくれよ？」

「うん、頑張るよ」

そう。何にせよ私は決勝戦に行かなくてはならなかったんだ。

何故ならば、次の相手、準決勝の相手はモク。ミカと戦うには決勝へ行かなくてはならないから。

あれからミカとも会ってない、何処かには居るのだろうが決勝で必ず会えるだろう。

それを信じて私は、決勝に進むだけだ。

オマタセシマシタ

タダイマヨリ ジュンケツシヨウヲ

ハジメマス

最初は私の番だった。

舞台上上がると、相手は既に目の前にいた。

「また、戦う事になるとはな」

「あの時とは違いますよ、私は負けません」

「ああそうだろう……だが、それは俺も同じだ。俺も負ける訳には  
いかないんでね、全力を出させてもらうよ」

「……勿論です」

私はミカと戦うことが目的になってしまっているが、本来の目的は優勝して生き返ること、モクにも負けられない理由があるんだ。

シアイ カイシ

カーン！！

先手は私が取った。

鎖をモクへと伸ばす。モクもまたロープを伸ばして鎖にぶつけた。

そこで私はロープに重力を移して下へと落とした。

恐らくこれをモクは予想済だろう、あちらの本当の武器は

来た

ドスン！

木の根が下から現れた。

その寸前に重力を体にかけて右へと落ちながら避ける。

やはりロープよりも木の根が厄介だ。

一撃がかなりのダメージになりうる、当たりどころが悪ければ一撃必殺になってしまう。単体でしか出せないのが唯一の救いだ。アレを除いて。

しかしアレには時間がかかる。故にこちらが攻撃を続けその暇を与えなければ、勝機はこちらにある。

悩まず攻撃あるのみだ。



## 第72話

後を追っている時、彼女は幾人もの参加者と戦っていました。そして、とても強かった。

私が苦戦した相手に簡単に勝ってしまった。

そしてふと、私は思った。

彼女が武器として使っているあの十字架、何処かで見た覚えが…

…しかし、あの人はいったい何処まで行くのでしょうか？

何処か目的地があるのですかね？

やはり声をかけるべきですね。

何となくかけづらかったのですが、でも話はしたいのです。

うん。そうですね、声をかけますです。

というわけで私が彼女に声をかけようとしたら、扉の中に入って行ってしまいました。

確かあの扉は引いて入ると…えっと、

……闘技場？

鎖を肩に巻いて素早くモクに近づいた。

その間合いで十字架を振る。モクはそれを避けて間合いを開けようとするが、そうはさせない。

モクが下がった分私は前に落ちた。やはりモクの木の根は近距離では打てないのだ。

自らも危ないからだろう、先程からモクは避ける事しかしていない。何度目かの攻撃の結果、

チッ

初めて十字架がかすった。

「くっ、だったら」

モクは何度目かの下がり、私が何度目かの前にでようとしたその時、ロープを飛ばしてきた。

十字架でそれを払う。しかしモクにはそれだけで十分な時間がとれた。

ドスン！

私とモクの間にも木の根が現れた。

ぶつかる前に素早く移動を止めて、足を地面に付いた。

モクは再び木の根を打ち出す、私は後退して避けると、再び木の根、後退でちょうど避けられる位置にモクは配置している。

それは、十分な距離をとるためだった。

「これはどうする事もできないだろう！」

ドン！

モクが両手を地面に付けた。

しまった、アレが来る。

対策は無い訳ではない、しかし……失敗は許されない。  
失敗はつまり、敗北だ。

だが方法はこれだけだ。やるしかない。負ける訳にはいかないんだ。左肩に巻いた鎖をほどき、地面に足をつける。そして鎖を十字架ごと右手に何重にも巻き付けた。持ち手の部分が見えなくなる程に巻き付けた鎖により、右手は十字架を離せなくなる。その時、

ドスンッ！ ドスンッ！ ドスンッ！ ドスンッ！

木の幹が四方に現れた。

しかし怯まない、一度は見た技だ。アレには発動前にまだ少し時間がかかる。

その間にこちらの準備を済ませなければ。

私は鎖の巻かれた右手を前に出し、重力をかけた。

まずは鎖に下向きの重力を、続いて十字架に右向きの重力をかける。

そして最後に……

瞬間、幹からロープが伸びた。

## 第73話

私を捕まえる為にこちらへと伸びてくる。

しかし、そのロープ達は、

私に当たらなかつた。

到着する前にロープは、

切り刻まれたのだった。

私が何をしたのか。

簡単にいえば、私自らを刃にしたのだ。

扉を抜けたら、そこはやはり闘技場でした。

中に入った彼女を追っていると、3人の参加者と話を始めました。

内容はここからでも聞こえ、何でも今からここで大会が始まるのだ

とか。しかも優勝賞品は、二回戦の突破だそうです。

それにしても……

あの4人、とても仲が良さそうです。

……私にも

あんな友達

居たのでしょうかね……

私は自らを刃にした。

方法は簡単。まず下向きの重力を私の体に移す。重力に従い私は下

へと落ちる。次に右向きの重力を十字架にかける。すると十字架は右へと落ちていくが、鎖により私と繋がれているとなると私と共に十字架は右へと落ちようとするが、私自身の下向きの重力が勝るように加減するするとどうなるか、足は動くので、十字架は右へと落ちようとして私を軸に回転を始める。それに腕の力を合わせてさらに回転する。

十字架は鋭利なので、動いていれば切れ味を生む回転の刃。いや、回転十字架だ。

何とか成功だな、あの時ハカセから、『私達に痛みが無いのは、俗に痛覚と呼ぶものが存在しないからだね、そのついでかは分からないが、三半規管も無くなっているんだ。この椅子に座って、いくらグルグル回っていても目が回らないんだよ』  
最初は何でそんな事してるのか分からなかったが、まさかそれが新たな技を生むとは思わなかった。

現に今、ロープは私に届いていないし、目も回っていない。  
その時だった。

木の幹からのロープが途切れた。しかしこうなったら、次に来るのは……  
来た。

四方の木の幹の内、1つは木の根なんだ。伸ばされたロープに動きを封じられ、木の根に刺される。それがモクのこの技だ。

それがこちらに迫る。今のままでは避けられない、かと言ってこの回転であの木の根に対抗は出来ない。

上手くいったとして、十字架が木の根に刺さり動きを止められるだろう。

右手は鎖で十字架と繋いでいるから離れられない……ん？

……そうか、これはいいだろう。  
試すなら今。

成功は勝利

失敗は敗北

チャンスは今だけ、ならば私はやるだけだ。

十字架の重力を無くした。しかし回転力は落ちない。右手の鎖を腕から外し、十字架にだけ結びつけた。

そして木の根目掛けて、

ブオン！

十字架を投げつけた。

回転の力を得た十字架は、

ズバンツ！

今までよりも大きい音をたて、迫る木の根を断った。

しかし、それだけでは十字架の力は変わらず。

「なっ!?!」

ズバンツ！

再びの大きな音をたて、木の根の後ろにいたモクを断った。

## 第74話

大会に出る事にしました。

もしかしたら、彼女と戦えるかもしれませんですからね。

くじを引くと六番と書かれていました。同じ数字の方と組むそうですが、何か違和感があるのです。

……まあいいです。今は相方を探しましょう、

……見つかりません、いったい何処にいるですか。

六番の人を探していたら、あの人を見つけました。

1人で歩いていますが……もしかして。

「……」

声をかけるチャンスですね。

私は彼女の後ろに回り、声をかけました。

「あの……」

回転力を得た十字架は、今までよりも威力が高かった。

それは、真つ二つになってしまったモクをみたら明らかだった。

ガスンッ

十字架が地面に刺さった。鎖を巻いていたのでそれを引っ張り、十字架を回収する。

シアイ シュウリョウ

ツツケテ ダイニシアイヲハジメマス

私はモクの回復を待っていた。

真つ二つにしてしまった結果、まず繋がるのに時間がかかり、そこから回復が始まって、目覚めるまでに20分もかかった。

「……俺は、負けたんだな」

起き上がって私を見たモクの第一声だ。

「はい、私の勝ちです」

「凄いな、あんな技何処で覚えたんだ？」

「私は元より、全体に対する攻撃や広範囲の攻撃って無かったんですよ、だから考えたんです。全方向対策、あなたのあの技への対策を」

「そうか、やはり凄いや。俺はバカの一つ覚えでな、アレしか使えない。やはり努力家は強いな」

「ありがとうございます」

「ところで、俺にかまっついていいのか？ 決勝の相手が決まる戦いを今してるんだろう？」

「……いえ、実は……」

……そう、実は既に準決勝は終了した。

勝ち残ったのは、ミカだ。

それで、今は休憩中である。

「そうか、あの子が勝ち残ったのか」

「はい、ですがこれで、約束が果たせます」

「約束？ ああ、そういえば言っていたな」

「知っているのですか？」

「ああ、ツバサの関係者かどうか聞いた時にな」



「……双子じゃないですよ」

「それも聞いた。しかし似すぎじゃないか？」

「そう、なんですよね……」

「実は双子なんじゃないか？　生き別れたとかそんな感じのはあり得るだろ？」

「……違うと思いますけど」

そう言われては違うとも言い切れない。

だがそうだとして、あそこまでそっくりになるものだろうか？

例え離れて暮らし、互いに互いを知らなくても、ここまで同じようにはならないと思うのだが。

「これは八カセが喜びそうな謎だよな」

え？

「モクさん、八カセをご存知なんですか？」

「ああ、まあな」

モクが八カセに出会ったのは、ちょうどあの時、私が雪国でモクに会った後、黒い扉を見つけたらしい。

今その話を、私達は集まって話していた。

人数は全9人、

レイン、ミナト、マイ、スノウ、マチ、キキ、テル、そしてモクと私だ。

## 第75話

まさかとは思いましたが、そのまさかでした。  
ツバサさん…… 本当にそっくりです。

背格好、身長、服装まで。唯一髪の色が違うくらい、後はそっくり  
です。

彼女はいつたい、何者なんでしょうか……

話題はミカと私について、

「やっぱり双子じゃね？」

「だって似すぎでしょ？」

「……そっくり」

「生き別れた、とかなら可能性があるんだろ？」

「だったら、その可能性は高いわよね」

「世の中、何が起こるか分からないからね」

「やっぱりそうなんじゃないの？」

「……では、改めて聞くが」

8人が私の方を向いて、

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……違いますよ」

まさか8人同時に言われるとは。

しかし、本当に違うとも言えなくなった。

モクが持ち出した、生き別れた双子説。その可能性が否定できない、  
生き別れなら互いに知らなくて当然。知らぬままなら、会ったところ  
でそっくりな人が居るなぐらいの感覚だ。

もしかして本当に……か？

だとしたら、初めて会うのがまさか互いに自殺者とはね……

……あまり考えたくないな。  
話を変えよう。

「そういえば、モクさんもハカセに会った事があるんですよね？」

「ああ、確か過去の参加者だったんだろ？」

「そういや、そんな事言ってたな」

「あの人も何者だろうな」

「過去の参加者でしょ？」

「……じゃあ、自殺したって事？」

「うん、確か過労死だと言っていたよ」

「確か、決勝まで行ったんだよね」

「うん、そう言ってた」

「……それって、いつの話なの？」

マイがぼそりと呟いた。

「うーん、前회가いつかって事だよね？」

「流石にそれは聞いてないな」

「……それともう一つ」

「何？」

「……優勝出来なかった、参加者ってどうなるの？」

マイの言葉に、私を除く七人が目を丸くした。

「確かにな……」

「ハカセのような例外ではない者はいったいどうなったんだ……」

「ハカセが出ていた大会の事を考えると、少なからずいたのは確かだよな」

優勝した者は生き返る。

なら優勝しなかった者は、負けてしまった者達はどうなるのか……

……つまりそれは、

「つまり、トーナメントで負けてしまった俺達はどうなるのか、って事だろ？」

モクの言うとおりだ。

レインやミナト達は、どうなってしまうんだろうか……

「あゝ、これこそハカセに聞いておけば良かったな」

「そうだね」

「でもさ、聞かなくて良かったのかもよ？」

「ん？ それはどういう事、テルちゃん」

「知ったら知ったで、例えば消えてしまふとかなら、知らなかった方が良かったかと思うじゃない？ どうしたって最後は1人だから、知らずにどうにかなってしまう方がワタシはいいと思う」

「確かに、一理あるな」

「今になって謎が増えたな、これならハカセが喜びそうだが」

「……でも、一つだけ分かる事がある」

「奇遇だな、俺もだ」

「分かる事って？」

「双子の話も、俺達のこれからも、全ては決勝戦が終われば分かって事だ」

「……そういう事」

その時だった。

オマタセシマシタ

タダイマヨリ ケツショウセンヲ ハジメマス

シュツジョウシャハ オアツマリクダサイ

こうして、

ミカと、皆のその後、

2つの大きな謎を残して、

決勝戦は始まる。

「……………」

大会に勝ってしまった私は、三回戦が始まるまでの間ツバサの事を考えていた。

もし彼女が顔に火を浴びて倒れなければ、今頃私はここにいなかった。

きっとツバサが勝っていました。

だって、ツバサは強いですから。

……結局何者だったのか分からずじまいですけど……

……しかし、ここはとても暇です。

他の3人、

1人は元気過ぎて、1人は暗過ぎて、話かけられませんでした。

モクさんが唯一の話相手でした。なんとあのツバサに勝った人と聞いた時はびっくりしました。

それでもいつまでも話してられるわけではなく、暇にはなりませんです。

そんな時、あの人に会いました。

久々の会話の後、あの人は教えてくれました。

ツバサに触れてみたらいいかも、と。

そして、時は来ました。

フレイさんが降りていってから暫くして、私達が降りました。

そこで見たのが、倒れているフレイさんと、ツバサでした。

まずは、会えて嬉しかった。そしてあの言葉を思い出し……思い出しはしたのですが、

なんでしょうが、何だかいけない気が、まるで誰かに止められているような、そんな感覚に……

……そんなこんなで、今に至りましたです。

決勝の相手はツバサ。チャンスはこれが最後。

もはや後戻りは出来ない、故にしない。  
だから私は戦うだけです  
……ツバサが何者なのか。

……ミカは何者なのか。  
本当に双子かもしれない。

それと、皆はどうなるんだろう……

レイン、ミナト、マイ、スノウ、マチ、キキ、テル、モク、アロマ  
……他にも沢山。

皆はどうなるんだろうか。

ふと、ハカセの言葉を思い出す。

ゴールに出れる道はたった一つしかない迷路だ、だが出口は決して一つではない。出口へ進めるのは、決して1人だけではない。  
あの時は分からないと言ったが、何となく、分かる気がする。

でも今は、

考えるのをやめます、

何故なら今は、

ただ戦う事だけを考えて、

ミカと、

ツバサと、

戦うだけだ。

そして恐らく、

この謎も、

この謎達も、

ツバサと、

ミカと、

戦えば分かる事だから。

私はミカを前に見た、

私はツバサを前に見た、

「約束を果たしに来たよ、ミカ」

「ありがとうございますです。ツバサ」

「……これで、終わるんだね」

皆がどうなるか、

「はい……決勝戦ですから」

私が何者なのか、

「負けないよ」

ミカが何者なのか、

「こちらですよ」

ツバサとの関係が、

分かる時が来たのだ。



## 第76話

デハ ケツシヨウセンヲハジメマス

「……………」

これがあの時の私達の、

「……………」

本当に本当の、決勝戦です。

シアイ カイシ

カーン！

私が先手をとった。十字架を振り上げて、ミカに切りかかる。

ガキン！

それをミカが空間に閉じ込めた砂の剣で防ぐ。

ミカ的能力はいわば、ガラスに砂を詰めた物と呼べるだろう。詰める物、中に閉じ込める物が無いと発動は出来ないのだろうが、ミカは同時に砂を無条件で呼び出す能力を持つので使えなくなる事は無い。これがミカに対してある情報だ。

あまりにも少ないが。とにかく、油断はしない。それだけだ。

その時だった。

トクンッ

……？

何だ？

今、何か懐かしい何かが

こんな風に 誰かと話した事があるのか

誰かの声が聞こえた。

あの声ではない、何か聞き覚えがある声だ。  
いつだったか。

つい最近のような、

とても……昔のような……

再び十字架を切りつける。

ミカは砂の剣で防いだ。

ガキン！

すると、

トクンッ

まただ

そもそも私は何者なのか

この声は……ミカ？

ミカの記憶が、聞こえている？

どうやら十字架と砂の剣が触れる度、ミカの記憶を私が聞いている  
ようだ。

なぜ、そんなことが起きているのか……まさか……

私は間合いをとり、鎖を放った。

対してミカは砂の槍を作り、鎖に当てる

ガキン！

クンッ

ト

私が唯一見た事のある景色

唯一見た、景色？

私は重力を前に向け、十字架を前において突進する。  
ミカに砂の剣で防がれた

ガキン！

トクンッ

飛び降りた時の景色

確かミカは飛び降りて死んだ筈。自分で言っていたから確かな事だ。  
十字架を振るう。  
砂の剣で防がれる

ガキン！

トクンッ

生きていたにしては記憶が無とすげえる

……今、何て？

記憶が無さすぎる？

どういう事だ？

……もしかして、それがミカが何者かを示す何かかなのかもしれない。

このまま戦っていれば、分かってくるかもしれない。  
ミカが何者なのか。

ガキン！

ンッ

トク

とても短い生きた時間

ガキン！

トクンッ

ツバサに触れたいだけ

ガキン！

トクンッ

死んだ理由を思い出すのだ

ガキン！

トクンッ

飛び降りた直前の記憶が

ガキン！

トクンッ

一切、思い出せないのだから

記憶が一切思い出せない？

……改めて思う。ミカは何者だ？

見た目が似ている。死因も、声も聞き覚えがあつて……

……いや、もはやこれ以上は考えない。何かがあれば、ミカも思い出すだろう。

今は、ただ戦うだけだ。

……何故でしょうか。

ツバサの攻撃を防ぐ度に、ここでの記憶がツバサに流れているような、そんな感覚になります。

これはつまり、何かを思い出す前触れかと、

間接的にツバサと繋がっているのかと、そう思ってきたました。だつたら、今で良かった。

あの時に触れないで、今まで触れないで本当に、今のこの時まで、我慢していて良かったです。

だから今はただ、戦うだけです。

全ての謎は、この戦いが終わる時に



## 第77話

ミカは砂の槍を六本飛ばしてきた。

内二本を避け、三本を十字架で払う、最後の一本を飛び越えてミカに近づいた。

すると、これまでの攻撃ではダメだと気付いたのか、ミカが動いた。

「これが、私の新たな力です！」

ミカの周囲に、砂の刃が現れた。

あれは恐らく空間を薄く止め、砂を詰めた物だ。

まるで紙のように薄く、まるで砂の粒のような刃、それがミカの周囲を囲ったことにより、触れただけで切り刻まれてしまうだろう。

しかしこの突進は止めない、これで決めるのだ。

グラビティア・クロス。これは一方向に対しての強力な攻撃だが、全方向や広範囲には攻撃が当たらないという欠点があった。

その為に考えたのがあの回転十字架だが、あれは時間がかかり、しかも操れない。

そこで、その二つを混ぜたような、あるいはその欠点を補うために考えた技が一つある。

私は実行に移すことにした。

意識を集中し……十字架を握る手に力を込める。  
そして、

スパッ

音が聞こえた時、私はミカの後ろにいた。

そして振り返り、

スパッ

今度は右側にいた。  
再び振り返って、

スパッ

左側にたどり着いた。

この技、名付けるならば、高速十字斬。  
重力による移動と、十字架による斬り技を合わせたものだ。  
グラビティア・クロスとの違いは速さと範囲、回転十字架との違いは起動の速さと操作性だ。

左肩にまいた鎖と十字架そのものから重力を最大量体に移す。  
鎖と十字架により、二倍、普通ではかからない重力に従い私はその方向へと落ちる。

その速さは今までよりも何倍も速く。そこから繰り出される十字架による一瞬の斬り技。

速さと私の腕前のせいで一移動で一攻撃だが、重力の方向を変えれば再びの高速斬りが可能だ。

しかし、欠点が一つ。回数が限られている事だ。

それは体が重力の変化に耐えられるまでで、その為に意識を集中する。今の私では、七回が限界だ。  
既に三回を放ち、ミカの周囲を囲う砂の刃を約半分蹴散らした。  
後四回で砂の刃を全て消しつつ、ミカに一撃を与える必要がある。  
もしも砂の刃が残っていたら、ミカに触れた瞬間刃は私へと迫り、私を切り裂くだろう。  
これが決着の一手となる。  
ミカの新たな力が、  
私の新たな技、  
どちらかが、勝ちを掴むだけだ。

スパッ

四発目を放ち、砂の刃を削る。

スパッ

続けて五発目、ミカは私の速さについて来れていない。

スパッ

六発目を放った時、砂の刃は全て蹴散らした。  
後はミカに当てるだけだ。  
意識を集中し、ミカ目掛けて、落ちた。

ガキイイーン！

ミカが防いだ。

私の突撃に合わせて砂の剣を作り、十字架を防いだのだ。

「危なかった、です……」

まさか守られるとは……

高速十字斬の後は体が少し動きづらくなる。

三半規管は無い筈だが、体に負荷を掛けすぎたから当然か。

今攻撃されたら対処が出来ない、再び砂の刃を出されたら終わり。

つまりは、負けだ。

その時だった。

トクンッ

まただ、触れたことにより、ミカの記憶が

トクンッ…

トクンッ…

ト

クンッ…

トクンッ…

……いや、何かがおかしい。  
これは

私の記憶だ。

## 第78話

Hotel Aile

そんな名前の建物の階段を、ただ上へと登っていた。  
扉を開けて、屋上へと出た。

風が強い、この辺りで一番高い建物、その屋上に私は居た。

理由は、飛び降りる為だ。

白い柵を乗り越え。下を見た。

下はコンクリートではなく、砂が拡がっている。

普通なら怯える筈だが、私は気にしない。

そして気にならない。

どうせ直ぐにいくから。

どうせ……直ぐに下へ行くから……

直ぐに……

逝くから……

靴を脱いだ。

ふとポケットに手を入れ、中にある物を取り出した。

十字架のネックレス。あの人からの贈り物。

とても大事な物……

……せつかくだから、持って降りようかな。

そうしたらあの人に、憑けるかもしれない。

… 例え死んでも、あの人と一緒に居られたら嬉しい筈だから。

よし、飛び降りよう。

でも少し怖いから、後ろ向きに降りようと思う。その方が怖いかも  
だけど。

気にはしない、

気にはならない、

気にはしてはいけないのだ。

もう死ぬのだから、

気にするだけムダだ。

じゃあ…

… さよなら

バツ

後ろ向きに、私は落ちた。

重力に従い下へと落ちる。

手に十字架を持ったまま、私は下へと落ちていき…

… そのまま…

その後、  
地面に着く前に、私はショックにより空中で死んだ。

そう……  
これには、まだ続きがあった。  
私が空中で死んでから、私が地面に落ちるまでが、そこにはあった。

……あれ？  
私は、いったい何を？  
ここは……何？  
私は……確か……



そうだ。

私はこの体に入った、もう一つの間覚。

この体において、彼女と同じ体を供給する。二重人格の片割れ。それが、私。

普通なら彼女に何かしら異変が起こった時。私は飛び出してくる。代わりに彼女を動かす筈だ。

筈：

…だった

しかし、彼女は変わっていた。

私が出る幕は全くなかった。

常に誰かに思われ、

常に誰かを思い、

共に楽しみ、

共に泣いて、

そして共に……

笑った。

そんな彼女に、私が出る幕など無いと思っていた。

しかし、その時が来た。

それがまさか……彼女が自殺した時とは、思いもしませんでしたです。

チャラッ

手から十字架が離れた。

人の体の方が重い分、十字架は私から離れていった。

そして、

トシヤ

私は地面に叩きつけられた。

そして、私は彼女になったのです。

## 第79話

「……………」

「そうか、知らなかったな……」

私の中に、もう一つ人格があったとは。出てこれなかったのだから知らないのは当たり前だが。

「…………ツバサ」

「ミカも思い出したらしい。」

「ミカは砂の剣を消した。」

「私も十字架を下げると、」

「ミカは私に抱きついてきた。」

「私は……………あなたの中にいたもう一つの人格。あなたがいたから……………私は、ここにこうして存在してられる。あなたは私……………そして、私はあなたです」

「……………うん……………私はあなた……………あなたは私……………」

「……………体があるって、いいですね。色んな物を見て、色んな人と話ができる」

「……………そして誰かを思い……………誰かに思われる」

「……………はい。そうと分かった以上、私は降参しますです。どちらが勝つても、生き返るのは私ですから」

「……………そうだね……………どちらが勝つても、生き返るのは私」

「……………ミカも私も、どちらも私なのだから。」

「……………普通ならこんな会い方は出来ない私達……………こうして出会えて、とても嬉しかったです。少しだけでも、こうして会えた事が」

「……………私もだよ。近くに居るのに普通は会えない、そんな私達が、今こうして会っている」

「……………一つの体を共有するゆえに、鏡を見ても会えない私達が、こうして」

出会えた。鏡など使わずに。

「……では、名残惜しいですが。私は……もう……」  
ミカが離れた。

「こうして触れたことにより、私が何者か完全に分かりました。だから、私は私の中に戻ります。」

「……そうなんだ」

「はい……では……サヨナラ。もう一人の、ワタシ……」

そう言い残して、ミカは消えてしまった。

まるで風に舞う砂のように……

「……ミカ」

涙は出ない。ミカも泣いていなかった。

泣けないのもあるが、私は絶対に泣かない。

何故なら……サヨナラではないから。

ミカはただ。私に帰っただけだから。

ミカが消えた事、

それは、今までの戦いの終わり。

そして、

新たな戦いの始まりだった。

## 第80話

シアイ シュウリヨウ

コンカイノウウシヨウシャハ アナタデス

私が優勝した。

それはつまり、私は生き返るという事。

でも、それ以前に知りたいことがあった。

「あの、聞こえていたら答えてください。私以外の皆はどうなるんですか？」

……

声は答えない、まだ残っている謎のひとつなのに、本当にどうなるんだ。

ミナサンハ

コノクウカンノ ジュウミンニナリマス

と思っていたら、声が答えた。

この空間の住民？

それってどういう意味だ？

その時だった。

ガシャーン！

「！！！」

何か壊れるような音が響いた。

辺りを見回すが、特に何が壊れたような雰囲気は無い。

何か変わったところを探していると、見つけた。

消えていた扉が現れていたのだ。

……トビラガ

声が聞こえた。

扉が？ あれは自分でした事ではないのか？

考えていると、一筋の光が現れた。ミカやモク達が現れたものと同じだ。

そこから現れたのは、まるで光のような少年だ。

全体が白く、肌までも白い。そんな少年が目の前に現れた。

「君は、誰？」

参加者にこんな少年は居なかった。けどここに居るということは関係があるはずだ。

「……」

少年は答えず、顔をうつむけた。

誰だか分からない、けど、少しだけ、予想がついた。

「もしかして、君は……」

その時だった。

イレギュラーハッセイ イレギュラーハッセイ

サンカシャノカズガ ゲンシヨウシマシタ

ナノデ タダイマヨリ ハイシャフツカツセンヲ オコナイマス

あの声のようで、あの声ではない声が聞こえてきた。  
敗者復活戦？

優勝者は決まったのに、何故今になって？  
しかし今はこの目の前にいる少年だ。

「……………ゴメン ナサイ」  
少年が喋った。

その声は、あの声のものだった。

「君は……………誰？」  
再度訪ねる。

「ボクハ イママデシカイヲ シテイタモノ」  
すると少年は答えた。やはりあの声の主だった。  
聞き取り難さは変わってないな。

「じゃあ、あの声は？」  
「……………アレハ ボクデアリ ソシテ ボクデハナイ」  
僕であり、そして僕ではない。どういう意味だ？

「何がどうなっているの？ あの声は、何故今さらになって敗者復活戦を行おうとしているの？」

「ソレハ……………」

「そこからは私が答えようじゃないか」  
新たな声が聞こえた。



11の扉は……

## 第81話

瞬間、闇の塊が現れ、中から一人の人が現れた。

「久しぶりだねツバサ、まずは優勝おめでとう」

「ハカセ……何故ここに？」

「私を誰だと思っっているのかな？」

そうか、ハカセは書けば実現するペンと本を持っているんだ。ならここに来てもおかしくはない。

「まずは話をしよう。ここはまだ、安全だろうからね」

闘技場の真ん中に、私とハカセと少年。

そしてレイン達8人が集まっていた。

アロマを含めた他の参加者達は、扉が現れた時に皆出ていってしまった。

ハカセが語りだす。

「さて、まずは何から話すべきかね」

「まずはその少年について教えてください」

モクがハカセに言った。

「うむ、そう言うならばまずはこの少年についてを語ろう」

ハカセは隣にいる少年の肩を叩きながら説明した。

「この少年は、あの声の主。過去の自殺者だ」

過去の自殺者？ それはハカセと同じ？

「それで、この大会を開いた張本人だ」

「……」

大会を開いた……張本人……

「そして、今さっき皆が聞いたあの声は、もう1人の少年だ」

少年の肩を叩きながらハカセはいつもの調子で話し続ける。

「言ってしまうえば、ツバサとミカみたいなものだ」

「……私と、ミカの方？」

「その通り、彼もまた二重人格の片割れだね。彼に何かあった時に現れて、体を代わりに操る存在だ」

「……」

「そして今についてだが、敗者復活戦が始まった」

先ほど声が出ていた言葉だ。

「それは、いつたい……」

「うむ、前にもあったのだがね。今までの……全ての参加者が互いに戦う。いわばバトルロイヤルが始まったのだよ」

バトルロイヤル。

それは複数人が一斉に戦い、残った者が勝者となるルール。

そんな無差別の戦い、それが何故今始まったのか。

「参加者が減少したからだよ」

「参加者の減少……」

ミカが消えたから、私の中に帰ったから敗者復活戦は始まった。

……だとしてもだ。

「私が優勝して、既に大会は終わったのではないのですか？」

「……君が敗者復活戦で殺られたら。優勝者は居なくなる」

そうか、私が殺られたら。

新たな参加者が決まる前に、私がやられてしまったら。

優勝者が居なくなったら、また新たな優勝者を選ぶことになるからだ。

「この敗者復活戦は少しばかり変わり種だね、復活がしないようになってるんだよ。そして100人になるまで戦って、生きていた者が新たな参加者となる。それが敗者復活戦だ」

「……一つ、いいですか？」

「何かな？」

「今までの参加者とは……」

「うむ……前回、前々回、少なくとも私のいた世代までの参加者、あるいはさらに前まで、過去生き返れなかった全員が権利を持って

いるのだよ」

「……」

それって、いったい何人なんだ……

「……で、この少年はそれを望んではいなかったのさ」

「え？」

ハカセの隣で俯いたままの少年が呟いた。

「……ボクハ、タツタヒトツノレイガイヲシタダケデ……カレガアラワレタ……」

一つの、例外……

「私が研究したいと言ったばかりに、例外をしただけでアイツは現れた。それからというものの、例外の度に指揮を取り出したんだよ」  
例外……ハカセを研究者にした。その例外が、少年のもう一つの人格を呼び出したのか。

## 第82話

優勝者が決まった瞬間に参加者が一人減るといふ例外が起こった為  
に、少年のもう1つの人格が現れた。

そしてルールに従い、敗者復活戦が始まったのか……

「…… ホントウハ ソンナコトシナクテモ ユウシヨウシャガキマ  
ツタノダカラ ソレデイイハズナンド デモ アイツハ！」

少年は声を荒げた。怒っているようだ。

「それで、今からアイツを止めに行こうと思っているのだよ」

「え？」

「アイツさえ止めれば敗者復活戦は終わり。現優勝者のツバサが生  
き返るんだ」

私が、生き返る……

「で、私達がそれに行っている間に、ツバサは死なないように頑張  
っていてほしいんだ。隠れるもよし、負けないように戦うもよしだ」  
「……」

私はただ、生き残ればいい？

その間、負けなければ何をしてもいいなら。

もしもそれでいいなら。

「ハカセ」

「何だい？」

「…… 私も連れて行って下さい。ただ逃げるくらいなら、私が自身  
で決着をつけます」

「ふむ……いいだろう、そうと決まったら早速……」

その瞬間、

バターン！

扉が開かれた音がした。

そこから現れたのは参加者達だ。今までに見たことのない人ばかりで、過去の参加者達と思われる、その数、数十人以上……

「ふむ、ここも危険になったね」

「どうするんですか？」

「アイツに会うには、私の部屋の奥の暗闇に行かなくてはならない。まずはここを出なくては」

しかし両方の扉は参加者で防がれている。

どうすれば……

その時だった

パチン！ パチン！ パチン！ パチン！

ザシン      ザシン      ザシン      ザシン

ガタン      ガタン      ガタン      ガタン

ゴウー！      ゴウー！      ゴウー！      ゴウー！

右側には刃が、左側には光線が放たれて参加者の幾人かが巻き込まれた。

あれは確か……

「はっはっはっ！ 弱すぎるではないか、過去の参加者達よ！」

「……」

私たちの前に現れたのは、やはりフレイとゼロだった。

「話は聞いていたぞ、早くこの場所を出て、アイツとやらを倒してこい」

「……ここは俺達がどうにかする」

どうやら、私達を助けてくれるらしい。

「君たちは、こちらの味方なのかい？」

ハカセは訊ねた。

「愚問だな、これを見て疑う必要がどこにある？」

「ふむ、そうだね、悪かったよ。ここは頼むぞ2人共」

そう言くとハカセは本を開き、暗闇を呼び出した。

「とりあえずここを出るくらいなら可能だ。皆入ってくれ」

私達は順に暗闇へと入った。

少年の番になった時、

「その少年」

フレイが止めた。

「もしうまくいったらば、私もその例外に入れてくれないか？」

「ナゼ？」

「俺様が生き返った所でどうせ実験台だ。しかし、ここならばまだ自我を出せる……それだけだ」

「……ヤクソク スル」

少年も入っていった。

最後に私とハカセが入り、フレイとゼロ、そして多くの名前の知ら

ない参加者を残して暗闇は消えた。

「ふっ、行ったか」

「……この人数は辛いんじゃないか？」

「なめるなよ、俺様と貴様は第一、第二大会の優勝者。そのコンビにはこれぐらいが調度いいのだよ」

「……そうか」

「うむ……行くぞ！」



### 第83話

私達はあの暗い空間にいた。見渡す限り、私達以外の参加者は見当たらない。

その時ハカセが、

「さて……ここである作戦を発表する」

「ある作戦、ですか？」

「名付けて……バラバラに別れて生き残ろう作戦だ！」

……作戦名が、そのまま作戦内容だ。

ハカセは内容を説明する。

作戦の細かい内容はこうだ。

扉の中にいる参加者達に邪魔されないよう、防衛するというもの。私が優勝者だということを知らない者が多いが、今回の参加者達は知っている。もしもそれを知られた場合……大多数が私を狙ってくるだろう。

敗者復活戦の為、減った数になるまで、つまり皆が生きている限り終わる事は無いからだ。

そして、皆は了承した。

ここは雪国、ある扉を引いて入ると、ここにたどり着く。

そこに今、スノウとマチここに来ていた。

「別に俺一人でもどうにかなるんだぜ？」

「だから何？ わたしはただ自分の意思でここに来ただけ、なんなら、私一人でもいいのよ？」

「勝手に言ってる。俺もここを自分で選んだんだよ」

「……妹と別れた所に似ているから？」

「ふん……お前こそ、お兄さんと別れた場所に似ているからここを選んだんだろ」

「……そうよ」

「珍しく素直だな」

「なによ？ 本当の事言っでどこが悪いの？」

「いや、珍しいなと思っでな……」

「……」

「……頑張っで、生き残ろう」

「……もちろんよ。ツバサを助けるのよ」

手前に数十人の参加者が現れた。

スノウは二丁拳銃を構え、

マチはマツチ箱を持った。

「行くぜ！」

「ええ！」

ここは草原、ある扉を押し入ると、ここにたどり着く。

そこに今、キキとテルが来ていた。

「ここも懐かしいね」

「私達が初めて会った場所だよ」

「うんうん、確か……あの頃に現れたよね、2人組の参加者。最初は卑怯だ〜とか思っでたけど、だからこそテルちゃんに会えた訳で」

「それで、私達も一緒に居始めたんだよね」

「それならこれだよ、いや世の中は分からないね」

「……ねえ、キキちゃん？」

「なあに？」

「さっきの事は本当なの？ キキちゃん、例外の人物になるって」

「うん、席も空いてるみたいだし、あの少年も約束してくれたしね」

「……本当は？」

「……確かに、この作戦が成功したら、あの声は例外でしてくれつつて言ってるけど。私はここが楽しいし、……向こうよりも楽しめそうだから、かな？」

「……」

「人の言った事にとやかく言っではいけないよ。それで自分が良いと思ってるんだからね」

「……うん、分かった。とやかくは言わない。……だから」

「だから？」

「私も残るよ、これは自分で決めた事、とやかくは言わないでね？」

「……あはは、もちろん」

手前に複数の参加者が現れた。

キキは鍵を持ち、

テルは携帯電話を構えた。

「行くよ！」

「うん！」

## 第84話

作戦名 バラバラに別れて生き残ろう作戦

これにおける必須項目は、死なない事だ。

今までは違い、敗者復活戦では倒れたらそのまま、回復せずに決められた人数になるまで目を覚ます事はできない。故に防衛は最低2人以上で行う必要がある、その2人が戦わない限り一人になる事はとりあえずない。

どちらか一人が、殺られてしまわない限りは。

ここは都会、ハカセの黒い扉が一番近い上に、扉が二つある為ここへは4人が防衛へ出た。

防衛とは言っても、扉を抜けさせないだけだ。

つまりあまり数はいない、それがハカセの作戦だ。

「……とは言つてだが、居るじゃないか。人数」

「じゃあないだろ」

東にある扉の前、そこにはレインとモクが防衛へと来ていた。

先ほどから、扉を抜けようとする参加者を迎撃し、それを見た他の参加者を返り討ちにしていた。

「ふう……楽な訳は無いとは思っていたが、ここまでとはな」

何故だか、扉を抜けようとする参加者は途切れず現れた。

ただ外に出たい、そういう訳ではないという理由は、直ぐに分かった。

「ふう……久しぶりね」

「あ！ お前！」

そこに居たのは、あの時の女性だった。手にはナイフを持っている。

「出会って早々だけど、ここから出してくれない？」

「訳を聞こうか？」

モクが対応した。

「優勝者を潰す為よ」

「やはりか、ならここを通す訳にはいかない」

「あなたには聞いてないわ、通してくれない？ レイン」

「断る」

「どうして？ 生き返りたく無いの？ 優勝者が居なくなればまた大会が始まって、生き返るチャンスがまた来るのよ？」

「だからどうしたんだよ、オバサン」

「オバ……！」

「俺はそんな、卑怯なマネはしたくないんだよ」

「話では分からないよね、ガキが！」

「言ってる、オバサン」

「この、ガキが……！！！！」

ドスン！

「がっ！？」

「……」

モクは女性の体を木の根で貫いた。

木の根が抜かれた女性は、その場に力無く倒れる。

「話を聞く必要は無い、俺達はただ防衛だけしていればいいんだ」

「分かってるよ」

「……彼らに悪いと思っているのか？」

「……少しはな、でも、そんなの気にしてたら絶対後悔する。だから、俺はここを守るんだ」

北にある扉の前、そこにはミナトとマイが防衛に来ていた。ちなみに、彼らが防衛に行った場所以外にも空間と扉は存在するが、それは気にしないことにした。

何故ならそんな数を相手に出来ないからで、互いに戦いあっているのも理由ではある。

しかし一部の参加者は気づいてしまった。優勝者を倒したら、まだチャンスがあると、その為優勝者を探しに空間を出ようとする参加者が現れた始めた。

「という訳で、この先には行かせてはいけないよ」

「……分かってる」

「しかし、アレは本当なのかな？」

「……疑ってるの？」

「少しだけ、でも、それが本当なら私達は負けられないよ」

「……私も」

数十人の参加者が扉に向かって来る。

ミナトはロケットを持ち、

マイは2人の人形、リアとロマを前に置いた。

「行くよ！ マイちゃん」

「うん！ ミナト」

## 第85話

皆が防衛に向かっている中、私達三人はハカセの黒い扉の近くへとたどり着いた。

防衛のおかげか、ここに来るまで参加者にはあまり会わず、出会った際は私やハカセが戦って蹴散らしていた。

そして、たどり着いた。残り50メートルと行ったところ、そこにあったのは見慣れた黒い扉と、見慣れない参加者の集団だった。

彼らが自分たち戦っており、私達、そして黒い扉にも気づいていないみたいだ。

「ふむ、あの人数はきつと元からこの空間にいた奴らだな。念のために扉を気づかれないようにしておいてよかった」

「どうしますか？」

「中に入れてしまえば、扉を消す事はできるから」

「ナカニ ハイレバイイ」

「分かりました。私が道を開きますので、2人はその内に…」

「その必要はありません」

聞いた事のある声を聞いた。

振り返ったそこにいたのは、

「アロマさん……」

「私が道を開きます。その内に入ってから、扉を閉めてください」

「頼めるかい？」

「ええ、ただし一つ、約束してください」

「約束？」

「私も、例外の人物にしてください」

「……ヤクソクスル」

「アロマさん……なぜ」

「大丈夫です。私の戦い方は、あれだけではありませんから」

そう言い残して、アロマは参加者に向かって走り出した。

その姿に数人の参加者が気づく、その瞬間、ポケットから線香の束と拳銃型のライターを取り出して、線香の束に火をつけ、

ビシュ!

参加者へと投げつけた。

カカ カカ カカ カカ カカ

投げられた線香は参加者にの体や頭に当たり、数人が倒れた。その倒れた人達の間、僅かながら黒い扉へ直進する道が出来た。

「今の内に!」

「恩にきる!」

「アリガトウ」

「死なないで下さい!」

それを見た私達は、扉へと駆け込んだ。

三人が中に入り、黒い扉が消えた。

それを見たアロマは、

「さて……守る物は無いので逃げても構わないのでしょうか……何となく、ここで戦いたくなりました」

線香を構え、戦い始めた。



「さあ……ここからが本番だ。私から離れてはダメだよ」  
「……はい」

八カセの部屋、書斎の奥にたどり着いた私達。

あまり時間を使うのは良くないとわかっているけど、そこで私は、  
「あの……八カセ」

ある事を聞いてみようと思った。

その時、

「……ツバサ、ミカは、君の中に帰ったんだね？」

逆に尋ねられた。

「え？ はい」

「そうかい……」

「……八カセ？」

八カセの声は、どことなく沈んでいるように聞こえた。

「……ツバサ。ミカは誰に思われて存在していたのだと思う？」

「……私、ですか？」

「うむ、そう考えるべきだ。あの兄妹みたいなもので、2人で一つ  
だったんだ」

「……でも、私は居ます」

スノウとマチのような存在なら、ミカが消えた瞬間、私も消えてい  
る筈だ。

「それは、ツバサを思う人物が別に居るとい事だ」

「……はい」

それは分かっていた。ミカを知らなかった私を、思ってくれる人な  
んで、一人しかない。

「ふむ……思い、思われて、思われず、思って、思う……やはり、  
ここは研究のしがいがあるな」

「八カセ？」

「……あのフレイとか言った少年。私は、あいつがいた場所で働い  
ていた」

「え？」

急に話題が変わった。

「……自殺になるような研究はしていなかった筈だが、今のあたりは分からない。故に自殺が出るような実験を行っているのか……」

「……ハカセ？」

ハカセにしては珍しく饒舌だ。しかも、自らのことばかり。

「……すまない、今は急ぐ時なのにおかしな事を言ってしまった」

「いえ……始めてハカセが自分の事を話して、驚いています」

「ふ……さあ行こうか、話ならば、歩いている途中に聞こうじゃないか」

「はい」

書齋の奥、そこは先の見えない黒。この先に、もう一人の少年がいる。

更なる闇の奥へと、私達は進んだ。

## 第86話

暗い闇の先は、同じように暗い空間。常に歩いてた場所も暗くはあったが、ここは更に暗かった。

前に進んでいるのかも分かりにくい場所だが、互いの姿はまるで発光しているかのようによく見えた。

「この先にアイツはいるぞ」

八カセを先頭に、私達は進んでいた。

「さてと、話を聞こうか？」

「……アイツとはいつたい、何者なんですか？ 私とミカみたいなものだと言っていましたか……」

「一番気になっていたことだ。今も隣を歩いている少年。そのもう一人だというが。」

「うむ、まさにその通りだ。そしてアイツは、闇の少年」

「闇の……少年？」

「人には光サイドと闇サイドがある。私の自論だ。その強い方が人の性格として現れるのだが、ツバサや少年のように、稀に光サイドと闇サイドの両方に人格がある場合がある。だが普通なら片方が強いので現れる事は無いのだが、何かしらを引き金に現れる事がある。人はそれを、二重人格と呼んだりもするのさ」

「……」

「よく、A B型は二重人格が多いとか言うが、そんなもの関係ない。ただその人の両サイドの力関係が現れたものなのだよ」

「……なら、私は闇サイドですね」

「ふむ……確かにミカの方が光っぽいな、というか、闇の訳が無いだろうあの性格で」

「はい、あの性格で」

私と八カセは笑った。

こんな時だからこそ、私達は笑おうと思った。

しかし、

少年はそうもいかないのか。先ほどから下を向いたまま私達の後に  
ついて来ていた。

「……あなたは、光サイドですよね？」

ふと、尋ねてみた。

「……タブン」

少年は下を向いたまま答えた。

「……ゴメンナサイ ボクガガンバラナイカラ コンナコトニ  
ナツテシマッタ……」

「それは違うぞ、少年」

ハカセは歩き続けたまま、こちらを見ずに言った。

「世の中ってのは、例外があるから楽しいんだ、だから少年がした  
事は、決して謝る事ではない」

「……デモ」

「別に私達は謝ってほしいなど言っていない、むしろ少年は手伝っ  
ているのだ、そんな少年が謝る理由などどこにあるんだ？」

「……」

「それに、少年はかなり初めの方から彼女のイレギュラーに気づい  
ていたのだから？ そうでなければ、ツバサ達が初めて私のところを  
訪れた理由が見つからない。一片でも見つけければ後は私の役目だ。

その一片を渡した君は、十分すぎる活躍をしているんだよ」

そうか、私がレインに勝った後、起き上がったレインが黒い扉を探  
せとあの少年から聞いたと言っていた。

それは、本当に私宛のメッセージだったのか。

ミカと私の事を、ハカセに伝えるための。

「それでも謝りたいと言うのなら……言葉ではなく、態度で示し  
たまえ。私に、そうしたようにな」

「……」

「なに、今さら例外は怖くもないだろう？ なんなら、アイツがも  
う現れないように、私達がボコボコにしてやるから、少年は気にせ

ず例外を続けたまえよ」

「……アリガトウ」

「それは終わった時に、出来れば態度で示してほしいね」

「……ヤクソク スル」

「決まりだね。ツバサ、私が前に言った事を覚えているかな？」

「はい、迷路の事ですね」

「うむ、このままいけば、私が言った通りになるかもしれないぞ」

「……ハカセは、闇サイドが強くて出ているようですね」

「ははは、闇と光は対なもの。光があるから、闇がある、光が見えるのは、闇があるから、闇の中には、光があるものだよ」

「……そんなもの、ですか？」

「そんなものだよ」

ハカセの言葉は妙に難しいようで、子供じみている気がする。

それでも、私には理解できないようだけど。

私達は、暗闇を歩き続ける。

暗闇の中を、

声も出さずに歩き続ける。

皆の為に、

自分の為に、

私達は先を急いだ。

そして、たどり着いた。

## 第87話

「アイツだよ、闇の少年」

そこに居たのは、少年と同じ姿をした。真っ黒の少年だった。

「アナタタチハ ナンデスカ？」

声も似ている。

しかし、違う所はある。

正反対の色と、正反対の性格だ。

「モウイインダヨ カノジヨガ ユウシヨウシタンダ イマサラ

ハイシャフツカツセンハ ヒツヨウナイヨ」

「イヤ ヒツヨウダ サンカシャニゲンシヨウガアラワレタシユン

カン ハイシャフツカツセンハ オコナウ ソウイウ ルールダ」

「はあ……闇サイドのくせに、ルールに忠実なのはどうなんだろう  
ねえ」

「アナタハ ハカセ アナタハナゼ ソチラニ ミカタヲ シテイ  
ルノデスカ？」

「簡単さ、私を研究者にしてくれたのはこっち、光サイドの少年だ  
からな。恩を仇で返すような事はしないさ」

「ソウデスカ」

「そうですね」

「……」

私は狙っていた。

それがハカセの作戦だから。

「私が気をまぎらわすから、その間にツバサが闇の少年に……一撃  
でいい、入れてくれ。なるべく強力なやつを。そうしたら後は、私  
に任せればいい」  
と言っていた。

隙をつき、ただ一撃当てればいい。

私は十字架を構える。

鎖を左肩に巻き、重力をかける準備をする。  
速さが必要な今、高速十字斬が必要となる。  
後は……

チャンスを伺うだけだ。

「その考え方は止めないか、闇の少年」

「ジブンハコレガ キマリダカラ ヤメルワケニハ イカナイ」

「……決まりなんて知るかよ。君にも色々あるのは分かる、でも今それを述べる時じゃ無いんだよ」

「キマリ キマリデス」

「ふう……前々から話が通じないやつだとは思っていたよ……仕方ないな」

ハカセは本を開き、ペンを走らせた。

ビリ

何かを書いた紙をちぎり取り、

パタン

本を閉じた。

「そっちがルールを守るなら……こっちは、ルールをぶち壊す！」  
ピシユ

ハカセはペンを投げつけた。

闇の少年は反応して、それを手で取った。

少年の意識がペンに集中した。

その隙を、逃さなかった。

スパッ



## 第88話

「ナ……?」

十字架が、闇の少年を切り裂いた。まるで塵気楼に手を加えたように歪んでいる。

「キマリハ…カナラズ…オコナワ…ナケレバ…」

「そんな考えいらないよ」

ハカセは闇の少年に近づき、その頭に先ほどちぎった紙を置いた。

「戻って勉強しな、世の中とは臨機応変が必要だと、ルルは時として破るものだよね」

「ルールハ…リン…キ…オウ…ヘン…ヤブル…モノ」

「そうさ、さあ、少年の中に帰りな」

「……」

闇の少年は消え去った。

しかし、どこに行ったのかは分かる。

少年の中だ。

「……終わったん、ですか?」

もっと恐ろしい攻撃を予想していた。

「まさか、少年が襲いかかってくるんでも思ってたか?」

「違っんですか?」

「少年には思い形見はおるか、戦闘力など欠片も無いんだよ」

「では……何故私が一撃を入れる必要が? それに、先ほどの防御は」

「それさ、戦闘力が全く無い少年は、守りが強いんだ。だから隙をついた一撃を入れて、私が紙に書いた事を実行するだけ、それで終わりさ」

「では……」

「うむ、ツバサの優勝だ」

私の、優勝……

これで私は、生き返るのか……

なんだか、変な気持ちだ。

元より死んだ心地が無いからだろうけど。

「オメデトウ アラタメテ アナタガ ユウシヨウシャデス」

光の少年にも祝福された。

「ありがとう」

「さてと、光の少年よ。お礼ならば態度で示してくれるよね？」

「……ウン ヤクソクシタ ヤクソクハ マモル」

そう言くと少年、は語りかけた。

私達にはなく、空へと、特定の人物達に語りかける。

ユウシヨウシャガ キマリマシタ

タイカイハ コレデ シュウリョウデス

シカシ

イマ コノコエガ キコエテイル ミナサンハ

レイガイヲ ミトメマス

イキカエリタイ カタハ ノゾンデクダサイ

コチラへ テンソウシマス

「……光の少年は、ルールは破っても、約束は守るんですね」

「そんなもんさ、光にしる闇にしる、それは自分だ。どこかが違って、どこかは同じなのさ」

## 第89話

数分後、現れた人数は6人。

レイン、ミナト、マイ、スノウ、マチ、モクダ。

「これだけかい？」

「フレイとゼロから伝言、例外の人物にしてくれと」

「私はキキとテルから……」

「……あの件よろしく」

「言われた!？」

「アロマさんも、同じような事を言っていました」

「ソウデスカ……ヤクソクハ マモリマス」

「皆おめでとう、私が言った通りになっただろう?」

「そうですね、迷路の出口は一つじゃない、ゴールへたどり着くのは決して一人だけではない……こういう意味だったんですね」

「そういう事さ」

「デハ マズハユウショウシャカラ コチラへ」

「はい……」

私は少年へと近づいた。

「……」

しかし、まだ……

「……ワカレノアイサツガ ヒツヨウナラ ドウゾ」

少年は察したのか、そう言ってくれた。

「……ありがとうございます」

私は皆の方を向いた。

「皆、どうもありがとう。皆のおかげで、私はこうしてここにいられる。私は、生き返る事ができるの」

包み隠さず、私の思いを皆へと伝えた。

「へっ、何言っただよ、ツバサが優勝したのは、強かったからだ

る

「そうよ、私達を2人同時に相手して勝ったんだもの。実力で勝ったのよ」

「ありがとう。スノウ、マチ、お兄さんと妹さん。見つかるの良いね」

「もちろんだ」

「もちろんよ」

「優勝おめでとう、ツバサ」

「ありがとうモクさん。あなたも生き返ったら、今度は告白を断らないでくださいよ?」

「ふっ……分かってるよ」

「……おめでとう、ツバサ」

「ありがとう、マイちゃん」

「……もしも……向こうで会えたら……友達になって、くれる?」

「もちろんだよ」

「……ありがとう」

「もちろん私もだよ、マイちゃん。というか、私達はもう友達ですよ?」

「そうだよ、私とミナトとマイちゃんは、もう友達よ」

「……うん……私達は……友達」

「おめでとうツバサ」

「ありがとうレイン」

「また、どこかで会えたらいいな?」

「そうだね」

「まあ、俺は様々な所を転々としてるからな、どこかで会えると思っせ」

「分かった、その時を楽しみにしてるね」

「おう」

「達者でな、ツバサ」

「ハカセこそ、お元気で」

「私は何時でも元気さ。もしまた来るようなら連絡をくれよ、助手にしてやるからね」

「さすがにそれは……」

「冗談さ。生き返った者がまたここに来る事は無いからな……じゃあ、またどこかで会える事を楽しみに」

「はい、どこかで会える事を楽しみに……」

「ワカレハ オワリマシタカ？」

「はい」

「デハ アナタヲ シヌチヨクゼンニ オクリマス」

そこで、私の意識は無くなった。

## 第90話

……回りが暗い

目を開けてないからだと思ったら、目は開いている。

どこかに浮いてる気がする。

こんな感じ……どこかで……

確か私は……生き返る筈だ。

でも、何か忘れている。

まだ、話して無い相手が

「そうですねよ」

……ああ、忘れてたよ

「ひどいです」

ゴメンね、つい

「……でも、思いだしてくれたのなら、それでいいです」

ありがとうございます

「優勝、おめでとです」

うん、これで生き返るね

「私もですよ」

そうだね

「まだ、名前は思い出せませんか？」

……うん

「他の事は？」

大丈夫、全部思い出してる

「後は名前ですね」

うん、このままならいずれ思い出すよ

「じゃあ、今はとりあえず」

何？

「ツバサ、私は消えてから、あの少年について調べていました」

……それで？

「あの少年……いえ、あの子も自殺者でした」

……

「死因まではわかりませんでした。あの子はとても凄い力を、願う力がありましたのです」

願う力？

「それで少年は願いました。どうか、僕みたいな人に、生き返るチャンスを与えてください……と」

だから、大会が？

「はいです。全ては難しいそうなので、戦って勝ち残る程の人を生き返らせる力を、少年は手に入れました」

……

「そこに現れたのが、ハカセのように……例外を望む者です」  
ハカセか……

「少年にとつてそれぐらいは可能なのですが。自らが思った通り、自殺した人は皆生き返りたい、とは思っていない者がいる事を知り、少年は悩みました」

そしたら……アイツが

「はい、闇サイドの少年が現れたのです」  
でも、もう大丈夫だよ

「おそらくはですがね。今回のような例外が無い限り、闇サイドの少年はもう現れません」

そうか……良かった

「何故ツバサが気にしてるのですか？ もう関係が無くなるのですよ？」



……ミカは、闇があるね

「へ？」

一度は関わったんだからさ、気にしない理由なんてもうないじゃない  
「……そうでしたね、すみませんです」

やっぱり、私が闇サイドだよ

「違いますよ、きっと私が闇サイドで……」

いや、私だよ、だってミカのその性格で闇な訳はないもの

「む……どういう意味ですかそれ？」

ふふ、気にしないで

「むっ……あ……そろそろですね」

そろそろって？

「お別れです」

お別れ……

「ですが、さよならではありません。私はあなたの中の光、もう一人のあなた。いつまでも私は、あなたの中にいますですよ」

……うん

「では……さよならです。……」

さよなら……ミカ

ガシッ！

「!？」

「何やってんだよお前！」

目の前は高所から見る景色、体制はまさに飛び降りようとしている姿。

しかし、落ちていない。

何故なら、十字架を握った右手を、彼に捕まれているからだった。

つまりここは、現実。

私が死ぬ直前の、場所。

私は、生き返ったようだ。

第90話（後書き）

長く続いた『オモイノカタミビト』 ついにツバサが生き返り、物語  
が終わりに向かおうとしています。

後ほんの少しですが、お付き合い願います。

## エピソード

「すまなかつたな……俺がちゃんと話しておけば、そんな事にはならなかつたのに……」

「……ううん。私が早とちりしただけから、あなたには、お姉さんがいるって聞いた事あつたのに」

「……」

「ごめんなさい、少しだけ一人にさせて」

「ああ……分かつた」

私は一人、街を歩いていた。

どうやら、生き返つたようだ。

死ぬ前の記憶があり、あの時の記憶も残っている。だから私は、一度死んだ。

そして、生き返つた。

……こんな話、誰も信じないよな……

でも、私は確かに死んだ。

確かに生き返つた。

それは確かな事だ。

誰が何と言おうと、私はそうだったのだ。

……ふう、頭がすつきりした。  
落ち着いて街を歩こう。  
見慣れた景色、幾日かぶりのはずだけど、どこかそれとは違う懐かしさがある。  
どこかで見た景色……いや、私が死ぬ前にいつも見ていた景色のはずなのに、  
何か、違和感と懐かしさが入り混じったような感覚があった。

ツバサ

え？

この声は……

「……ミカ？」

聞こえますか？ ツバサ

「うん。聞こえるけど……」

それは良かったです

「いったいどうしたの？」

私、どうやら少し特別な力を手に入れてしまったみたいです

「特別な力？」

はい、あちらと話ができるようになったんです

「話が？」

はいです、まるで電話のようですね？

「そうだけど……どうして……」

……分かりません。ですが、手に入れたのは事実です

「……」

私は街道を歩いている。

辺りには色んな人が、歩いている。

そして、聞きたいのですが

「………何か？」

仲の良さそうな、兄妹とすれ違った

仲間だった皆さんの事、覚えていますか？

「………」

人形を2つ持った女の子と、その両親らしき2人の男女とすれ違っ

た。

……覚えて、ないんですね？

「……何でだろうね。その時の記憶はあるのに、皆の事はぼんやり  
としか思い出せないんだ」

顔もあいまいで、名前は全く思い出せない。

ハンチングを被った少女とすれ違った。

仕方のない事です。それが決まりでしたから

「え？」

帽子を被った少年とすれ違った。

このままだったら、皆さんの事は完全に忘れてしまっ……と、あの  
少年が言っていましたです

「そんな……」

眼鏡をかけた男性と、その彼女らしき人とすれ違った。

でも安心してください、ハカセにこう言われました

「ハカセから？」

もしも皆の事を忘れなくなったら。

ツバサが完全に忘れる前に、皆に会って、十字架を見せるんだ。思いが残ったそれは、皆が皆を思い出す力を備えているから。

それに、ツバサが皆を忘れない限り、皆を思っている限り、

思いは決して、消える事は無い。

本当の死とは、忘れられる事だからね。それだけは決して、忘れないでくれ。

「……………」

以上が、ハカセからの伝言です

「……………ハカセに、伝えて」

なんですか？



「……分かりました。私が皆に会って、思いを残して回ります……  
って」

分かりましたです。もちろん、私も手伝いますですよ

「ありがとう、ミカ」

いえ、私も思いを繋げる力を手に入れたのですから

思いを残す者と、  
思いを繋げる者、

私達は、思いを思っていく者なんだ。

それが私達の、生きる理由だから



## エピローグ（後書き）

開始が去年の11月29日。そこから一日おき、少し休んだ時や番外を書いた時もありましたが、これにて、『オモイノカタミビト』完結です。

この作品は、過去に自分が書いた物語の中で、途中で投げ出してしまっていたものでした。それをここに、あえて元のままを多く活用して加筆を少なめに投稿していました。今と比べると、最初のころはこんななんだつたんだなと懐かしい気持ちになり、新たに創作意欲が湧きました。

誰かに思われていることで存在できる主人公達、その思ってくれた人の為、彼らは戦って願いを叶えるのでした。その数は年々増え続け、それだけ自ら命を落とす者がいるということ、しかしそれは同時に、命を落とした者を思っていた者がいたという事でもある。

思い、思われ、想って、想われている  
人は一人では生きていけない。誰かに思われることで、存在出来る

本当の死とは、誰にも思われずに忘れられてしまう事  
そんな気持ちを込めた物語でした。

ツバサ達が生き返って大会も終わり、この物語はこれで完結ですが、あえて生き返らなかつた者も居て、まだまだオモイビトは多く現れるのです。

勘のいい方なら、この言葉でぴんと来るでしょう。

感想、評価、および一言、お待ちしています。

ここまで読んでくださったその貴方、何か残していきませんか？

それでは、風紙文でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2179p/>

---

オモイノカタミビト

2011年6月15日12時03分発行